



写真1 特殊器台1



1 内面上半



3 突帯設定沈線



4 突帯下の丹塗り



2 内面下半



5 丹塗り接合線

写真2 特殊器台1 各部



写真3 宮山墳丘墓副葬品



写真4 竪穴式石槨全景（南から）



写真5 竪穴式石槨壁面（西から）

# 宮山遺跡出土遺物の研究

宇垣匡雅 岩本 崇 ライアン ジョセフ

## はじめに

宮山遺跡は岡山県総社市三輪に所在する墳墓遺跡である。1963年に高橋護氏をはじめとする研究者によって実施された発掘調査は、その後に展開する特殊器台研究の起点として研究史に刻まれる。図1は調査の状況を説明した資料である<sup>(1)</sup>。

発掘調査の成果は多岐にわたるが、弥生時代の墳墓や初期の前方後円墳の研究において、おもに2つの点で注目を集めてきた。1つは前方後円形の墳形をもつ宮山墳丘墓についてである。後円部に設けられた竪穴式石槨は長さ2.65mと短く、飛禽鏡、鉄刀、鉄ヤリないし剣、鉄鏃などを副葬する。弥生時代の墳丘墓と前方後円墳の要素が相半ばするとも言え、前方後円墳成立をめぐる議論において常に注目されてきた。もう1つは、この遺跡から出土した特殊器台についてである。特殊器台は墳丘墓に伴って出土しているが、それ以外に棺に転用された個体がある。通常、特殊器台は割り砕くなどの処置が最終的になされ、その後の流出等のため破片の多くが失われることが多い。棺に用いられた資料は保存状態が良好で接合復元がなされ、全形を知ることができる資料、特殊器台の典型として広く知られてきた。さらに、この遺跡の特殊器台は、特殊器台の最も新しい型式として遺跡名を冠して宮山型と命名されたが、吉備地域においては同じ文様をもつ資料は出土せず、箸墓古墳など大和の出現期古墳にこれが伴うことが明らかになり、さらに注目を集めることになった。遺跡、そして資料の重要性から、棺転用の個体は重要文化財に、遺跡は県史跡に指定された。

調査の概要は『岡山県史』および『総社市史』（高橋ほか1986・1987）（以下、前報告と呼ぶ）に示され、主だった資料についての報告はあるが、遺構や遺物の全体像は未報告となっている。報告書の形で資料が公開されることが望ましいが、現在それを作成することはむずかしいため、出土遺物についての報告を行う。3章を岩本、4章をライアン、他を宇垣が担当した。各章の図等はそれぞれの執筆者が作成した。なお、1・2章は前報告を参照し、調査時の写真等による判断を加えて記載した。

## 1 遺跡の概要

三輪山丘陵は総社市街が広がる高梁川東岸の平野にむかって南東から張り出した丘陵で、東西、南北とも1.1km、最高所は標高96mである。遺跡はこの丘陵の西に細長く張り出した尾根の上に広がる（図2・3）。標高30~40mの狭い尾根は緩やかに西に下降し、現在切り通しとなっている部分の西側ではふたたび東側と同程度の高さとなって西にのびる。遺跡の東側は標高80mの山頂となり、ここには古墳時代前期の天望台古墳（前方後円46m）、そこからやや下降した稜線上に続いて築かれた三笠山古墳（前方後円61m）が所在する。

宮山遺跡は尾根のつけ根付近から切り通しまでの長さ、東西90mが一応の範囲となるが、後述のように弥生時代後期の土器は切り通しの西側からも出土しており、遺跡の範囲はさらに広がると見込まれる。宮山墳丘墓は尾根東側の高い位置に所在しており、特殊器台棺は西の先端近くに位置す

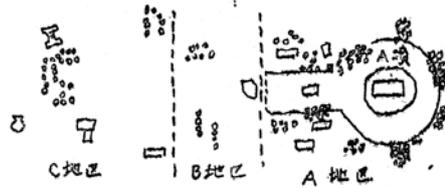
# 三輪山調査ニュース

第2号

8月21日  
 統社市下三輪  
 天理教吉竹市  
 教所  
 三輪山遺跡  
 調査団

これまでの調査で

明らかになったことと問題点



発掘開始よりはやくも二ヶ月の間開が経過しましたが、天候にも恵まれ、部落の多くの人々を待たずして調査は順調に進んでいきます。これは皆様方が自分たちの祖先の歩んで来た道を明らかにしようという崇高な御志に支えられたものと、私たちが調査団一同は深く感謝の意を表したいと思います。二、にそのご好意にこたえるために、今までに明らかになったことや、今後の課題となるいくつかの向題点をあげ、皆様のご意見、ご批判をいたすければ幸いです。

一、A地区墳丘の外移について、前方部の前面の基盤が多くの試掘調査を行なったにもか、わらわはのりして

ません。しかし、右の基盤の奥合をの他から、この墳丘が前方部でないしその程物であることは明確です。また、ここも前方部には非常に少いことなどから、後部部が特別な意図をもちて建てられ、つくりだされているに違いなく、前方部は意図をもつてつくられておらず、したがって墳丘の移動も確立してはいないという結果を招いたと考えられます。

二、A地区C地区のシスト(燧岩)の相互関係について、出土の土器から年代的にBもCもAの関係が分ります。最も新しいと思われるA地区のものでも古墳時代の一般のシスト(大体5世紀)より確実に古く、またシストのうちC地区のものは他に比べて一般的に小さい。

A地区のシストからは例の特殊層台は発見されていません。

三、A地区とシストとの関係、今までのところ、小石右面に伴って特殊層台の破片がでており、A地区と層台とが関連をもつたものであることは明らかです。この層台はC地区にあるものと同一なのでCとAは年代的には同時期と考えられます。このことからBとCとが集団墓が営まれ、A墳もCの段階で作られた。そしてその後A墳の周辺にA地区のシストが作られたと考えられたいです。

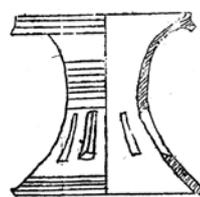
四、CとA墳が同時期であることから、出土が末期にすぎない大きな墳丘をもつ被葬者がいたという日本古代史の重要な問題が提起されようです。

五、シストの方向の問題、いま、どの側では遺跡列に対してどの方向の方向があるのかわからないかと思われれます。これは何を物語るのでしょうか。

以上数点をあげましたが、皆様の御意見を伺いたいと思っております。(八十七頁)

## 関係年代表

西暦	遺跡	年代	事項
前400	福日貝塚 森前地遺跡	縄文時代	石居の使用 船と熊の生括
前200	高尾貝塚		稲作の農業はじまる
紀元0	見島山遺跡 庄利上栗遺跡	弥生時代	小田家がでてはじまる
200	備前厚塚		大和を中心とした政治力が大きく発達する
400	造山古墳 作山古墳 二ツもり塚古墳	古墳時代	地方豪族の勢力が伸びる
600	園分寺		大化改新 中大兄の御令制 國家
800		奈良 平安	



1, 2 弥生後期  
3 古墳時代

常用語解説  
 層台  
 つぼなどものをせる台として作られたもので、大形のものとして小形のもの二種類がある。弥生時代の後期から用いられた。古墳時代まで使われたが最も盛んに用いられたのは弥生時代後期で、この時期には大形のものも盛んに使われている。三輪山遺跡で発見された層台は、実用的形をもとにして特別に豪華な装飾用には用いられたものと考えられます。

図1 広報資料



図2 遺跡位置(1) 1 : 60,000



図3 遺跡位置(2) 1 : 10,000

る。それ以外の埋葬は尾根線に沿った幅約30mの範囲に点在する。

基本資料として用いた図4は、調査に参加した小野一臣氏が作成した図面である。測量図を縮小トレースし、調査の進行状況を把握、整理するために作成した図のようである。各埋葬の位置が記されるが、それぞれの長さや種別は省略されている。埋葬には番号が付くものとそうでないものがあるが、番号があるものは調査着手ないし終了、ないものは未調査と思われる。等高線は墳丘墓後円部頂を仮0とする1m間隔である。なお、図1掲載の略図にもあるように、墳丘墓の東側から突出部前側の埋葬20付近までをA区、そこから1・17付近までがB区、そして丘陵先端側をC区と3地区に分けて調査は進められた。また、宮山墳丘墓は調査時にはA墳と呼称された。

図5-1は光本順氏らによる現地形の測量図である(光本ほか2020)。測量は SfM-MVS と3次元レーザーでなされており、ここでは前者によるものを示した。等高線は10cm間隔である。

同2は前報告に示された図で、調査時の測量図・遺構図によるものである。

同3は1980年頃に藤田憲司氏が作成した墳丘墓の測量図である(藤田・柳瀬1987)。等高線間隔は25cmである。発掘調査の後、墳丘墓後円部の竪穴式石槨は観察できる状態であったが、崩れを防止するためこの測量よりも後に埋め戻されている。

墳丘墓以外に配石土壌墓(木棺)、木棺、箱式石棺、土器棺が検出された。これらについては前報告を踏襲し、番号にBを冠して表記する。なお、箱式石棺と呼ばれたものは板石を用いるいわゆる箱式石棺ではなく、大形円礫を2段程度積み上げて壁面を構築したものである。

これらの埋葬は尾根全体に分布するが疎密があり、B8~16、B26~28、B30~32などはまとめて所在し軸線が平行あるいは直交の関係にある。図5-1に見られる階段状の小規模な平坦面は、発掘調査による地形の改変の可能性があるが、埋葬小群ごとに小規模な墳丘が形成されていたとも考えられる。B12と28の間の平坦面には埋葬が見られないが、本来それがなかったのか未調査箇所か不明である。

B8~16のグループの西下方側には東側に面をもつ列石がある(点線で表示)。西側にほぼ流出した墳丘が所在しており、B8・11・11南の埋葬はその墳

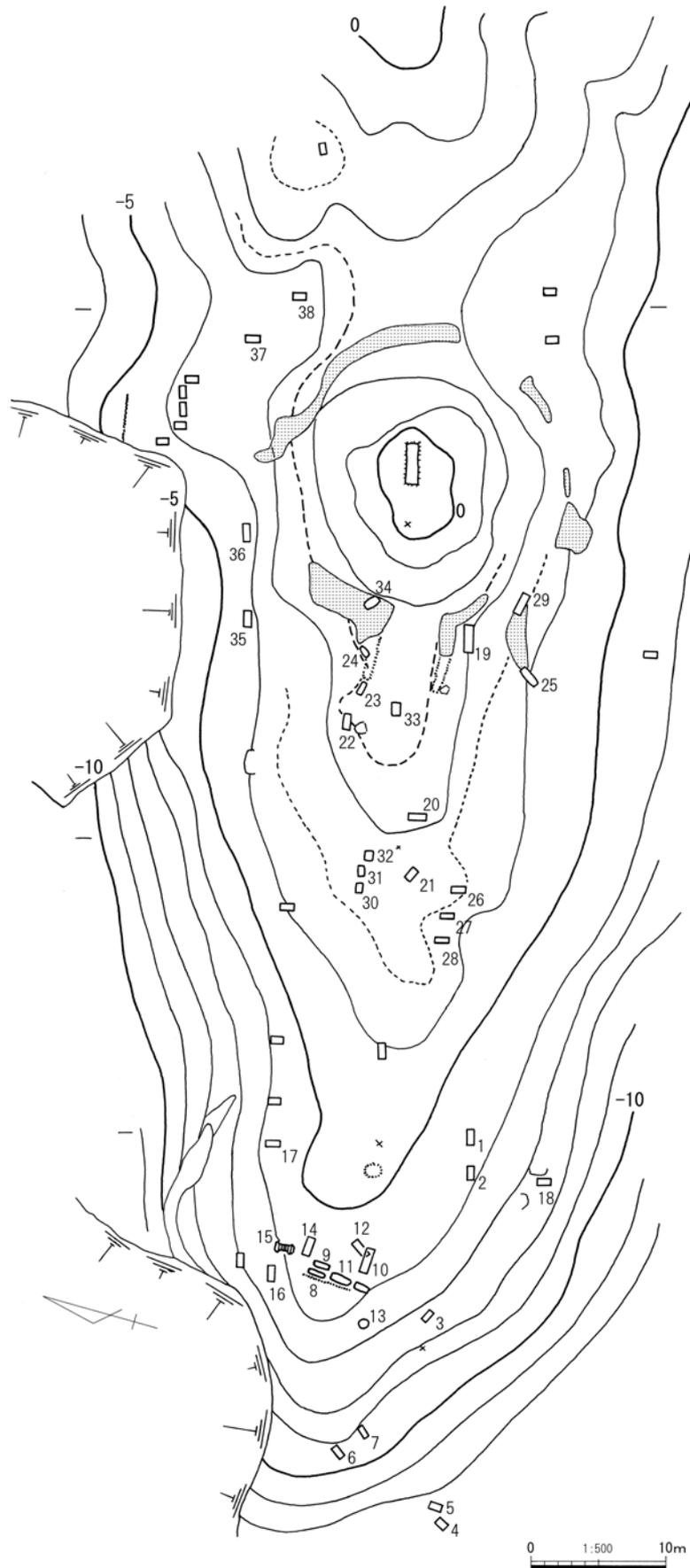
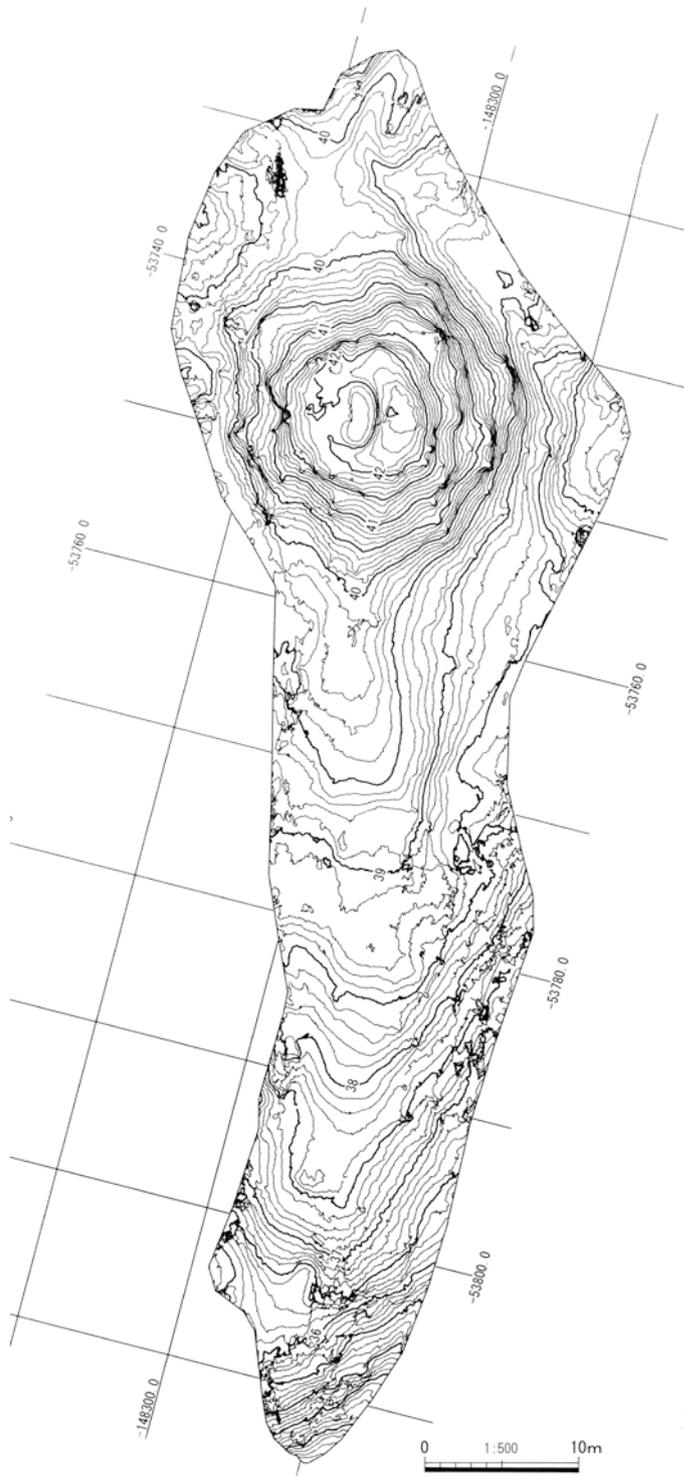
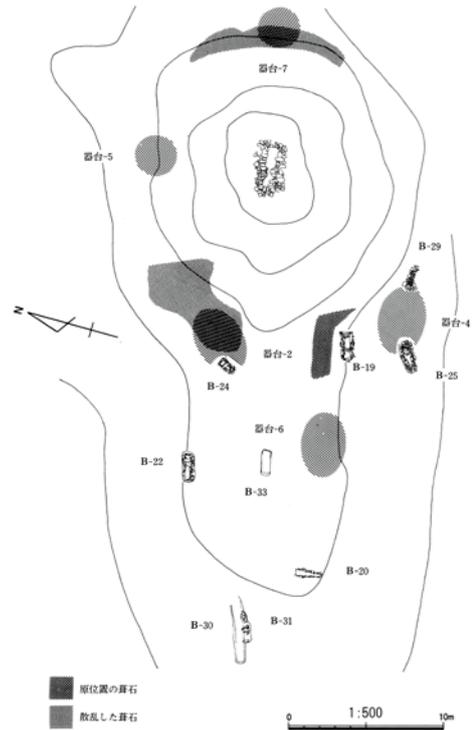


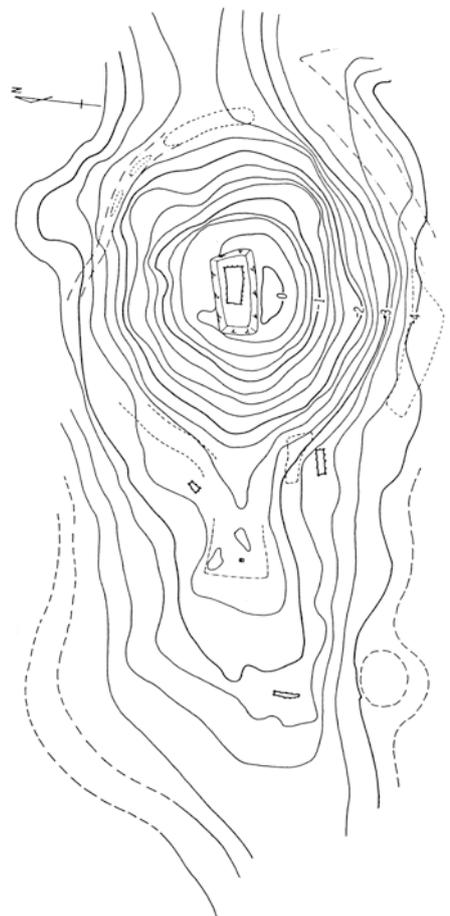
図4 遺跡全体図



1 光本ほか 2020



2 高橋ほか 1986



3 藤田 1987

図5 墳丘・地形測量図

丘外埋葬となるようである。これらは配石土壙墓（配石木棺）である。

特殊器台棺 B15は尾根西端の墓群中に所在する。B8・11と軸線を同じくするようで、同じく小方墳の周辺埋葬となるのかもしれない。特殊器台1を用い、特殊器台1では長さが不足する東側の覆いなどには、大形破片である特殊器台2・3が用いられた。特殊器台棺は小口側を中心に大形の円礫が配されていた（図8）。

B30はB31を掘削して設けられる。長大で木棺底面の横断面はU字形、古墳時代初期の鉢形土器を伴う。

## 2 宮山墳丘墓の墳丘と埋葬施設

前報告によれば、全長38m、後円部径23m、同高さ3mである。前方部上は開墾がなされ表土が流出していたが、墳丘測量図に見られるように後円部側が削り込まれた状況はなく、本来低平であったと思われる。前方部前側が削平を受けたようで、前端は不明瞭である。調査後の資料になるが、図5-1・3にもとづき、墳丘の主軸と直交して所在するB20の手前に前方部前端を考えれば、全長37m、後円部径22mで、前方部は相応の長さをもつことになる。後円部高さは墳端が下降する南側から4mとなる。大形の円礫を用いた葺石を伴うが、くびれ部の一部に残存する以外は崩落し、落下石材が石敷状に後円部の裾をとりまく状況であった（図4ドット表示、図7）。後円部の上半は盛土で形成される。

墳丘のくびれ部から前方部側面にかけてB22以下の「箱式石棺」が所在する。B19・24は葺石面を掘削して、B25・29は葺石材を転用して構築されており、墳丘墓築造後に設けられたものである。

竪穴式石槨は後円部中央に設けられる。長さ2.65m、幅1.0m、高さ1.2m（近藤1998）、花崗岩の角礫と大形の円礫で構築される（写真4・5）。蓋石はなく木蓋と考えられており、床面は礫敷で平坦である（図9～12）。

木蓋を用いることや内法の規模は弥生時代後期後葉～末葉にこの地域で築かれた石槨の諸例と共通するが、それらと異なる点がある。後葉～末葉の諸例は壁面を形成する石材だけで構築され、壁面がわずかに外傾して石槨上端が底面よりも広くなるか、垂直の壁面をなす。それらに対し本例の壁面は持送りがあり、控え積みの石材が配される。後葉～末葉の石槨は、形状から石槨構築後に棺が設置されたと考えられる（宇垣1987）、本例は後の前期古墳の石槨と同様に棺の設置が先行するとみられる。また、写真からの推定で、墳丘盛土下面の高さも不明であるものの、石槨底面はそれほど深い位置ではなく、墳丘盛土に収まるか地山上面になる可能性も考えられる。先行諸例では石槨は地山を掘り込んで構築されており、墳丘と埋葬施設の関係も異なる可能性がある。

石槨は乱掘を受けていたが、下半の埋土は遺存していた。被葬者は東頭位で、歯の細片が出土した。石槨床面にはごく薄い朱の散布が認められたが内側にはなく、被葬者の輪郭を形成していた。

副葬品は飛禽鏡1、ガラス小玉1、鉄刀1、剣形武器1、鉄鏃3、銅鏃1である。飛禽鏡、ガラス小玉、剣形武器は棺内、鉄鏃と銅鏃は棺外と判断され、鉄刀は棺内と推定されている（図9～12）。飛禽鏡は被葬者頭部南側で鏡背を上に向けた状態であった。ガラス小玉も頭部付近からの出土である（前報告）。仰臥伸展葬とすれば、剣形武器は被葬者の右足付近で若干斜めに切先を足側に向ける。鉄刀は胴部左側で軸線と平行に置かれ、刃を被葬者側に向けるよ



図6 ガラス小玉

うである。鉄鏃は、被葬者胴部右側の石槨北側壁に近い位置から出土した。近接して出土しており切先方向は揃わない。銅鏃1は石槨東端の床面よりも高い位置から出土しており<sup>(2)</sup>、石槨蓋上から落下の可能性が考えられる。

ガラス小玉は1点が出土している<sup>(3)</sup>。水色で、直径4.18mm、高さ1.91mm、孔径1.70mmである。

《註》

- (1) 調査ニュース第1号には、弥生時代から古墳時代の移行期の様相、古墳被葬者（支配者）と集落一般成員との関係、特殊器台の実態、この3点の把握が調査の目的として記された。
- (2) 故間壁忠彦氏の教示。
- (3) 宮山遺跡からは他に小形の勾玉・管玉各1点が出土しているが、出土遺構を確定できないため掲載していない。

《参考・引用文献》

- 宇垣匡雅1987「竪穴式石室の研究—使用石材の分析を中心に—」『考古学研究』第34巻第1号・第2号  
 近藤義郎1998「総社市の域内における弥生墳丘墓の出現と消滅」『総社市史』通史編、総社市  
 高橋護1963「三輪山墳墓群の調査から」『岡山県総合文化センター館報』第39号  
 高橋護・鎌木義昌・近藤義郎1986「宮山墳墓群」『岡山県史』第18巻考古資料、岡山県  
 高橋護・鎌木義昌・近藤義郎1987「宮山墳墓群」『総社市史』考古資料編、総社市  
 藤田憲司・柳瀬昭彦1987「弥生時代」『岡山県の考古学』吉川弘文館  
 光本順・四田寛人2020「弥生墳丘墓・初期古墳の三次元計測」『津倉古墳』岡山大学考古学研究室  
 天望台古墳・三笠山古墳：近藤義郎・中田啓司1987「天望台古墳」「三笠山古墳」『総社市史考古資料編』総社市  
 山本原也・間所克仁・寒川史也2020「高梁川下流域における前方後円墳の測量調査」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第12号

《図出典》

- 図2 国土地理院数値地図 図3 岡山県教育委員会1982『殿山遺跡・殿山古墳群』岡山市埋蔵文化財発掘調査報告47写真4・5、図7～12 高橋護氏提供



図7 北くびれ部裾に転落した葺石材（西から）

図8 特殊器台棺



図10 剣形武器出土状況（上が北）



図11 鉄鍬出土状況（南から）

図9 副葬品出土状況（東から）



図12 鏡・鉄刀出土状況（西から）

### 3 飛禽鏡

#### (1) 所見

中心に位置する鈕が鳥像胴部を覆いながらも、頭部・左翼・右翼・尾部を鈕の四方に配することで、両翼を大きく広げた1体の飛禽像が内区主文部を占める構図の鏡式である(図13)。

直径9.7cmの完形鏡であり、重量は117g、厚さは内区で最大約1.5mm、外区で最大約3.2mmである。全体に錆ぶくれが著しく、遺存状態は良好ではない。鏡背面に部分的ながら赤色顔料が付着する。一部に有機質とみられる膜状の物質が付着するが、詳細は不明である。

**文様構成** 中心に径約1.5cm、高さ約6.5mmの小ぶりの鈕がある。鈕は頂部がやや平らな半球形で、円座にのる。錆のため判然としないが、鈕孔は幅6mm弱、高さ約4mmの隅丸長方形を呈する。

鈕の外側にある内区主文部は四乳によって4分割され、各区画に鳥像の頭部・左翼・右翼・尾部を配する。乳は円座にのった高さの低い半球形である。鳥像の各部を浮彫とし、両翼は波板状に羽を重ねて立体的にあらわし、ほかの部位は眼や羽毛を細線で表現する。胴部の多くは鈕に覆われた構図をとる。両翼の下方に脚の付け根を小さな膨らみであらわし、そこから直線的に伸びた脚を細線で描く。脚端の表現は錆のため確認できない。鳥像は全体に文様が不鮮明なため細部の描写を把握しがたいが、尾部の先端には膨らみがないことから、浮彫ではなく細線によって表現するとみられる。鳥像の周囲にも細線によって渦文を表現するが、不鮮明な状態である。

内区外周部は圏線によって内区主文部と画され、内側から順に無文帯、櫛歯文帯となる。内区より一段高い外区は、文様のない素文の平縁である。

**鑄造・研磨** 文様の不鮮明な範囲が広く、かつ各部も丸みを帯びた箇所が目立つため、鑄造時の湯回り不良もしくは鑄造後の摩滅を想定できる。そうした状態にあって注目できるのは、鳥像でも鈕に近接した箇所は細線表現が比較的明瞭である点、内区の最外周にめぐる櫛歯文帯は総じてその表出が明瞭な点である。これら2点の傾向が有意であるならば、偶然に左右されやすい鑄造不良の可能性は排除される。また、上記2点にくわえ、乳座上面の乳基部との境界付近にのみ同心円状を呈する仕上げの研磨条痕が残っており、摩滅がおよびにくい箇所であったためと考えると説明しやすい。以上から、本鏡にみる文様不鮮明や各部の丸みは摩滅など鑄造後に生じたものである可能性が高い。

#### (2) 評価

**飛禽鏡の分類** 樋口隆康は飛禽鏡を縁部形態から大別し、主像が平縁の例では浮彫、斜縁の例では浮彫と細線で表現されるとした(樋口1979)。その後、實盛良彦が四乳飛禽鏡に限定して、尾部を



図13 飛禽鏡

先端まで写實的に表現するA式、尾部先端を蕨手状に細線で表現するB式、尾部先端が開いた表現のC式に区分し、脚部と尾部の表現にみる簡略化からA式→B式→C式の順に変遷するとした（實盛2015）。既往の分類案にしたがえば、宮山鏡は樋口分類の平縁のタイプ、實盛分類ではB式となる。

ここでは、實盛分類にもとづく変遷案を文様の構図に着目して検証しつつ、若干の補足をおこなう。まず、A式には2羽の鳥頭が向かい合い、かつ1羽にとまらう2脚を同じ方向に配した例があり（図14-1）、盤龍鏡の構図を踏襲する点で古相を示すとみられる（西川2000）。ほかにもA式には、鳥像が1体となって、2脚を同じ方向に配する例（図14-2）と異なる方向に配する例（図14-3）や、鳥像が1体で2脚を同じ方向に向ける例がある（図14-4）。これにたいし、B式は2脚を異なる方向に配する例を基本としており（図14-5）、A式より定型的な様相をみせる。こうした主像の構図にみる変化からも、A式からB式への変遷は妥当性が高いと判断できる。いっぽうC式については、主像を細線あるいは平縁で表現する例や脚の配置方向の異なる例を含むことになり、単一のまとまりとして捉えにくい。そのなかにあつて、主像をやや平坦な半肉彫で表現する例に限れば、資料数は少なくなるものの、強いまとまりをもつ一群として把握できる（図14-6）。その場合、C式は脚表現の簡略化だけでなく、翼の表現にみる段数の減少や内区の空隙に充填する文様の欠落など明らかに省力化が進む。つまり、対象資料を限定する必要があるが、B式からC式への変遷も妥当性が高いといえる。と同時に、C式は直径が8cmに満たない点を基本としており、飛禽鏡が小型化しつつその生産を終了した可能性を示唆する。なお、主像を半肉彫とする四乳をもつ例に限れば、B式からC式への変遷と対応して、縁部形態の斜縁から平縁への推移も想定できる（cf. 森下2011）。したがって、宮山鏡はB式に分類されながらも、平縁をもつ点からそのなかでも新相を示すと判断できる。

**飛禽鏡の年代** 飛禽鏡の製作年代には、関連の深い上方作系浮彫式獣帯鏡とともに、①ほぼ2世紀後半とする見方（岡村1999など）、②2世紀後半から3世紀初頭ごろとする見方（森下2007など）、③2世紀末から3世紀第3四半期前半ごろまでの三国魏代まで製作が継続したとする見方（實盛2015・2019）の大きく3説がある。③説ではA式を2世紀末から3世紀初頭の後漢代末、B式を後漢滅亡後の3世紀前半、C式は3世紀中ごろを中心とした三国魏代とする。しかし、楽浪漢墓にみる埴室墓型式と紀年埴の対応関係によれば（高久2009）、上方作系浮彫式獣帯鏡の古相型式が2世紀末以前、新相型式が3世紀前葉以前には出現していた可能性を考慮できる。とすれば、飛禽鏡についても、②説がもっとも蓋然性の高い年代観とならう（岩本2020）。2世紀後半から3世紀前葉ごろの時期幅のなかでA式・B式・C式のそれぞれがどの程度の時間幅を有したのかは未知数だが、B式でも新相傾向を示す宮山鏡の製作時期は、2世紀末から3世紀前葉ごろととらえておくのが妥当である。

**飛禽鏡の日本列島への流入** 上述のとおり、四乳をもつ飛禽鏡には主像の構図が多様なA式、急速に定型化が進行するB式、小型化したC式の3類型を設定できる。注目すべきは、複数類型がみられる飛禽鏡にあつて、日本列島での出土を確実視できる例がB式に限定される点である（図14-7～12）。なかでも前期古墳出土例には縁部形式には違いがあるが、とくに主像表現が細部に至るまで共通する点はみのがせない。要するに、華北東部において製作された四乳をもつ飛禽鏡のなかでも（岡村1999、森下2007など）、系統的かつ時期的にみてまとまりの強い鏡群が列島に流入しており、その背景として流入の窓口がある程度限られていた可能性をうかがわせる。この様相からそれらの列島への流入時期についても、製作年代に近接した3世紀前葉ごろと推定する見方が成り立つのであり、まとまった数の飛禽鏡が三角縁神獣鏡の出現直前に近畿中央部にもたらされた可能性が高いことになる。



1. 山東民間蔵鏡 189 (A式)



2. 宜興民間收藏 168 (A式)



3. 丹陽銅鏡青瓷博物館 157 (A式)



4. 大同江面 (A式)



5. 大同江面 (B式)



6. 大同江面 (C式)



7. 大分・赤塚1号方形周溝墓 (B式)



8. 兵庫・若水A11号墳 (B式)



9. 福井・岩内山遺跡D区1号土壙 (B式)



10. 京都・上大谷15号墳 (B式)



11. 鳥取・篠田6号墳 (B式)



12. 京都・成山2号墳 (B式)

図14 飛禽鏡の諸例

こうした見方は、円座乳や外区文様において飛禽鏡と共通点のある上方作系浮彫式獣帯鏡（森下2007）にもあてはまる。列島出土の上方作系浮彫式獣帯鏡は、鋸歯文を主体とする外区文様を配した斜縁の例もしくは素文の平縁を主体としており、縁部形態の様相も飛禽鏡と合致する（図15）。つまり、飛禽鏡と共通点の多い上方作系浮彫式獣帯鏡も同様に、列島には系統と時期の限られた鏡群がもたらされている可能性が高い。さらに、これらいわゆる漢鏡7期第1段階の鏡群のなかでも（岡村1992・1999）、共通点の多い飛禽鏡と上方作系浮彫式獣帯鏡は、列島出土鏡の面径が排他的かつ補完的な関係を示しており（図16）、この点でもその流入がある程度まとまったものであったとする先の見方は矛盾なく説明できる。

**日本列島における飛禽鏡の流通** 飛禽鏡を含む漢鏡7-1期鏡の列島内での流通形態には大きく3説がある（下垣2012・2013）。第一説は、2世紀後半を中心にそれぞれの地域社会が個別的に入手したとの理解である（岡村1992、森下2023）。第二説は、3世紀前葉に近畿中央部の有力勢力によって搬入され、面径による格差づけのもとに分配がおこなわれたとする理解である（福永2005・2010）。第三説は三角縁神獣鏡の流入以降に漢鏡7-1期鏡が列島内に搬入され、各地に分配されたとの理解である（辻田2001・2007）。そこでこの3説をふまえて、列島出土の漢鏡7-1期鏡の出土傾向をあらためて確認してみたい（表1・2）。

まず、漢鏡7-1期鏡でも飛禽鏡・上方作系浮彫式獣帯鏡と、それ以外の画像鏡・八鳳鏡・獣首鏡とでは、出土遺跡の時期や遺物としての存在形態が異なる。前者はほとんどが古墳時代以降に消費されるのにたいし、後者には弥生遺跡での出土が北部九州に偏在して一定数ある。前者に限れば、弥生遺跡では破鏡として存在する例がほとんどであり、少数例として墳墓での破碎副葬がみられる。また中四国以西の弥生遺跡への帰属が確実視される例には完形鏡がなく、完形鏡は古墳時代以降に列島広域に拡散する。このように飛禽鏡は、

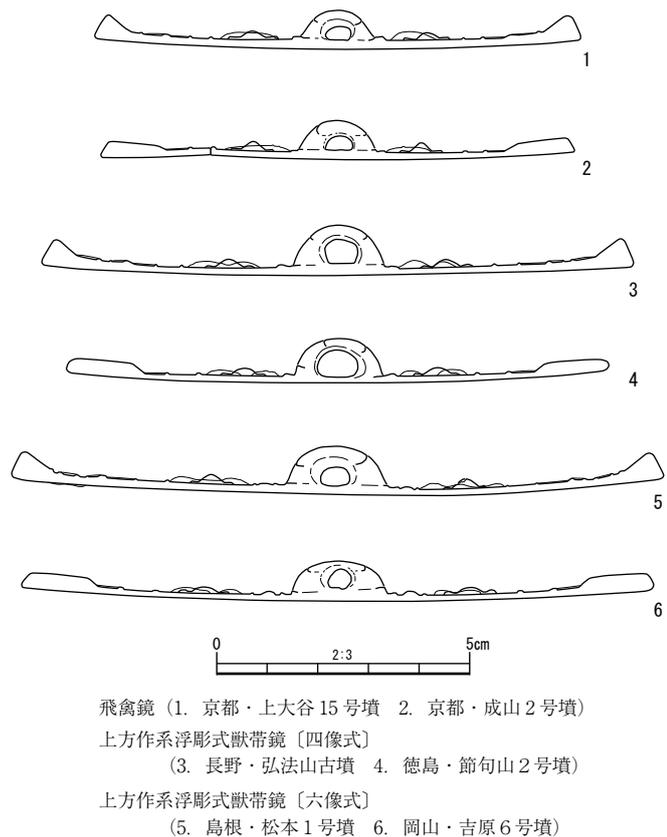


図15 飛禽鏡と上方作系浮彫式獣帯鏡にみる類似

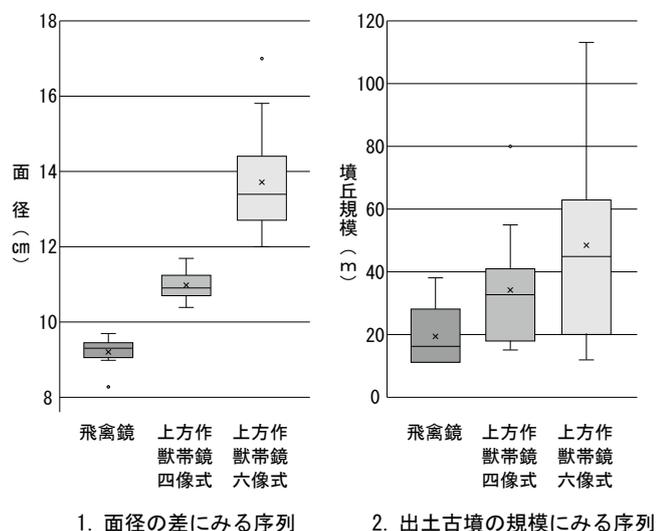


図16 飛禽鏡の階層的位

表1 日本列島出土の漢鏡7期第1段階の鏡(1)

番号	遺跡名	鏡式(分類)	直径(cm)	遺跡種別	遺構種別	遺跡時期	備考
<b>飛禽鏡</b>							
福岡 407	沙井掛遺跡 28号木棺墓	飛禽文鏡(B式)	破鏡・復 8.0	墳墓	木棺直葬	弥生終末期新	破鏡
大分 6	赤塚遺跡1号周溝墓	飛禽文鏡(B式)	9.4	方形周溝墓・11	箱式石棺	古墳前期前半古(Ⅰ期)	
岡山 73	桜山2号墳	飛禽文鏡?	破鏡	方形周溝墓	木棺直葬	古墳前期前半古(Ⅰ期)	破鏡
岡山 24	宮山墳丘墓	飛禽文鏡(B式)	9.7	前方後円墳・38	竪穴式石棺	古墳前期前半古(Ⅰ期)	
兵庫 205	長谷・ハナ1号墳	飛禽文鏡?	復 9.8	不明	木棺直葬	古墳前期前半(Ⅰ・Ⅱ期)	破鏡?
福岡 629	外之隈遺跡Ⅱ区1号墳2号墓	飛禽文鏡(B式)	9	墳丘墓・16	箱式石棺	古墳前期前半新(Ⅱ期)	
兵庫 236-1	若水 A11号墳	飛禽文鏡(B式)	9.1	円・36~41	木棺直葬	古墳前期中葉(Ⅲ期)	
広島 61	石籠権現5号墳 SK14土墳墓	飛禽文鏡(B式)	破鏡	墳墓	木棺直葬	古墳前期中葉(Ⅲ期)	破鏡
鳥取 131-2	篠田6号墳	飛禽文鏡(B式)	9.4	円・12~14	木棺直葬	古墳前期後半新(Ⅴ期)	
兵庫 74	堅田神社1号墳	飛禽文鏡(B式)	9.1	方・18	木棺直葬	古墳前期	
京都 32	成山2号墳	飛禽文鏡(B式)	9.4	方・18	木棺直葬	古墳前期	
福井 32	岩内山遺跡 D区1号土壇	飛禽文鏡(B式)	9.2	墳墓	土壇墓	古墳前期	
神奈川 27	[仮] 稲荷山第1号墳	飛禽文鏡(C式)	6.1	円	—	古墳前期?	
京都 130	上大谷15号墳	飛禽文鏡(B式)	9.6	方・11	粘土槨	古墳中期前葉古(Ⅵ期)	
京都 265	愛宕神社1号墳	飛禽文鏡?	破鏡	方・20	木棺直葬	古墳中期前葉古(Ⅵ・Ⅶ期)	破鏡
愛知 71	岩津1号墳	飛禽文鏡(B式)	8.3	円・11	竪穴式石室	古墳後期後半	

上方作系浮彫式獸帯鏡

佐賀 187-2	中原遺跡 SP13231 木棺墓	上方作系浮彫式獸帯鏡(四像式)	復 11.1	墳丘墓	木棺墓	弥生終末期新	破砕副葬
愛媛 38-1	文京遺跡	上方作系浮彫式獸帯鏡?	破鏡	集落	土堆	弥生?	
千葉 90	高部 32号墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(四像式)	破鏡・復 10.8	方方・31	木棺直葬	古墳前期前半古(Ⅰ期)	
長野 49	弘法山古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(四像式)	11.7	方方・36	竪穴式石棺	古墳前期前半古(Ⅰ期)	
静岡 172-1	高尾山古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	13.4	方方・62	木棺直葬	古墳前期前半古(Ⅰ期)	破砕副葬
兵庫 29	西求女塚古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	14.2	方方・98	竪穴式石棺	古墳前期前半古(Ⅰ期)	
奈良 399	中山大塚古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡	破片	方円・132	竪穴式石棺	古墳前期前半古(Ⅰ期)	
京都 25	狸谷 17号墳	上方作系浮彫式獸帯鏡	破鏡	方・14	木棺直葬	古墳前期前半古(Ⅰ期)	
鳥取 7	桂見 2号墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	14.6	方・22×28	木棺直葬	古墳前期前半古(Ⅰ期)	
徳島 60	西山谷 2号墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	12.5	円・20	竪穴式石棺	古墳前期前半古(Ⅰ期)	
奈良 82	小泉大塚古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	13.4	方円・88	竪穴式石棺	古墳前期前半新(Ⅱ期)	
奈良 146-41	桜井茶臼山古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡	破片	方円・200	竪穴式石棺	古墳前期前半新(Ⅱ期)	
奈良 146-42	桜井茶臼山古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡	破片	方円・200	竪穴式石棺	古墳前期前半新(Ⅱ期)	
奈良 146-43	桜井茶臼山古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡	破片	方円・200	竪穴式石棺	古墳前期前半新(Ⅱ期)	
奈良 146-44	桜井茶臼山古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡	破片	方円・200	竪穴式石棺	古墳前期前半新(Ⅱ期)	
広島 16	中小田 1号墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	13	方円・30	竪穴式石棺	古墳前期後半新~中葉(Ⅱ・Ⅲ期)	
長野 50	中山 36号墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	12.9	円・20	粘土槨	古墳前期中葉(Ⅲ期)	破砕副葬?
兵庫 5	へぼソ塚古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	15.9	方円・63	竪穴式石棺	古墳前期中葉(Ⅲ期)	
奈良 108	大和天神山古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	13.6	方円・113	竪穴式石棺	古墳前期中葉(Ⅲ期)	
島根 27	松本 1号墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	12.9	方方・50	粘土槨	古墳前期中葉(Ⅲ期)	
徳島 26	節句山 2号墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(四像式)	10.7	—	箱式石棺	古墳前期中葉(Ⅲ期)	
徳島 30	丹田古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(四像式?)	11.5	方方・35	竪穴式石棺	古墳前期中葉(Ⅲ期)	
愛媛 88	妙見山 1号墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(四像式)	11.4	方円・55	竪穴式石棺	古墳前期後半新(Ⅳ・Ⅴ期)	
大阪 17	安威 0号墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	12.3	円・15	粘土槨	古墳前期後半古(Ⅳ期)	
兵庫 85	土坊山古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	13.9	円・16	竪穴式石棺	古墳前期後半古(Ⅳ期)	
鳥取 99	石州府 29号墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(四像式)	10.8	方・23×16	木棺直葬	古墳前期後半古(Ⅳ期)	
香川 42	石清尾山猫塚古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	12.8	双方円・96	竪穴式石棺	古墳前期後半古(Ⅳ期)	
群馬 181	欠場薬師塚古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(四像式)	10.7	方円・80	—	前期後半(Ⅳ・Ⅴ期)	
神奈川 9	了源寺古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	12.0	円	—	前期後半(Ⅳ・Ⅴ期)?	
岐阜県	船来山 24号墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(四像式)	復 11.5	円?・20	粘土槨	古墳前期後半新(Ⅴ期)	
京都 67	百々ヶ池古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	13.6	円・50	竪穴式石棺	古墳前期後半新(Ⅴ期)	
岡山 53-2	一國山 3号墳	上方作系浮彫式獸帯鏡	破鏡・復 10.8	方・8~	箱式石棺	古墳前期後半新(Ⅴ期)	
岡山 63	吉原 6号墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	12.5	方円・45	—	古墳前期後半新(Ⅴ期)	
岡山 205	王子中古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	15.7	円・40	竪穴式石棺	古墳前期後半新(Ⅴ期)	
岡山 231	川東車塚古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡	11.8	方円・59	粘土槨	古墳前期後半新(Ⅴ期)	
福岡 395	忠隈 1号墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(四像式)	11.1	円・35	竪穴式石棺	古墳前期後半新(Ⅴ期)	
佐賀 68	熊本山古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(四像式)	10.7	円・30	舟形石棺	古墳前期後半新(Ⅴ期)	
大分 40	野間 10号墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	破鏡・復 13.5	円	箱式石棺	古墳前期後半新(Ⅴ期)	
京都 158	西の口古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(四像式)	11.5	—	—	古墳前期中葉~後半(Ⅲ~Ⅴ期)?	
鳥取 5	伊勢谷遺跡	上方作系浮彫式獸帯鏡	破鏡	集落	包含層	古墳前期	
岡山 53	尾籠山古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(四像式)	10.8	方円・44	竪穴式石棺	古墳前期	
岡山 57	森古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡?	破鏡・復 11.9	—	箱式石棺	古墳前期	
岡山 201-1	宮ノ上 1号墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	13.6	円・12	竪穴式石棺	古墳前期	
広島 85	四拾貫 9号墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	破鏡	円・14	粘土槨	古墳前期	
山口 67	天長山古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡?	復 14.9	方	木棺直葬	古墳前期	
徳島 37	天河別神社 5号墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	15.5	円	竪穴式石棺	古墳前期	
大分 56	舞田原遺跡	上方作系浮彫式獸帯鏡	破鏡	集落	竪穴住居	古墳前期前半	
群馬 186	宮田稲荷古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	12.5	円	—	—	
大分 12	[仮] 吉籠石棺	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	15.7	古墳	箱式石棺	古墳時代	
広島 74	池ノ坊古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(四像式)	10.7	円	粘土槨	古墳前期中葉~中期	
長崎 56	田助遺跡	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	17	古墳	箱式石棺	古墳前期後半新~中期前葉(Ⅴ~Ⅵ期)	
京都 268	千歳下遺跡	上方作系浮彫式獸帯鏡?	破鏡・復 14.6	祭祀遺跡	土壇	古墳前期後半新~中期中葉(Ⅴ~Ⅵ期)	
愛知 13	笹ヶ根 1号墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	12.6	円・20	粘土槨	古墳中期前葉~中葉(Ⅵ~Ⅶ期)	
香川 52	今岡古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	13.3	方円・61	埴輪棺	古墳中期前葉古(Ⅵ期)	
広島 40	馬場谷 2号墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(四像式)	10.7	円・15	粘土槨	古墳中期	
広島 100	宮ノ谷 1号墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(四像式)	11	円	箱式石棺	古墳中期	
岡山 8	天狗山古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(四像式)	11.2	帆立・57	竪穴式石棺	古墳後期前葉古(Ⅷ期)	
兵庫 241-2	[仮] 伊川谷小学校裏山古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡	破片	—	—	—	
兵庫 159	塚ノ元古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(四像式)	10.9	経塚	—	—	再利用品
奈良 74	[仮] 生駒郡(五島美 M260)	上方作系浮彫式獸帯鏡(四像式)	10.8	—	—	—	
鳥取 16	[仮] 八頭郡那家町	上方作系浮彫式獸帯鏡(四像式?)	復 10.8	—	—	—	
広島 63	[仮] 福山市今岡所在古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(六像式)	13	—	箱式石棺	—	
広島 78	蔵王原古墳	上方作系浮彫式獸帯鏡(四像式)	11.1	円・15	—	—	
徳島 56	庄・蔵本遺跡	上方作系浮彫式獸帯鏡	破鏡	集落	攪乱	—	
愛媛 90-4	大相院遺跡	上方作系浮彫式獸帯鏡	破鏡	集落	溝	—	
福岡 453	[仮] 飯塚市	上方作系浮彫式獸帯鏡	破片	—	—	—	
長崎 47	原の辻遺跡	上方作系浮彫式獸帯鏡?	破片・復 11.2	—	表面採集	—	
長崎 76-7	原の辻遺跡	上方作系浮彫式獸帯鏡?	破片	—	—	—	
宮崎 55-1	[仮] 西都原古墳群	上方作系浮彫式獸帯鏡	完形	—	—	—	

[凡例] 後漢鏡と確定視できる例を対象とし、三国西晋鏡ならびに六朝鏡、鉄鏡は基本的には含まない。また、資料の実態が不明な例、出土遺跡の詳細が不明な例は検討の対象からは除外する。?は確かな点があることを示す。番号は下垣2016の番号。遺跡種別には、墳墓の場合は墳丘形態と規模(m)を記載する。墳丘形態の略号はつぎの通り。方円:前方後円墳、方方:前方後方墳、帆立:帆立貝形古墳、円・円墳、方:方墳。遺構種別には、墳墓の場合は埋葬施設を記載する。遺跡時期の古墳時代の( )内は岩本2020の時期区分にもとづく。位置づけは、飛禽鏡は實感2015に依拠する。

表2 日本列島出土の漢鏡7期第1段階の鏡(2)

番号	遺跡名	鏡式(分類)	直径(cm)	遺跡種別	遺構種別	遺跡時期	備考
<b>画像鏡</b>							
大分 69	石井入口遺跡	画像鏡	破鏡	集落	竪穴住居	弥生後期	破鏡
福岡 167	野方中原遺跡1号石棺墓	画像鏡	破鏡・復9.5	墳墓	箱式石棺	弥生終末期新	破鏡
福岡 170	野方塚原遺跡1号石棺墓	画像鏡	破鏡・復11.2	墳墓	箱式石棺	弥生終末期新	破鏡
千葉 89	高部30号墳	神人龍虎画像鏡(劉氏系)	14.5	方・34	木棺直葬	古墳前期前半(Ⅰ期)	破砕鏡
福井	風巻神山4号墳	神人龍虎画像鏡(劉氏系)	14.5	方・16	木棺直葬	古墳前期前半(Ⅰ期)	破砕鏡
兵庫 24	西求女塚古墳	神人龍虎画像鏡(袁・田氏系)	18.5	方・98	竪穴式石椁	古墳前期前半(Ⅰ期)	
山口 21	竹島古墳	神人車馬画像鏡(劉氏系)	17.6	方円・56	竪穴式石椁	古墳前期前半(Ⅰ・Ⅱ期)	
愛媛 21	国分古墳	禽獸画像鏡	11.8	方円・44	竪穴式石椁	古墳前期前半(Ⅱ期)	
奈良 95	大和天神山古墳	神人龍虎画像鏡(劉氏系)	16.9	方円・113	竪穴式石椁	古墳前期中葉(Ⅲ期)	
奈良 96	大和天神山古墳	神人龍虎画像鏡(袁・田氏系)	18.7	方円・113	竪穴式石椁	古墳前期中葉(Ⅲ期)	
島根 8	寺床1号墳	神人龍虎画像鏡(劉氏系)	13	方・33	磯礫	古墳前期中葉(Ⅲ期)	
福岡 485	潜塚古墳	神人龍虎画像鏡(袁・田氏系)	15.5	円・25	箱式石棺	古墳前期中葉(Ⅲ期)	
奈良 279	黒石5号墳	神人龍虎画像鏡(袁・田氏系)	20.8	方円・50	粘土椁	古墳前期後半(Ⅳ期)	
奈良 278	黒石5号墳	神人龍虎画像鏡(袁・田氏系)	12.4	方円・50	粘土椁	古墳前期後半(Ⅳ期)	
愛媛 11	相の谷1号墳	禽獸画像鏡(劉氏系)	12.6	方円・81	竪穴式石椁	古墳前期後半(Ⅳ期)	
群馬 58	[伝]三本木所在古墳	神人龍虎画像鏡(袁・田氏系)	15.6	—	—	古墳前期	
熊本 79	チャン山古墳	禽獸画像鏡	10.5	円	竪穴式石椁	古墳前期	
大分 28	鑑堂古墳	神人車馬画像鏡(劉氏系)	20.1	円・20	竪穴式石椁	古墳中期?	
京都 364	愛宕神社1号墳	禽獸画像鏡(劉氏系)	12.8	方・20	木棺直葬	古墳中期前葉(Ⅵ・Ⅶ期)	破砕鏡
静岡 35	堂山古墳	神人龍虎画像鏡(袁・田氏系)	14.8	方円・113	木棺直葬?	古墳中期中葉(Ⅷ・Ⅹ期)	
滋賀 92	北山古墳	禽獸画像鏡	13.6	方円?	木棺直葬	古墳中期中葉新相~後葉新相(Ⅸ~Ⅹ期)?	
大分 71	名草台遺跡	画像鏡(袁・田氏系)	破鏡	—	箱式石棺	—	破鏡

**八風鏡・四風鏡**

福岡 260	須玖岡本遺跡(伝)	八風鏡(秋山3A式・岡村四帯B式)	13.6	D地点・支石墓	大型甕棺	弥生後期	江南系か
福岡 572	平遺跡	八風鏡(秋山3B式?)	破鏡?	墳墓	箱式石棺	弥生後期	破鏡
福岡 445	原田遺跡C1号石棺墓	四風鏡(秋山2A式・岡村四帯A式)	破砕鏡・11.0	墳墓	箱式石棺	弥生後期	破砕鏡
岐阜 160	象鼻山1号墳	八風鏡(秋山2A式)	11.7	方・40	木棺直葬	古墳前期前半(Ⅱ期)	
奈良 144	桜井菜白山古墳	八風鏡	破片	方円・約200	竪穴式石椁	古墳前期前半(Ⅱ期)	
兵庫 149	龍子三ツ塚2号墳	八風鏡(秋山2A式)	破鏡・11.7	円・17	竪穴式石椁	古墳前期前半(Ⅱ期)	破鏡
岡山 86	七つ塚1号墳第1石室	八風鏡(秋山3B式?)	破片	方・45	竪穴式石椁	古墳前期前半(Ⅱ期)	江南系か
栃木 5	那須八幡塚古墳	八風鏡(秋山2A式)	12.6	方・68	木棺直葬	古墳前期中葉~(Ⅲ・Ⅳ期)	
兵庫 2	へらソ塚古墳	八風鏡(秋山2A式)	14.7	方円・63	竪穴式石椁	古墳前期中葉(Ⅲ期)	
佐賀 93	十三塚遺跡	八風鏡(秋山2A式・岡村四帯A式?)	11.0	—	箱式石棺	古墳前期中葉~(Ⅲ期~)	
佐賀 157-2	古園遺跡ST26古墳	八風鏡?(秋山2A式・岡村四帯A式)	11.6	円・13	箱式石棺	古墳前期中葉~(Ⅲ期~)	
石川 1	国分塚1号墳	八風鏡(秋山2A式・雲文紐)	15.7	方・53	木棺直葬	古墳前期後半(Ⅳ期)	
滋賀 58	安土藤原山古墳中央石室	八風鏡(秋山2A式・岡村四帯A式)	15.1	方円・134	竪穴式石椁	古墳前期後半(Ⅳ期)	
京都 127	上大谷6号墳	八風鏡(秋山3A式・岡村四帯B式)	11.3	方・15	木棺直葬	古墳前期後葉(Ⅴ期)?	江南系か
鳥取 31	伯耆国分寺古墳	八風鏡(秋山2A式)	19.8	方円・60	木棺直葬	古墳前期後半(Ⅳ期)	
長崎 3	上県大持塚古墳	八風鏡(秋山3A式・岡村四帯B式)	11.4	—	箱式石棺	古墳前期後半?	江南系か
福岡 610	東那珂遺跡	八風鏡?	破鏡・9.4	竪穴住居	—	古墳前期	破鏡
福岡 673	美満寺3号墳	八風鏡?	破片	方円・33	竪穴式石椁	古墳前期	
京都 171	美濃山王塚古墳	八風鏡(秋山1式)	12.5	方円・76以上	—	古墳中期前半~(Ⅶ・Ⅷ期)	
大阪 262	心合寺山古墳西廊	八風鏡(秋山2A式・岡村四帯A式)	16.3	方円・157	粘土椁	古墳中期前半(Ⅶ期)	
長野 117	神坂麻祭祀遺跡	八風鏡	破片	—	—	古墳中期	
福岡 15	長須限古墳	八風鏡(秋山2A式)	約17	円・21	舟形石棺	古墳初期初頭?	
大阪 183-2	峯ヶ塚古墳	八風鏡?	破片	方円・96	竪穴式石椁	古墳後期前半(ⅩⅢ期)	
福岡 400	稲葉町漆生	八風鏡(秋山1式)	12.1	円	箱式石棺	古墳時代	
三重 38	善徳寺山古墳群	四風鏡?	9.1	古墳(詳細不明)	—	古墳時代	

**獸首鏡**

福岡 229	酒殿遺跡2号石棺墓	獸首鏡	10.7	墳墓	箱式石棺	弥生後期	
奈良 393	小泉大塚古墳	獸首鏡	約16	方円・88	竪穴式石椁	古墳前期前半(Ⅱ期)	
高知 2	曾我山古墳	獸首鏡	破鏡・約15	方円・60	磯礫	古墳前期後葉~(Ⅴ・Ⅵ期)	破鏡
広島 97	大迫山1号墳	獸首鏡(獸文紐)	14.5	方円・45	竪穴式石椁	古墳前期後半(Ⅳ期)	
新潟 3	菅畑(伝)	獸首鏡	不明	不明	—	—	
宮崎 86	六野原平遺跡	獸首鏡	11.9	不明	—	—	

**双頭龍文鏡**

福岡 419	岩屋遺跡	双頭龍文鏡(西村Ⅱ式)	破鏡?・9.9	墳墓	箱式石棺	弥生後期	破鏡、非廣漢系か
福岡 425	馬場山41号a号土壇墓	双頭龍文鏡(西村Ⅰ式)	破鏡	墳墓	土壇墓	弥生後期	破鏡
福岡 535	山鹿石ヶ坪遺跡2号石棺墓	双頭龍文鏡(西村Ⅰ式)	破鏡・16.6	墳墓	箱式石棺	弥生後期?	破鏡
石川 14	無量寺B遺跡	双頭龍文鏡(西村Ⅰ式)	破鏡・11.4	溝	—	弥生終末期	破鏡
佐賀 17	町南遺跡	双頭龍文鏡(西村Ⅱ式)	破鏡・8.2	竪穴住居	—	弥生終末期	破鏡、非廣漢系か
京都 251	黒田古墳	双頭龍文鏡(西村Ⅰ式)	12.3	方円・52	木棺直葬	古墳前期初頭(Ⅰ期)	
千葉 91	中尾東谷遺跡	双頭龍文鏡(西村Ⅱ式)	破鏡	竪穴住居	—	古墳前期	破鏡
福岡 164	錦崎古墳	双頭龍文鏡(西村Ⅱ式)	11.6	方円・62	横穴式石室	古墳中期初頭(Ⅵ期)	
神奈川 30	戸田小柳遺跡	双頭龍文鏡(西村Ⅱ式)	破片・9.1	溝	—	古墳後期	非廣漢系か
山梨 49	長田口遺跡	双頭龍文鏡?(西村Ⅱ式?)	破鏡	溝	—	中世	破鏡、非廣漢系か

[凡例] 後漢鏡と確定できる例を対象とし、三国西晋鏡ならびに六朝鏡、鉄鏡は基本的には含めない。また、資料の実態が不明な例、出土遺跡の詳細が不明な例は検討の対象からは除外する。ただし、八風鏡の秋山3式、双頭龍文鏡の西村Ⅱ式については対象とする。?は不確かな点があることを示す。番号は下掲2016の番号。遺跡種別には、墳墓の場合は墳丘形態と規模(m)を記載する。墳丘形態の略号はつぎの通り。方円：前方後円墳、方方：前方後方墳、帆立：帆立貝形古墳、円：円墳、方：方墳。遺構種別には、墳墓の場合は埋葬施設を記載する。遺跡時期の古墳時代の( )内は岩本2020の時期区分にもとづく。位置づけは、画像鏡は上野2001、八風鏡は秋山1998と岡村2012、双頭龍文鏡は西村1983に依拠する。

上方作系浮彫式獸首鏡とともに古墳時代以降に完形鏡が各地で副葬される明確な傾向を示す。

つぎに、上述した飛禽鏡が上方作系浮彫式獸首鏡と面径において階層的な関係にあるだけでなく、それに対応して出土古墳の規模に一定の序列をよみとれる点に注目する(図16)。飛禽鏡と上方作系浮彫式獸首鏡をたんに比較するだけでなく、上方作系浮彫式獸首鏡を面径の小さな四像式と面径の大きな六像式に区分すると、古墳規模が面径と対応しつつ大まかに序列をなす点がよりいっそう明瞭となる。さらに出土古墳をみると、上方作系浮彫式獸首鏡の六像式、上方作系浮彫式獸首鏡の四像式、

飛禽鏡の順で近畿中央部を核とした分布を示すことも明らかである。

以上から、漢鏡7-1期鏡のなかでも飛禽鏡・上方作系浮彫式獣帯鏡の流通は、弥生時代と古墳時代で大きく様相が異なることを追認できる。すなわち、弥生時代は破鏡を主体とした北部九州に偏在した流通形態、古墳時代には完形鏡を軸にした列島広域への拡散を可能とした流通形態というコントラストが明瞭である。とりわけ、古墳時代には面径差にもとづく序列の存在と序列に応じた分布状況を示す点から、近畿中央部を起点とする分配がおこなわれた可能性が高い。注目されるのは、飛禽鏡・上方作系浮彫式獣帯鏡の出土古墳には、出土総数の割に前期前半古相（広域編年Ⅰ期）に比定できる例が多い点である。そのなかには、宮山墳丘墓のように三角縁神獣鏡の副葬に先行する可能性をもつ例も含まれる。つまり、飛禽鏡・上方作系浮彫式獣帯鏡の一部には、三角縁神獣鏡に先行して近畿中央部を介した分配による流通を想定しうるのである。漢鏡7期鏡の流通をめぐる既往の見方を参照するならば、一部の鏡を第二説の枠組みで（福永2005・2010）、大半の鏡を第三説の枠組みによって評価することになる（辻田2001・2007）。

**宮山墳丘墓の飛禽鏡とその評価** 以上の検討から、宮山墳丘墓出土鏡は、飛禽鏡のなかでも内区を四乳で区画する鏡群において定型化したタイプと評価でき、2世紀末から3世紀前葉ごろの製作と考えられる。さらに日本列島でのその出土傾向からは、三角縁神獣鏡の分配開始にわずかに先立つ3世紀前葉ごろを上限として近畿中央部を介して流通した鏡である可能性が高い。その主たる根拠は、古墳出現期には飛禽鏡のなかでも限定的な型式が搬入されていること、系統的に関係の深い上方作系浮彫式獣帯鏡と階層的な関係を形成していること、完形鏡副葬が古墳に限定されかつ列島の広域に分布することである。

ただし注意を要するのは、上記の根拠は現状の限られた資料にもとづいて導かれたパターンでしかない点である。とくに宮山鏡に限っては、小型鏡であることと単数副葬であることの2点が、その入手を近畿中央部との関係だけで説明する見方を困難とする。というのも、この2点が古墳時代社会における序列の形成にもなう結果とするのは、上方作系浮彫式獣帯鏡と一体的に評価することによって成り立っており、飛禽鏡と上方作系浮彫式獣帯鏡がまとまることなく流入する状況は弥生時代においては十分に成り立つからである。それゆえに、宮山鏡の評価はその副葬年代、ひいては古墳時代開始論と不可分なのである。また、少なくとも宮山墳丘墓と同時期とみられる前期前半古相（広域編年Ⅰ期）でもごく初期とみられる事例は、分布が列島広域といえるほどの広がりをも有してはいない点にも注意が必要である。流通における中心性の形成とその広域化は一連の動きではあるが、必ずしも同時に生じるわけではないからである。このように、列島における鏡の流通形態の変革を弥生時代から古墳時代への転換として一律的に単純化しうるかはさらなる検証を要する問題であり、そうした議論において宮山墳丘墓出土の飛禽鏡はつねに参照されるべき資料であることは間違いない。宮山墳丘墓にそれ以前と比べて画期性がみとめられるかどうか、その画期性がいかなる質を有するかが、上記の問題を解決する糸口となろう。

#### 《引用文献》

秋山進午1998「夔鳳鏡について」『考古学雑誌』第84巻第1号 日本考古学会 pp.1-26

岩本 崇2020『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』六一書房

上野祥史2001「画像鏡の系列と製作年代」『考古学雑誌』第86巻第2号 日本考古学会 pp.1-39

岡村秀典1992「浮彫式獣帯鏡と古墳出現期の社会」『出雲における古墳の出現を探る—松本古墳群シンポジウムの記録

- 一』出雲考古学研究会 pp.98-115
- 岡村秀典1999『三角縁神獣鏡の時代』歴史文化ライブラリー66 吉川弘文館
- 岡村秀典2012「後漢鏡における淮派と呉派」『東方學報』第87冊 京都大学人文科学研究所 pp.1-41
- 實盛良彦2015「上方作系浮彫式獸帯鏡と四乳飛禽鏡の製作と意義」『FUSUS』Vol.7 アジア鑄造技術史学会 pp.79-95
- 實盛良彦2019「斜縁鏡群と三角縁神獣鏡」『銅鏡から読み解く2～4世紀の東アジア』アジア遊学237 勉誠出版 pp.192-202
- 下垣仁志2012「古墳出現の過程」『古墳出現の展開と地域相』古墳時代の考古学2 同成社 pp.13-31
- 下垣仁志2013「青銅器からみた古墳時代成立過程」『新資料で問う古墳時代成立過程とその意義』考古学研究会関西例会30周年記念シンポジウム発表要旨集 考古学研究会関西例会 pp.34-45
- 関野貞・谷井濟一・栗山俊一・小場恒吉・小川敬吉・野守健1925a『楽浪郡時代の遺跡』本文 朝鮮総督府
- 関野貞・谷井濟一・栗山俊一・小場恒吉・小川敬吉・野守健1925b『楽浪郡時代の遺跡』図版下冊 朝鮮総督府
- 宜興市文物管理委員会協公司2013『瑩質神工 光耀陽羨 宜興民間收藏銅鏡精品集』文物出版社
- 高久健二2009「楽浪・帯方郡塚室墓の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第151集 国立歴史民俗博物館 pp.161-208
- 張道来・魏傳來(編)2006『山東民間藏鏡』齊魯書社
- 陳鳳九(編)2007『丹陽銅鏡青磁博物館 千鏡堂』文物出版社
- 辻田淳一郎2001「古墳時代開始期における中国鏡の流通形態とその画期」『古文化談叢』第46集 九州古文化研究会 pp.53-91
- 辻田淳一郎2007『鏡と初期ヤマト政権』すいれん舎
- 西川寿勝2000『三角縁神獣鏡と卑弥呼の鏡』学生社
- 樋口隆康1979『古鏡・古鏡図録』新潮社
- 福永伸哉2005『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会
- 福永伸哉2010b「銅鏡の政治利用と古墳の出現」『日本考古学協会2010年度兵庫大会 研究発表資料集』日本考古学協会2010年度兵庫大会実行委員会 pp.153-166
- 森下章司2007「銅鏡生産と変容と交流」『考古学研究』第54巻第2号 考古学研究会 pp.34-49
- 森下章司2011「漢末・三国西晋鏡の展開」『東方學報』第86冊 京都大学人文科学研究所 pp.91-138
- 森下章司2023「阿波・讃岐出土の漢鏡7期鏡」『四国考古学の最前線』季刊考古学別冊41 雄山閣 pp.85-88

《図表出典》

- 図13 宮山墳丘墓(岡山県立博物館蔵)。
- 図14 1. 張・魏(編)2006より引用、2. 宜興市文物管理委員会協公司2013、3. 陳(編)2007、4. 関野ほか1925a、5. 関野ほか1925b、6. 関野ほか1925a、7. 大分県立歴史博物館蔵、8. 兵庫県教育委員会蔵、9. 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター蔵、10. 城陽市教育委員会蔵、11. 鳥取市教育委員会蔵、12. 綾部市資料館蔵。
- 図15 1. 城陽市教育委員会蔵、2. 綾部市資料館蔵、3. 松本市立考古博物館蔵、4. 徳島県立博物館蔵、5. 島根県立古代出雲歴史博物館蔵、6. 赤磐市教育委員会蔵。
- 図16 岩本作成。
- 表1・2 岩本作成。

## 4 武器

### (1) 所見

図17は、鉄刀である。身部の両端を大きく欠損しており、鋒および茎から関の部分は残存しない。本来は素環頭大刀だったのか、大刀だったのかは判然としない。身部は曲がっているが、伸展すると約62.4cmを測る。峰および刃部を欠損しており、本来の幅は不明瞭であるが、現存最大幅が3cmを測る。また、現存最大厚は6mmを測るが、身部の表裏両面が剥離しているため、本来はかなり重厚であったと考えられる。

鉄刀の身部は曲がっているが、出土状況写真を見る限り、鉄刀が床面より隆起しており、石材や土壌の落下による変形とは考え難いため、人為的に折り曲げられた、いわゆる「折り曲げ鉄器」である可能性を考えたい。

なお、本資料は保存処理がなされていないため、今回は遺存状態を勘案し、SfM-MVSによる写真報告のみとした。

図18-1は、剣形武器である。同じ鉄本体でも着装される装具の種類によって鉄剣またはヤリとなり得るため、装具が残存しない、もしくはその存在が不明瞭な場合、鉄本体を「剣形武器」(菊地1996)と呼称することがある。本例は装具の痕跡が不明瞭であるため、ここでは「剣形武器」としておく。

茎尻を欠損するが、残存長23.7cm、身部長21.3cm、茎残存長2.4cmを測る。関の片側は若干欠損し、現存幅は3cmであるが、3.1cmに復元できる。関の形状は、錆膨れが進行しており、また礫や土が多く付着しているため、肉眼では不明であるが、X線CTにより斜角関であることが判明した(図18-6)。刃関双孔は確認できなかった。茎の形状は、若干幅を減じるが、概ね真っ直ぐである。

身部の表面は剥離しており、また身部の内部も大きく爆裂しているため、本来の身部厚は不明瞭であるが、X線CTによりその横断面形態が菱形であることが分かる。茎厚は、上端に近いところでは4~4.5mm、目釘孔付近では3~3.5mmを測る。通常、鉄剣の身部と茎とでは大きな厚みの差が認められないため、身部も本来5mm程度だった可能性が高い。

現存の茎末端が目釘孔の途中で途切れることから、茎が意図的に切断された可能性(豊島2010: p.40, n.14)、あるいは穿孔されている箇所が弱く欠損しやすかった可能性の2つが考えられる。末端の平面形が平らでないことや、側面形も斜めに割れていることなどといった点から、茎が目釘孔の箇所欠損した可能性が高いと考える。なお、本来短茎だったのか長茎だったのか(ライアン2017)については不明である。

以上を踏まえ、鉄本体の残存長が23.7cmを測ること、錆化により爆裂している箇所を除けば、身部・茎ともに薄手であること、そして身部の横断面形態が菱形(鎚造り)であることから、筆者の薄手菱形短剣(薄菱短剣)Ⅱ式(ライアン2021)に相当すると判断できる。

次に、有機物の痕跡を確認しよう。身部の表裏に布の痕跡が若干残存する。布の痕跡が表から裏にかけて回っていく箇所があるため、布巻き状態で副葬されたと考えられる。

関付近の錆膨れや礫および土の付着により判断が困難であるが、不明瞭な有機物が茎から身部にかけて認められる。木目と思われる部分的な痕跡から装具に由来する木質の可能性もある。この不明瞭な有機物が木質と考えた場合、装具の痕跡が関を超え、身部側に及んでいることから、二枚合わせ式扁平型の鉄剣装具<sup>(4)</sup>、一木造り式把縁穿孔型A類の鉄剣装具、あるいは四枚合わせ式のヤリ装具

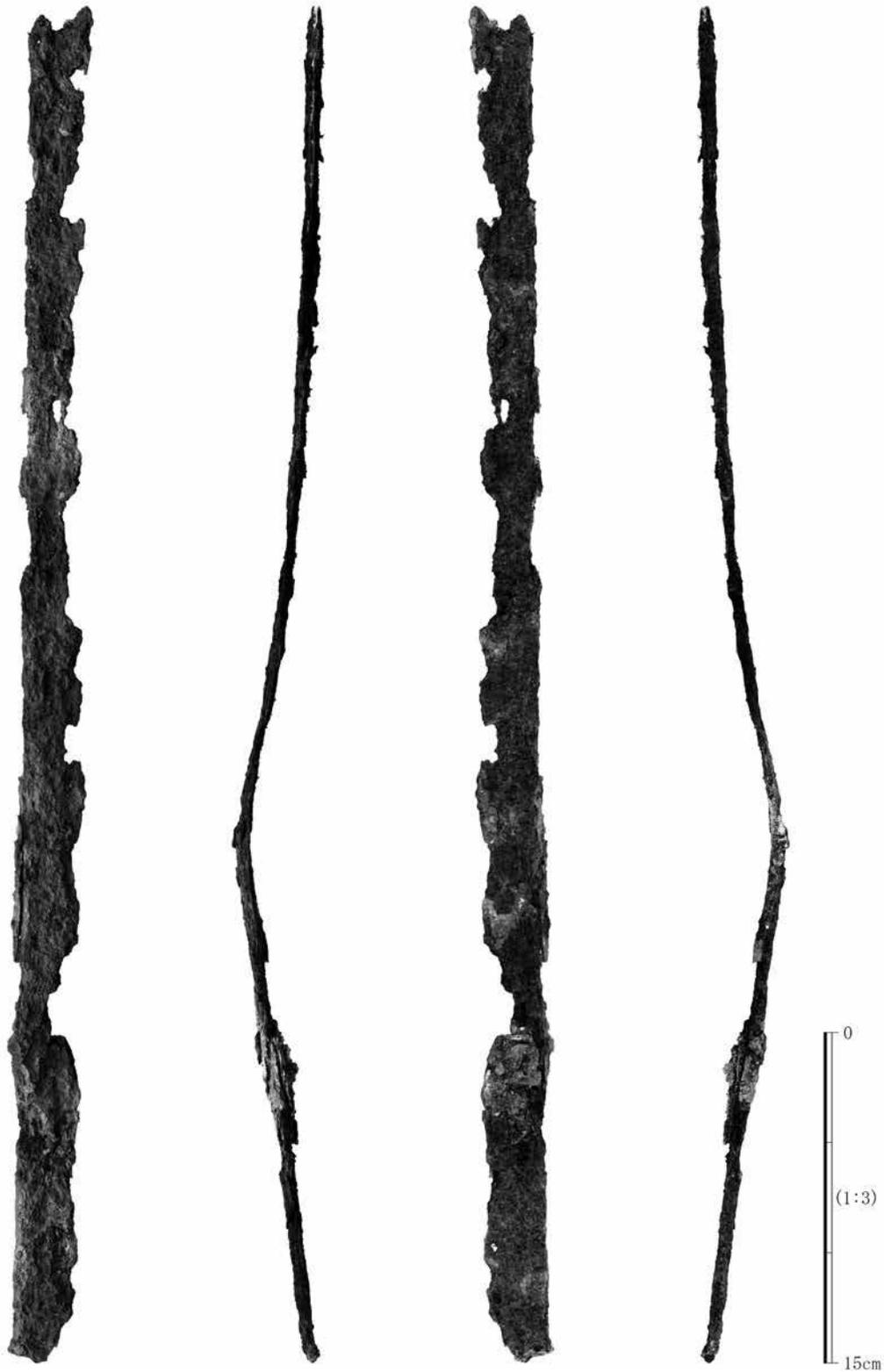
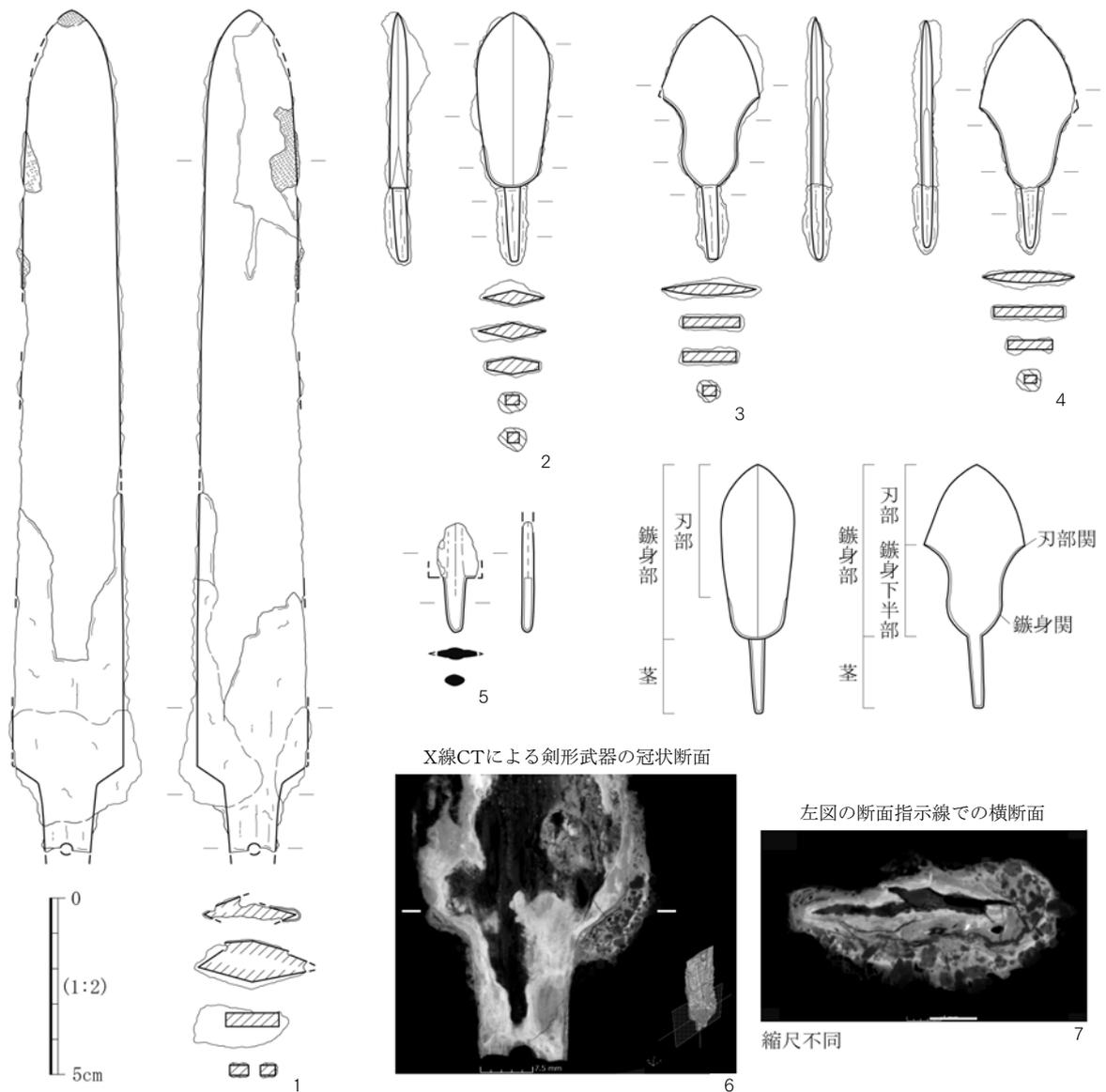


図17 鉄刀

の3つの可能性が考えられる（装具名称は豊島2010による）。

宮山墳丘墓<sup>(5)</sup>例の有機物の残存状況が不良であるため、装具そのものからは剣かヤリかの判断が困難であるため、関の形状や副葬配置などほかの要素から考えてみたい。まずは、顕著な斜角関をもつ



X線CTによる剣形武器の冠状断面

図18 剣形武器・鉄鍔

点である。岡山県域では、弥生時代終末期新相の足守川加茂A遺跡土器溜り出土例（剣かヤリか不明）や古墳時代前期前葉の七つ塚1号墳第2石室出土例（鉄剣）（ライアン2019b）のように斜角関を有する剣形武器も認められるが、弥生時代終末期以降の大半の鉄剣は直角関を志向していた（ライアン2017）。一方でヤリの中には、京都府元稲荷古墳例や岡山県津倉古墳例、奈良県上牧久渡3号墳例などのように、刃潰しや切断によるナデ関など非定形的な関を呈するものが少なくないが、剣装具からヤリ装具への付け替えに伴う改変であると考えられている（豊島2010、水野2018、ライアン2020b）。このことから、鉄剣に少ない顕著な斜角関を有する本例もヤリである可能性が浮上する。直角関を加工するにあたってナデ関ではなく斜角関とする機能的理由については疑問がないわけではないが、斜角の部分の横断面形態が茎のように長方形ではなく基本的に身部と同様な形状を呈する（図18-7）ことから、身部が加工されている可能性が推測できよう。

次に、副葬配置から考えてみよう。宮山墳丘墓の剣形武器は切先を足位方向に向けた状態で被葬者の右脚付近に配置されていた。東日本の出現期古墳における鉄剣とヤリの副葬配置を検討した杉

山和徳は、鉄剣は鋒を足位方向に向けた状態で上半身付近に置かれるのに対して、ヤリは同様な法則性が見出せないにしても、足側や棺外など被葬者から離れた位置に置かれることが多いと指摘した(杉山2013)。西日本各地の事例をみても同様な傾向が指摘できる(ライアン2020b)。鉄本体の詳細な位置は柄の長さとも関連するが、岡山県楯原寺山古墳、奈良県中山大塚古墳、兵庫県養久山1号墳第3主体部、同内場山墳丘墓SX-11、山口県国森古墳などでも、ヤリは鋒を足位方向に向けた状態で脚部付近に置かれている。滋賀県雪野山古墳や福島県会津大塚山古墳南棺(菊地1996)、徳島県西山谷2号墳などのように鋒を頭位方向に向けた状態で頭部付近に置かれている事例でも、棺外に配置されるものが多い。いずれにしろ、宮山墳丘墓の剣形武器の副葬配置はヤリの認定を否定するものではないといえる。

以上のことから、決定打に欠けるが、宮山墳丘墓から出土した剣形武器は長柄のヤリである可能性を考慮に入れる必要がある。

図18-2は鉄鏃である<sup>(6)</sup>。鉄本体の全長は7cm、身部長は4.9cm、茎長は2.1cmを測る。身部の最大幅は鋒側に寄っており2cmを測る。鏃身側縁は屈曲をもたず、小判形を呈する柳葉式鉄鏃で、面取りを施されている丸関を有する。また、鏃身と茎との間に段差が平面にも側面にも認められ、水野敏典の側面i類(水野2008)に相当する。身部の横断面形態は最大厚が4.5mmを測る菱形を呈し、明瞭な鏃をもつ。いわゆる「有稜系鉄鏃」(松木1992)である。茎の横断面形態は、関付近では長方形、茎尻に近い箇所では方形である。矢柄に由来する木質は茎に付着するが、樹皮など口巻きの痕跡は確認できない。以上の形態的特徴から、有稜系柳葉式A1類(水野2008)<sup>(7)</sup>に分類できる。

図18-3も鉄鏃である。鉄本体の全長は6.9cm、身部長は4.85cm、茎長は2.05cmを測る。身部の最大幅をもつ刃部関は若干欠損しているが、2.8cmに復元できる。鋒から2.3cmの部分にかけて刃部が形成され、厚みが3~3.5mmを測り、横断面形態は凸レンズ形である。鏃身下半部の横断面形態は、刃部が認められない長方形である。鏃身関は外側に大きく張り出す丸関である。側面に段差が認められず、幅が変わらない板状の側面形態を呈する。水野の側面iii類に相当する。茎の横断面形態は方形である。矢柄に由来する木質は茎に付着するが、樹皮など口巻きの痕跡は確認できない。平根系定角式鉄鏃(ライアン2019a)と分類できる。

図18-4は同じく鉄鏃である。鉄本体の全長は6.45cm、身部長は4.7cm、茎長は1.75cmを測る。身部の最大幅をもつ刃部関は若干欠損しているが、2.75cmに復元できる。鋒から2.5cmの部分にかけて刃部が形成され、厚みが3mmを測る凸レンズ形である。鏃身下半部の横断面形態は、刃部が認められない長方形である。鏃身関は外側に若干張り出す丸関である。側面に段差が認められず、幅が変わらない板状の側面形態を呈する。水野の側面iii類に相当する。茎の横断面形態は方形である。矢柄に由来する木質は茎に付着するが、樹皮など口巻きの痕跡は確認できない。図18-3と同様に、平根系定角式鉄鏃(ライアン2019a)と分類できる。

なお、この鉄鏃3点はまとめて出土しているが、鋒方向が統一されていなかったことが遺物の出土状況写真(図11)から見て取れる。茎に木質は残存しているが、棺外副葬の鉄鏃と石室壁体および木棺との位置関係を勘案すると、副葬に際して矢柄が切断された可能性がある。

図18-5は、銅鏃である。身部を大きく欠損しているが、残存長は3cm、残存身部長は1.5cm、茎長は1.5cmを測る。身部の両側縁を欠損し、関の残存幅は9.5mmを測るが、本来の関幅は約1.5cmに復元できよう。身部および茎の最大厚は3mmと薄く、厚みの変わらない板状の側面形態を呈する。茎に対して

関が直角を成すことから、本来は三角形の鍔身部であったと判断できる。緩やかな隆起は身部の中心を縦走し、そのまま茎に連続するため、茎を湯道とする連鑄式の特徴と考えられる。

## (2) 金属製武器からみた宮山墳丘墓の年代

次に、これらの金属製武器から宮山墳丘墓の年代について考えてみたい。

**鉄刀** まずは、弥生時代後期後半以降の鉄刀の副葬される時期を確認しよう。山陰および北陸では、素環頭大刀および大刀は弥生時代後期中葉～後葉に数例認められるが、終末期になると多く副葬されるようになる（豊島2010、林2020ほか）。一方で、当該期前後に位置付けられる他地域の鉄刀はやはり少ない。主要な出土例は、終末期新相の兵庫県内場山墳丘墓例（素環頭大刀）、終末期新相の大阪府崇禅寺遺跡S K08例（素環頭大刀）、古墳時代前期初頭の奈良県ホケノ山古墳（素環頭大刀および大刀）などが挙げられる。

鉄刀が普及していくのは、基本的に三角縁神獣鏡が共伴する大阪府安満宮山古墳や兵庫県西求女塚古墳、鳥根県神原神社古墳、滋賀県雪野山古墳、あるいは典型的な有稜系柳葉式銅鍔が共伴する愛媛県朝日谷2号墳などが示すように、古墳時代前期前葉以降となる。

宮山墳丘墓の鉄刀が曲がっているが、上述したように人為的に折り曲げられた可能性が高い。折り曲げ鉄器は、弥生時代後期の事例は少数認められるが、基本的に終末期以降盛行すると考えられる（田中2006）。当該期に位置付けられる折り曲げ鉄刀は、宮山墳丘墓例のほか、終末期古相の石川県寺井山6号墓第1主体部例や古墳時代前期前葉の朝日谷2号墳例が代表例であろう<sup>(8)</sup>。

**剣形武器** 木製装具がほとんど残存していないため、まずは鉄本体の特徴から考えてみよう。本例が相当する薄菱短剣は基本的に弥生時代終末期以降普及していくものである（ライアン2021）。なお、本例がヤリの可能性があるが、ヤリ装具である四枚合わせ式装具は、弥生時代後期末頃に出現し、終末期以降普及していく（豊島2010）。

**鉄鍔** 宮山墳丘墓から平根系定角式鉄鍔および有稜系柳葉式鉄鍔の2種類の鉄鍔が出土している。斜角関または丸関を有する平根系定角式鉄鍔は、弥生時代後期後葉から終末期に出現し、古墳時代前期前葉にかけて盛行する（ライアン2019a）。有稜系柳葉式鉄鍔についてはどうだろうか。表3から明らかなように、有稜系柳葉式鉄鍔の小型のA1類および関連性の高い中型のA2類の副葬時期は基本的に弥生時代終末期新相～古墳時代前期初頭（庄内式新相～布留0式併行）の範疇に収まる。広域編年体系の様々な課題が残っているとはいえ、短期間のうちに広域に共有される、一つのホライズンを形成する最古相の有稜系鉄鍔として評価できる（水野2013）。

**銅鍔** 宮山墳丘墓から出土した銅鍔は弥生時代以来みられる典型的なものであり、古墳時代前期初頭以降、有力古墳にしばしば副葬される白銅質の有稜系銅鍔とは明らかに異なる。

以上のように、金属製武器から宮山墳丘墓の時期比定を試みた場合、鉄刀など時期を詳細に絞り込むことが困難な遺物もあるが、弥生時代終末期新相から古墳時代前期初頭の時期幅の中に築造された可能性が高いと指摘できる。

## (3) 宮山墳丘墓の被葬者の性格について

最後に、金属製武器から宮山墳丘墓の被葬者の性格について考えてみたい。

長大な鉄刀の副葬は、岡山県域では浦間茶臼山古墳や備前車塚古墳など定型化した前方後円（方）

墳の特徴といえ、ヤマト政権から配布された、あるいはヤマト政権に連なることにより特権的に入手できた可能性が高いと考えられる。一方で、詳細は不明であるが、宮山墳丘墓から1 kmほどしか離れていない弥生時代後期後葉の鋳物師谷2号墓N主体部からも鉄刀の出土が伝えられているが、確実な情報ではないため、参考にとどめざるをえない。無論、古墳出現前夜において当該地域の政治勢力がどのように変容したかについては更なる検討が必要であるが、宮山墳丘墓の被葬者あるいはその被葬者を輩出した有力（諸）集団が独自に鉄刀を入手した可能性も否定できない。今後、鉄刀の生産と流通の実態を明らかにするため、更なる実証的研究が求められる（ライアン2019b: p.37）。

宮山墳丘墓の鉄刀が人為的に折り曲げられた可能性を述べたが、弥生時代終末期から古墳時代前期を中心にみられるこの儀礼的行為は、北部九州から瀬戸内海沿岸地域、そして日本海沿岸地域に大きく偏在する。折り曲げ鉄器の畿内における分布が希薄（清家2002、田中2003ほか）であり、また副葬古墳の多くが20m未満の小規模古墳である（清家前掲）点などから、鉄器の折り曲げ行為がヤマト政権とほぼ無縁であると考えられてきた。折り曲げ鉄器は小規模の平尾東7号墳のように奈良盆地にも少数認められる（水野2022）が、ヤマト政権を中心とした新式葬送祭祀の一般的な要素では決してない。以上を踏まえ、折り曲げの行為が入手前だったのか入手後だったのかは判然としないが、宮山墳丘墓出土鉄刀にみられる儀礼的扱いは通常の有功古墳（前方後円（方）形墳丘墓を含む）とは異なることが指摘できよう。

次に、宮山墳丘墓から出土した剣形武器に目を向けよう。上述したように、遺存状態や付着物により、本例が鉄剣なのかヤリなの判断が困難である。複合部材を組み合わせた糸巻きのヤリと考えた場合、ヤマト政権の象徴物として配布された可能性が高い（豊島2010）。一方で、鉄剣と考えた場合、薄手短剣の列島内生産が多能的であった可能性が高い（ライアン2019bほか）ことから、独自入手の可能性を考慮に入れる必要がある。なお、弥生時代終末期以降、薄菱短剣が北部九州で製作されていた可能性が高い（ライアン2021）が、薄菱短剣片が纏向遺跡からも出土しており、畿内中枢部においても製作されていた可能性を看過できない（ライアン2020a）。

宮山墳丘墓から最古相の有稜系鉄鏃として評価される柳葉式A1類鉄鏃（水野2008・2013）が1点出土しており、注目に値する。有稜系柳葉式鉄鏃が吉備で創出された可能性が指摘され（松木1999）<sup>(9)</sup> ほぼ通説化しているが、一方で吉備の鍛冶炉や鍛造剥片を含む鍛冶関連遺物など鉄器製作痕跡の詳細な検討を踏まえ、これを疑問視する見解もある（上柁2015）。いずれにしろ、表3から明らかなように、有稜系柳葉式A1・A2類鉄鏃は、古墳出現期の短期間に畿内中枢部を中心に西は愛媛から東は千葉県まで広域にわたって共有される点、出土遺跡の大半が前方後円（方）形の墳丘をもつ点、埋葬施設や朱の使用など葬送儀礼における共通性が強い点（水野2013）、そして大半の墳墓にヤリも共

表3 有稜系柳葉式A1・A2類鉄鏃一覧表

遺跡		墳形	時期	型式	副葬本数	ヤリ	編年根拠
岡山	みそのお42号墓第4主体部	方形	庄内式新相	A1類	1点		草原2016
岡山	宮山墳丘墓	前方後円形	庄内式新相～布留0式古相	A1類	1点	△	本報告、草原2016
千葉	高部32号墳	前方後方形	庄内式新相～布留0式古相	A1類	1点	●	北島2000
奈良	ホケノ山古墳	前方後円形	布留0式古相	A1・A2類	74点以上	●	久住2006、田中2013
京都	園部黒田古墳第1主体部	前方後円形	布留0式古相	A2類	18点以上	?	田中2013
愛媛	高橋仏師1号墳第2主体部	不明	布留0式	A1類	4点か	●	柴田2015
岡山	津寺遺跡堅穴住居283	—	布留0式新相	A1類	1点	—	河合2021
岡山	加茂B遺跡堅穴住居73A	—	布留0式新相	A1類	1点	—	河合2021
千葉	神門3号墳	前方後円形	布留0～1式	A2類	2点	●	北島2000

伴する点などから、宮山墳丘墓の柳葉式鉄鏃は、ヤマト政権を中心とした新式葬送儀礼を共有した広域性に特徴づけられるといえよう。

また、宮山墳丘墓を含む大半の出土遺跡には1または数点の有稜系柳葉式A1・A2類鉄鏃しか副葬されないのに対して、ホケノ山古墳や、木槨などからみてホケノ山古墳の被葬者と極めて緊密な関係にあったと考えられる黒田古墳(高野2006、岡林2018)から数多く検出されている(表3)<sup>(10)</sup>。これは、本数による序列、または生産中心からの遠近の結果であると考えられる。

宮山墳丘墓から出土した2点の平根系定角式鉄鏃は、大きさや形状において若干の差異はあるが、同一の「基本形」を志向していることが明白である。同様な形態的特徴を呈する資料は、古墳出現期を中心に中・東部瀬戸内、とりわけ備讃瀬戸と播磨灘の沿岸地域に分布が集中する。これらは、大型前方後円墳のみならず、集団墓や集落からも出土し、社会諸階層を縦断する様子が確認できる。以上のことから、平根系定角式鉄鏃の副葬の背景には中・東部瀬戸内の在地社会との関係が窺える(ライアン2019a)。

宮山墳丘墓から出土した銅鏃は、中央政権配布威信財と評価できる精美な有稜系銅鏃(松木1996)ではなく、弥生時代後期から終末期の集落や墳墓に副葬される銅鏃と同様なものである。古墳時代前期前葉の広島県才が迫1号墳は、東西11.2m、南北9.5mの小規模方形墳であるが、その第1主体部からも弥生的な銅鏃が出土しており、弥生時代以来の在地的な銅鏃の生産・流通または保有が当該期になっても一部継続する可能性が示唆される。

以上のように、宮山墳丘墓から出土した金属製武器を検討した結果、製作・入手された背景の異なるものが副葬されていることが明らかとなった。浦間茶臼山古墳と同じように、「ヤマト政権あるいはヤマト政権に連なる有力者に共通して認められる広域性と、在地社会とのつながりを示す在地性の二相」が認められる(ライアン2019a: p.26)。宮山墳丘墓に副葬された金属製武器の中において広域性を示すものとしては、有稜系柳葉式鉄鏃が、またヤリと考えた場合の剣形武器が挙げられる。鉄刀もその可能性が高いであろう。これらの外部との関係性を示す器物は、広域にわたる新しい社会政治的体制への参画の証しとして入手できたものと考えられる。一方で、吉備あるいは中・東部瀬戸内の地域社会との関係性を示すものとしては、平根系定角式鉄鏃および銅鏃が挙げられる。これらは地域社会で生産・流通したもので、中・東部瀬戸内における様々な活動や構築・維持していた社会政治的紐帯が反映されていると考えられる。

本稿はJSPS科研費JP21K13136の助成を受けたものである。

#### 《註》

(4) 二枚合わせ式扁平型の装具は弥生時代中期後半に位置付けられている(豊島2010)が、終末期の佐賀県中原遺跡SP13231の鉄剣に同型式の装具が装着されているため、中期後半以降も継続する可能性が高いと考える。

(5) 本遺跡は「宮山古墳」とも呼称しうるが、本報告のほかの考察との統一を図るため、「宮山墳丘墓」としておく。

(6) 鉄鏃の部位名称は川畑2009による。

(7) 水野敏典の柳葉式鉄鏃の分類では、A1類は次の特徴をもっている。すなわち「小型で鏃身平面形が屈曲部をもたない小判形である。鏃身尻側面に明瞭な鍛造の面を持つ。鏃身が厚く、鏃をもち鏃身断面が菱形となる。」(水野2008、水野2013: p.537)

(8) 兵庫県西求女塚古墳からも曲がった鉄刀は出土しているが、石室が大きく崩壊しているため、即座に「折り曲げ鉄器」とするにはなお慎重な判断が必要であろう。

(9) 岡山県の堅穴住居出土有稜系柳葉式鉄鏃は、従来考えられてきたよりも時期が下ることに注意が必要である(表3)。

有力首長から二次的に配布された可能性がある。

(10) 筆者は黒田古墳出土鉄鏃を熟覧していないが、A2類を含むという認定は水野 2013による。

《引用文献》(遺跡報告書は紙幅の都合上割愛させていただいた。ご了承ください。)

上柁武2015「弥生時代吉備の鉄器生産」『たたら研究』第54号 たたら研究会、pp.19-29

岡林孝作2018『古墳時代棺槨の構造と系譜』同成社

河合忍2021「吉備南部の精製器種群と布留式土器との関係について—弥生時代後期中葉～古墳時代前期前葉の分析から—」『古墳出現期土器研究』第8号 古墳出現期土器研究会、pp.3-23

川畑純2009「前・中期古墳副葬鉄鏃の変遷とその意義」『史林』第92巻第2号 史学研究会、pp.285-323

菊地芳朗1996「前期古墳出土刀剣の系譜」『雪野山古墳の研究』考察篇 八日市市教育委員会、pp.49-82

北島大輔2000「古墳出現期の広域編年—尾張低地部編年の提示、近畿・北陸地方との併行関係を中心に—」『S字甕を考える』第7回東海考古学フォーラム三重大会、pp.249-268

草原孝典2016「弥生墳丘墓から前期古墳へ」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第8号 岡山市教育委員会、pp.21-48

柴田昌児2018「四国北西部」『前期古墳編年を再考する』六一書房、pp.223-240

杉山和徳2013「ヤリについて考える。」『西相模考古』第22号 西相模考古学研究会、pp.73-78

清家章2002「折り曲げ鉄器の副葬とその意義」『待兼山論叢』第36号 大阪大学大学院文学研究科、pp.1-24

高野陽子2006「出現期前方後円墳をめぐる二、三の問題—京都府黒田古墳の再評価—」『京都府埋蔵文化財論集』第5集 真陽社、pp.347-361

田中謙2003「笠置峠古墳の鉄製品について—『折り曲げ鉄器』を中心として—」『前期古墳の副葬品と地域間関係』愛媛大学考古学研究室、pp.19-32

田中元浩2013「古墳出現期における墳墓土器祭祀の成立と波及」『立命館大学考古学論集VI』立命館大学考古学論集刊行会、pp.203-217

豊島直博2010『鉄製武器の流通と初期国家形成』塙書房

林大智2020「日本海沿岸地域における鉄製武器の普及と防御集落—舶載大型武器の受容と遺跡群の形成—」『古代武器研究』16号 古代武器研究会・山口大学人文学部考古学研究室、pp.71-86

松木武彦1992「古墳時代前半期における武器・武具の革新とその評価—軍事組織の生成に関する一試考—」『考古学研究』第39巻第1号 考古学研究会、pp.58-84

松木武彦1996「前期古墳副葬鉄鏃群の成立過程の構成—雪野山古墳出土鉄鏃・銅鏃の検討によせて—」『雪野山古墳の研究』考察篇 八日市市教育委員会、pp.351-384

松木武彦1999「岡山地域における弥生時代鉄鏃の展開」『古代吉備』第21集 古代吉備研究会、pp.58-78

水野敏典2008「古墳時代前期柳葉式鉄鏃の系譜」『樞原考古学研究所論集』第15 奈良県立樞原考古学研究所、pp.173-191

水野敏典2013「鉄鏃からみた古墳出現期の一様相」『技術と交流の考古学』同成社、pp.537-547

水野敏典2022「宇陀の古墳時代前期鉄製武器の一様相—平尾東6・7号墳—」『青陵』第165号 奈良県立樞原考古学研究所、pp.5-8

ライアン・ジョセフ2017「長茎短剣の成立過程」『古代学研究』212 古代学研究会、pp.20-40

ライアン・ジョセフ2019a「古墳出現期の瀬戸内における鉄鏃の生産と流通—浦間茶臼山古墳出土鉄鏃を中心に—」『古代吉備』第30集 古代吉備研究会、pp.13-32

ライアン・ジョセフ2019b「古墳出現期における刀剣類の生産と流通の二相—吉備地域を中心に—」『日本考古学』第49号 日本考古学協会、pp.23-44

ライアン・ジョセフ2020a「中四国・畿内における鉄製刀剣の普及」『古代武器研究』16号 古代武器研究会・山口大学人文学部考古学研究室、pp.53-70

ライアン・ジョセフ2020b「鉄製武器からみた津倉古墳」『津倉古墳』岡山大学考古学研究室、pp.91-97

ライアン・ジョセフ2021「弥生時代の北部九州における鉄剣生産の再検討」『考古学研究』第68巻第1号 考古学研究会、pp.31-52

《図表出典》

図17・18 ライアン作成

表3 ライアン作成

## 5 特殊器台・特殊壺

特殊器台は棺に転用された3個体と、墳丘墓の裾から出土したものとがある。前者も元は墳丘墓に用いられ、後に棺に転用されたと考えられており、完形に復元された1個体をはじめ大形の破片からなる。後者は小形の破片が主体である。

**記載** 全体にわたる項目と所見をまず記しておく。文様帯・間帯は下から第1文様帯、第2文様帯等と呼び、間帯幅には上下の突帯を含む。文様は4条程度の平行する沈線で構成されるが、これを帯と呼ぶ。平行する3あるいは4本のS字状の帯が2つの巴形透かし孔をつないで旋回し、それらの間に短い帯が配される。この文様を宮山型文様とする。

製作途中に丹塗りをを行い、さらに粘土を付加していった状況がしばしば見られる。丹塗りが内面まで及んだ場合、さらに粘土が付加した後にヘラケズリを加えると丹がヘラケズリ面に線をなして現れ、破面ではごく細い丹の線を観察できる。これを丹塗り接合線と呼び、図では1点鎖線で表示する。断面に示す場合も同様であり、丹が見られない通常の接合は破線で示す。突帯の外表面は他と同じく丹塗りであるが、突帯を貼り付ける面には先行する丹塗りがある場合と丹がない場合とがある。前者が多いため、破片の記載では丹塗りがない場合を中心に記述する。また、突帯貼り付け面は突帯下と略称する。

特殊器台・特殊壺は特殊器台1以外は1/4縮尺である。特殊器台の個体番号は前報告を踏襲し、新規は新たに番号を付す。断面と拓本で表示する場合は内面調整は記さないが、特記がない場合は左への横ヘラケズリである。また、特殊壺は部位にあわせて破片を配置するが、同一個体かどうかは不明である。なお、特殊器台の天地などについて春成2017と異なるものがある。粘土接合痕や突帯形状、丹塗り範囲等で判断し修正した。

**所見** 特殊器台は口縁拡張部内面から脚直立部上端までの外表面に丹塗りがなされる。文様帯にはタテハケが残るものもあるが、ヨコナデを加えた後に透かし孔を入れ、丹塗り後に透かし孔にもとづいて文様を刻むという工程である。逆三角形、巴形、三角形の透かし孔を右上から左下むかって斜めに連ね、このセットを任意の間隔で配置してその間に文様を配する。文様沈線内に丹がある箇所も見られる。沈線が浅くて丹が残った可能性もあるが、上方からの丹塗りが部分的に重なっているようである。

間帯はヨコナデが加えられるが、タテハケが残る場合もあり、一様ではない。

特殊壺外表面も丹塗りであるが、底部付近については良好な破片がなく丹の有無は不明である。口縁拡張部内表面も丹塗りがなされるものがある。

色調は内外表面褐色で、断面は褐黒色である。胎土には最大15mmの小礫、5mm以下の長石、石英、雲母、角閃石、シャモットと思われる赤橙色粒を含む。角閃石は少ない。一部で雲母の多寡が認められるものの胎土は共通し、焼成の差によって色調もある程度は変わるが、変化は少ない。特に特殊壺は色調の差が少なく、どの破片もよく似る。

### (1) 特殊器台棺使用個体

#### 特殊器台1 (図19)

棺に転用された個体で、完形に復元されている。重要文化財。レプリカを実測し原品で修正した。

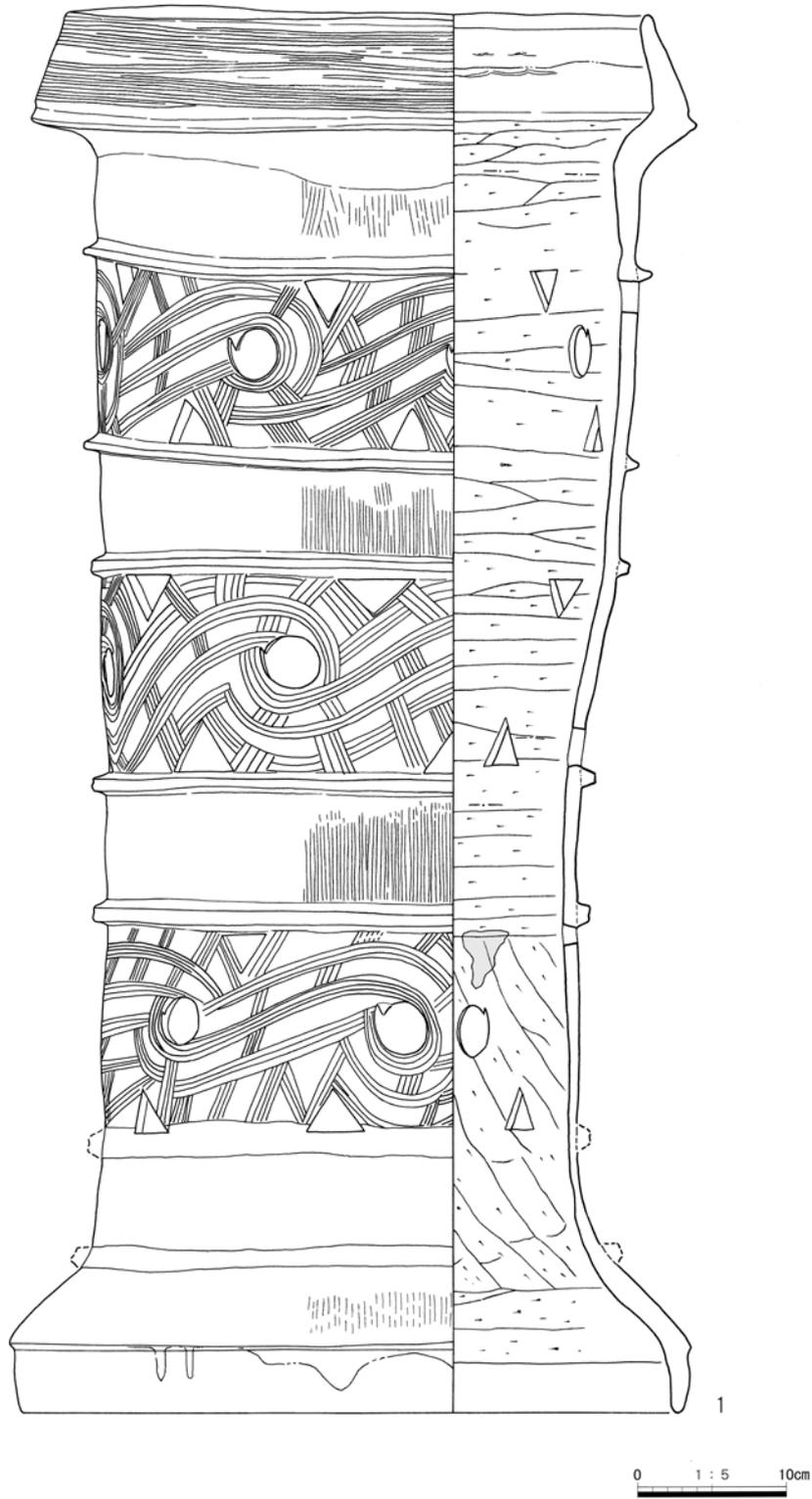


图19 特殊器台1 (特殊器台棺)

図示した側は棺下面で、棺上面側は流出のため失われた箇所がある。脚部は斜面下方側にあたるためと木が生えていたために流出が大きい。図示側（写真1）の第1間帯は大形破片が欠落するが、木の根によって移動、流出した可能性がある。

文様帯3段、間帯3段の構成で、口縁部はやや短く内傾し、筒部は上が大きくなる。器高95.7cm、口径38.8cm、裾部下端の径45.8cmである。筒部は上の第3文様帯で径36.4cm、最も細くなる第1文様帯下端が31.5cmである。外面は丹塗りで、口縁拡張部内面半ば（2点鎖線）に及ぶ。下は裾部下端までであるが、さらに下の脚直立部の半ばまで広がる箇所もある。

口縁拡張部外面には平行沈線を入れる。1回の施文の幅は狭く、ハケメ原体ではなく櫛状工具によるものである。内面はナデ調整であるが、粘土の接合痕が残る。

第1・第2文様帯幅約13.5cm、第3文様帯幅11.4cmである。いずれの文様帯にも宮山型文様を刻む。2つの巴形透かし孔をめぐるS字状の帯は3本の場合が多いが、4本や部分的に5本となる箇所もある。それらの端部の位置や交差する短い帯の位置や向きも一定ではない。基本デザインには添いながら、ある程度自由に施文したとみられる。

第3間帯が顕著であるが、突帯が水平にならないため間帯の幅は一定ではない。比較しにくい間帯幅はそれぞれ異なると言える。第1間帯はタテハケを完全に消すが、第2・第3間帯にはタテハケが残り、裾部と頸部はタテハケを半ばナデつぶした状態である。突帯は第1間帯の上下が剥脱しているが、特殊器台棺に転用される以前の剥離である。それより上の突帯は、第2間帯と第3間帯下側が断面台形、その上の2本は幅が狭く端面を丸く仕上げている。第3間帯下側突帯は部分的に剥脱しており突帯下中央に幅2mmの浅い突帯設定沈線が認められる（写真2-3）。突帯下全体がわかるのはここ以外では第1間帯上下と第3文様帯の上下であるが、それらには突帯設定沈線はなく、一部の突帯だけに配されたことがわかる。また、突帯下の丹塗りの有無については、剥離や欠損がない第2間帯下側突帯をのぞいて観察することができる。丹塗りが無いのは第1間帯の上下と第3間帯下側で、他は丹塗りが有る。ただし、丹塗りが無いとしたものでも突帯貼り付け面にごく薄い赤色を帯びる部分が見られる。本格的な丹塗りに先立ってごく薄い丹を塗った可能性なども考えられるが、成因を含めて今後検討する必要がある。

筒部の器壁は第1文様帯付近が6mmと最も薄く、第3文様帯付近で13~15mmと厚くなっており、上方を薄くする向木見型とは逆になる。内面調整は裾部が右への横ヘラケズリ、裾部上端から第1文様帯上端までが左上へのヘラケズリ、そこから受け部までが左方向の横ヘラケズリである。裾部のヘラケズリが上側と逆になるのは、脚部を口縁部状に作って逆転し筒部を伸ばしていったため、これは他の個体も同様である。ヘラケズリの幅は第3文様帯内側で3cm前後、下半の裾から第1文様帯にかけての内側ではさらに広いが、他は1.5~2cmの幅である。第1文様帯内側では縦方向4cm程度の長さの丹塗り面が部分的に見られる。ヘラケズリ面の上に形成され、さらにヘラケズリに切られている。丹塗り接合線は筒部上端と第2間帯上側突帯内側の上方と下方で見られる。

口縁部から脚端まで縦方向に黒斑がある。

#### 特殊器台2（図20）

特殊器台棺の長さを確保するために特殊器台1の口縁部側に入れ子状に配された大形破片、それと同じ部位の長さ28cmの長方形破片、また、そうした大きな破片に接合しない小破片若干がある。大形破片は筒部半周弱で、被葬者上側（頭部か）を覆うように用いられていた。これら以外に、裾

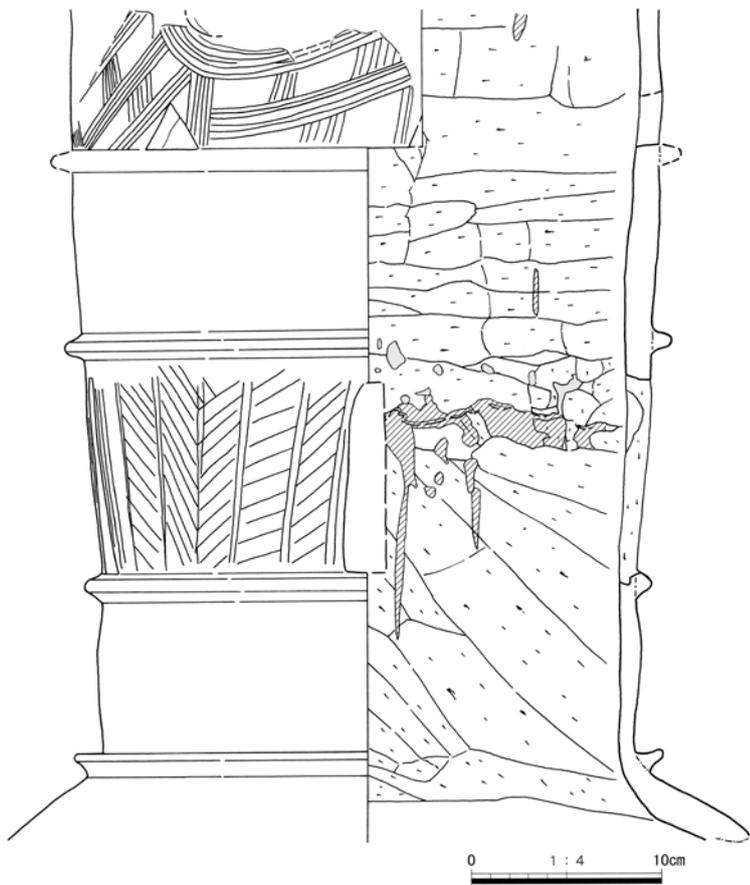


図20 特殊器台2(特殊器台棺)

部に接合する破片1点が墳丘墓北くびれ部から出土している。

第2文様帯の下部から裾部にかけて遺存する。筒部の復元径は下端で27.8cm、上端30.8cmである。第1間帯幅10.8cm、第2間帯幅11.2cm、第1文様帯幅11.4cmである。第2文様帯は部分的な残存であるが、文様から第1文様帯よりも広がる可能性がある。裾部の傾斜は部分によって若干異なる。

第2文様帯は宮山型文様である。第1文様帯は分割型で長方形の透かし孔の間に斜線文を入れる。長方形透かし孔の間隔は1/4周よりも短く、全周で5孔の可能性が強い。文様の区画線は2本ずつで、それを配した後に斜線を充填している。斜線の向きは左右それぞれの数区画を同じにし、線の傾きを区画ごとに変えている。施文はあまり丁寧

ではない。間帯や裾部はナデを加えて平滑に仕上げる。

第2間帯上側突帯と第2間帯下側突帯の一部が剥脱している。残る3条の突帯はいずれも断面が丸みをもち断面形は釣鐘形である。4条の突帯の貼り付け面のうち上2つはごく薄い赤色、上から3つめははっきりした丹塗り、下端は丹塗りの有無がはっきりしない。また、最下突帯の貼り付け面には部分的に段状の突帯設定線がある。第2文様帯透かし孔では孔面の一部に丹が見られる。

内面調整は裾部がナデ、裾部上端から第1文様帯上部までが左上への斜めヘラケズリ、その上2cmほどの範囲はヘラケズリがかからず、それより上は左へのヘラケズリとなる。裾部下端は粘土接合部ではずれている。平滑な面をなすが、きれいにはがれた面で、加工によるものではない。

内面には第1文様帯内面を中心に丹の付着、残存が見られる。外面と同様の濃い丹の面(グレー)と薄い丹の面(斜線)がある。後者はこの箇所塗ったとみてよいものと、上から垂れて着いたものからなるが、そのどちらか判別がむずかしい箇所も多い。ヘラケズリ調整を進める間に淡、濃の順で2回丹が塗られている。ヘラケズリの方向が変わる位置であり、製作工程にかかわるとみてよいが、その意味を十分に把握しがたい。

焼成は良く、やや軟質であることが多い特殊器台としては堅い焼き上がりである。また、間帯を丁寧なナデで平滑に仕上げる、施文の沈線が細いといった特徴がある。前報告では北くびれ部から出土した17を特殊器台2と同一個体とする。突帯の断面形が同様の丸みをもつことによるとみられるが、17は間帯にナデ調整を行うものの、タテハケの痕がかすかに残る状態であり、また、それほ

ど堅い焼き上がりではない。調整や焼成状態の部位による差の可能性もあるが、17は別の個体と判断する。

### 特殊器台3 (図21)

複数の大形破片に分割して特殊器台棺に用いられていた。最も大きい破片は長さ26cm、幅24cmである。破片の1つは特殊器台2とともに棺の一方で被葬者の被覆に用いられ、別の破片は特殊器台棺の本体となる特殊器台1の口縁部側面を覆うように配されていた。

第1間帯下端から第3文様帯の半ばまでを接合復元できる。第2文様帯・第3間帯は残存範囲が広く、全周の1/2よりもやや広い範囲が遺存する。下端は第1間帯下側突帯の上で折れているとみてよい。

復元径は下端で32.5cm、第3文様帯下端で36.1cmである。間帯幅は下から推定10.8cm、10.8cm、8.5cmで第3間帯が狭くなる、下2つの文様帯の幅はいずれも約12cmでほぼ等しい。ただし第3間帯の突帯は比較的水平に配されるが、第2間帯の突帯は歪みが大きいため、上下の文様帯を含めて幅は変化しており、数値は一応の目安である。

第1文様帯には長方形透かし孔を配する。透かし孔の間隔は復元全周の1/4よりも短く、特殊器台2と同様に全周5孔とみられる。文様は左からd図①、a図②、同③の順になる。d図①がa図③の位置になるが、文様があまり残存していないため第1文様帯は左に2区画移動して示した。長方形透かし孔に接して3あるいは4条の沈線からなる縦の帯を配し、その間に文様を配する。宮山型文様の三角形の透かし孔に挟まれる部分を切り出して直線表現に改変した文様であり、右上がりの直線帯の間にそれと斜交する短い帯を配する。文様は区画によって異なり、元図形に比較的近いa②、直線帯が主体となるd①と変化が大きい。

第3文様帯と第2文様帯には宮山型文様を配する。基本的に他と同じであるが、第2文様帯右端の巴形透かし孔下側にある斜線を充填した扇形図形は他で見られない表現である。また、第3文様帯は残存範囲が狭いが、一部で通常とは異なる形の帯が見られる。

間帯のうち第2と第3はヨコナデを加えるが、第1間帯は部分的にヨコナデで消されるもののタテハケを残しており、このタテハケは上の突帯剥離面に続いている。

突帯は断面が台形で面をもつ。第1間帯上側突帯は他と異なり、幅が狭く高さがある。突帯下にはいずれも丹の塗布が見られる。また、第2間帯上側突帯では突帯設定線がある。沈線ではなく浅い段を形成するものである。第2文様帯と第1文様帯それぞれ中ほどの位置内面に丹塗り接合線があり、20cm弱の間隔で丹塗りがなされたことがわかる。

内面調整は特殊器台2とよく似ており、第1文様帯内面中ほどまでが斜め上へのヘラケズリ、その上側は、図示した部分では左側に短くヘラケズリが入るが、資料全体では幅6cm前後のヘラケズリがかからない面が基本となる。これより上は横のヘラケズリである。全体にヘラケズリの幅は広い。図示した箇所では範囲が狭いが、ヘラケズリがかからない面の全体が帯状の丹塗り面となる破片もある。また、上部内面には朱の垂れ落ち跡が点在する。

図示左端付近では縦方向に黒斑が認められる。墳丘墓出土資料に同一個体と判断あるいは推定できる破片を見出すことはできない。

## (2) 墳丘墓出土破片

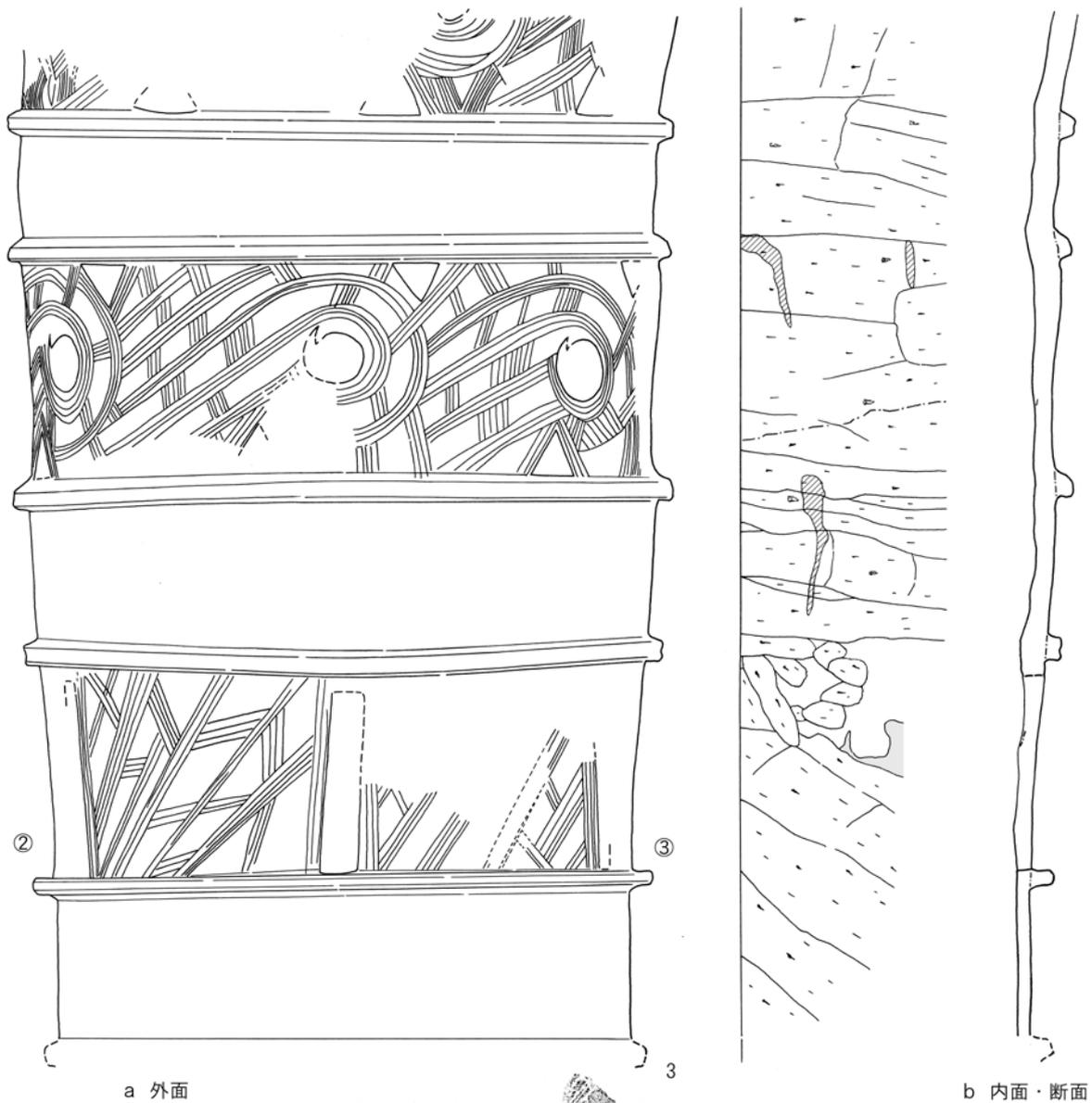


図21 特殊器台3  
(特殊器台棺)

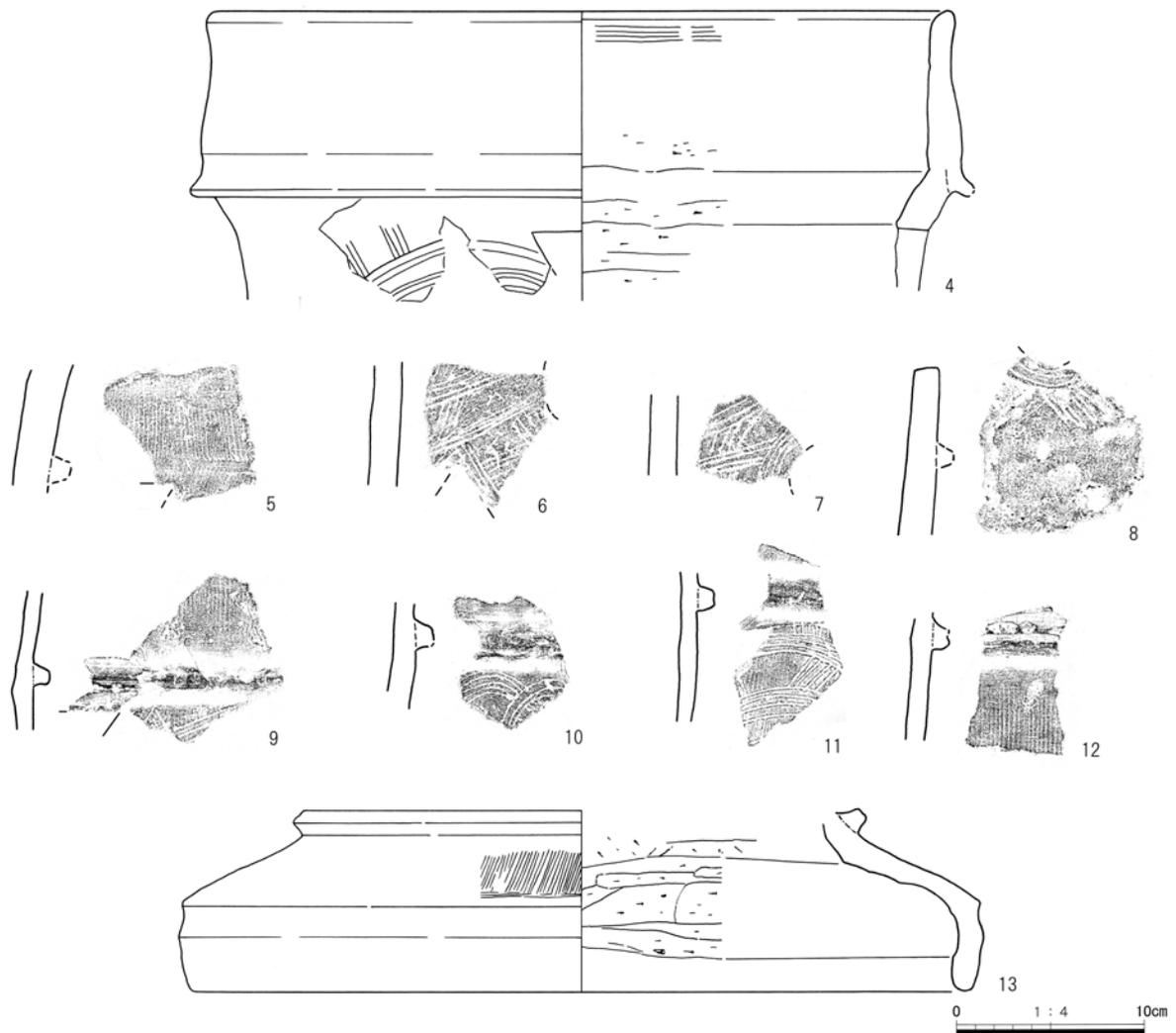


図22 後円部東裾部(1)

後円部東裾部 (図22・23)

6・7・10は特殊器台7として報告されたものである。口縁部4は複数の破片からなる。高さ9.9cm、厚さ1.4cmの大きな口縁拡張部をもち、受け部はほとんどなく文様帯に移行する。文様帯を区画する突帯はなく、文様の上端は適当に収めてある。受け部内面まで丹塗りである。この口縁部と保存状態が類似し同様に厚い器壁をもつ筒部片が5～8である。ただし、このうちの5は傾きと上端の特徴から頸部とみられ、4とは別の個体となる。6以下がどちらに属するかは判断しがたい。口縁部4を特殊器台7、頸部5を特殊器台9とする。5の突帯剥離面は部分的に丹塗りである。9～12は器壁が比較的薄い一群で、特殊器台7あるいは9の下部とみられる。10は弧状の帯が連なる変則的な文様である。この破片では突帯下に幅3.5mmの浅い突帯設定沈線があり、その面に丹塗りはない。13は踏ん張りが強く低い脚部である。脚直立部上半を窪ませており、特殊器台1や4のような裾部と脚直立部境界の段は形成しない。破片の組み合わせを判断することは困難であるが、少なくとも2個体の破片がこの地点に所在している。

特殊壺破片は14～16がある。このうちの胴部16aと16bは、肩部の形状や器壁の厚さなどから通常であれば別個体と判断する。しかしながら、この2点と同じ部位で両者の中間的な形状を示す破片があり、2点は同一個体と判断できる。1個体のなかでも形状の変化が大きいこの遺跡の土器の特

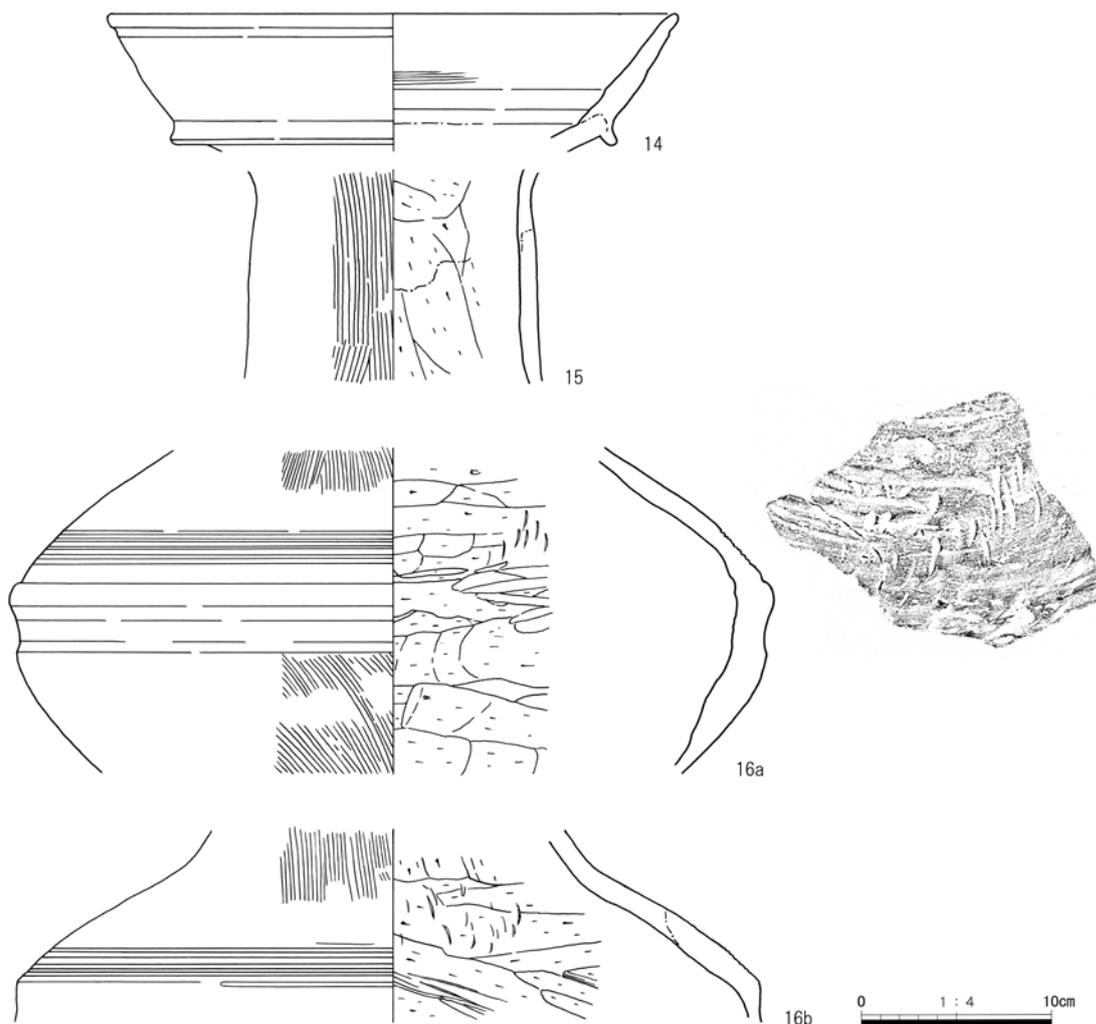


図23 後円部東裾部(2)

徴を典型的に示すものであるため、まぎらわしいが2つの図を掲載した。上記のように位置によって形状の変化が大きい。偏球形の胴部の中ほど上側には丸みをおびた低い突帯あるいは肩を形成し、下側には緩い稜を作り出す。2条の突帯が完全に痕跡化した形状である。肩部上側には板状工具による平行沈線を配する。胴部上方と下半には粗いハケが見られる。内面調整はヘラケズリであるが、肩部にあたる位置ではヘラミガキ状の調整が深く入る。また、その上部にはヘラ先を押し当てたような爪形の痕跡が多数認められる。両者は通常見られない調整で、これらを加えた意図はよくわからない。器壁の厚さは部位によって変化が大きい。頸部15は円筒状で、これに二重口縁14が付く。16bから頸部下端は緩やかに広がるとみられる。肩部、頸部上側、受け部上端に丹塗り接合線が認められ、特殊器台よりも小さい器種であるが頻繁に丹塗りがなされている。また、16aの上段突帯はこの部分だけ顕著に丹が残っており、丹の重ね塗りがなされた可能性が強い。

#### 北くびれ部 (図24・25)

この箇所でもっとも多くの特異器台片が出土している。丸みがある断面の突帯をもち色調等が似た破片が多い。

17は大形の破片で、間帯と上下の文様帯が遺存する。下側文様帯上端の復元径33.5cmである。内面調整は下側文様帯部分が横のヘラケズリ、間帯よりも上は指頭押圧とナデである。また、ヘラケ

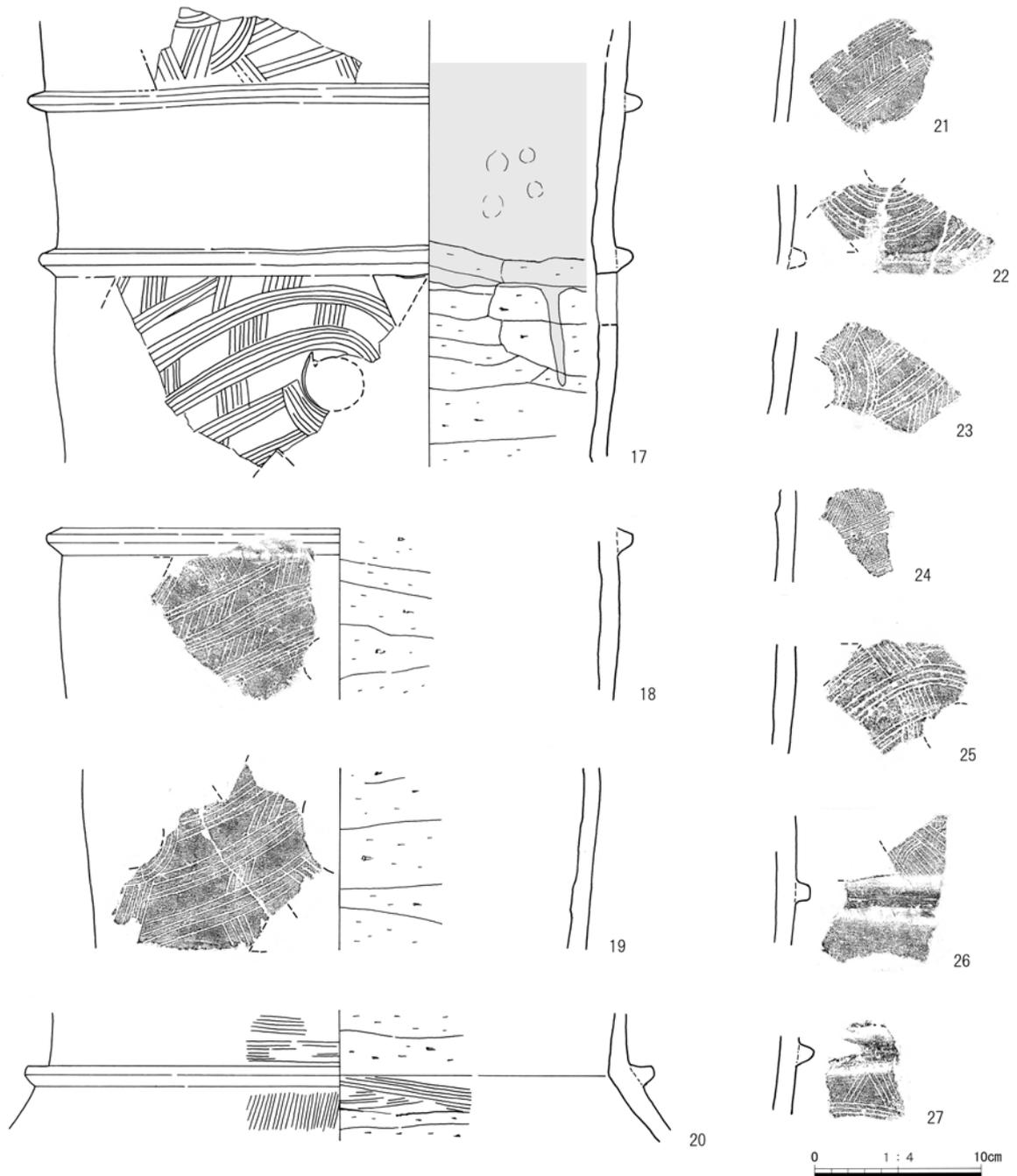


図24 北くびれ部(1)

ズリ範囲の上端から上は丹塗り面である。下側の文様帯が第1文様帯とすれば器壁が下方で薄くなるはずであるがそうした様子はなく、第2文様帯にあたと考えられる。

19は透かし孔の間隔が著しく狭く、それに合った文様としている。また、破片右側の巴形透かし孔はかなり大きいようである。22も透かし孔の間隔は狭く、弧をなす帯に交差して突帯側にのびる帯を配置していない。26では三角形透かし孔に平行する沈線が多く、それに交差する弧状の帯を配する。27の突帯は17の下側突帯に似ており、同一部位の可能性はある。26の突帯は他と異なり方形の断面である。

20は第1間帯下端から裾部上端にかけての破片で、間帯には浅いヨコハケが見られ、裾部はタテハケである。内面調整は裾部上端がヨコハケ、その上下はヘラケズリである。

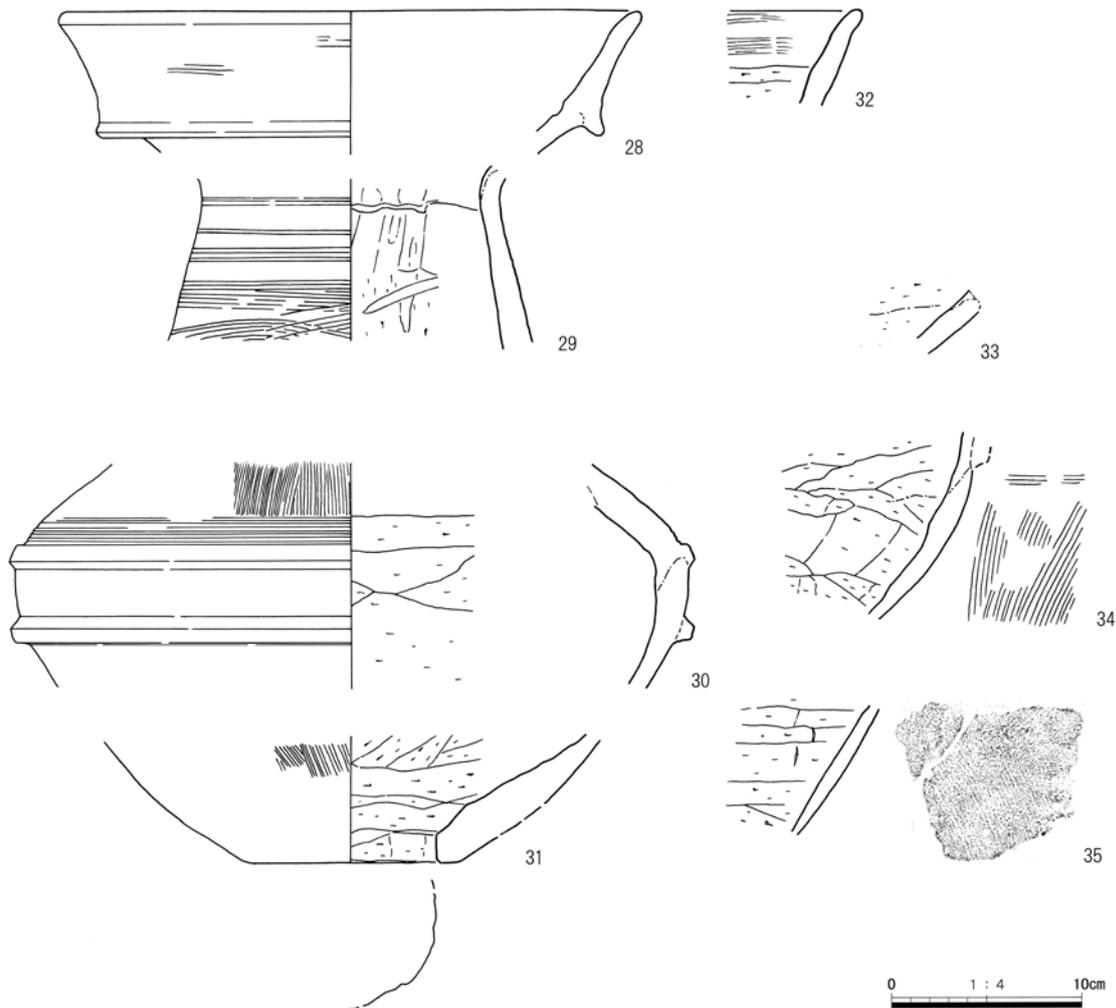


図25 北くびれ部(2)

20、22、26の突帯下には丹がない。また、22には突帯設定線がある。沈線というよりも浅い段に近い形状である。

特殊壺は28～35がある。口縁部28は内外面ともヨコナデで仕上げるが、口縁拡張部外面にはヨコハケが部分的に残る。頸部29の外面にはクシ状工具を用いた平行沈線を疎らに配する。内面はナデ調整ののち下半に上向きのヘラケズリを加え、丹塗りを行う。その後、頸部上端に薄く粘土を貼り加えてナデを加え、再度丹塗りを行っている。口縁部28の受け部内面にはごく薄い粘土を被った丹塗り面があるが、これは29の頸部上端から続いている可能性が強い。胴部30には2条の突帯を配する。上段突帯の上側にはクシ状工具による平行沈線があり、その上側はタテハケである。底部31は焼成前穿孔である。断面形状から底面は当初から形成していないとみてよい。孔面を整えるためにヘラケズリを加えているが、図示のように穿孔の形状は整ったものではない。口縁拡張部32は内面下半がヘラケズリである。口縁拡張部内面の丹塗りは不明瞭なものが多いが、これでは内外面とも丹塗りが見られ、特殊壺は口縁部内面にも丹を塗ったことがわかる。下段突帯下側の破片33・34・35のうち33・34は30とは別個体と判断した。35も同様に考えるが、個体内の変化がきわめて大きいとすれば31と同一個体となる可能性もある。34には貼り付けられた下段突帯が剥離した痕が残る。30と33・34では位置が若干異なるが、突帯付近で丹塗り接合がなされている。

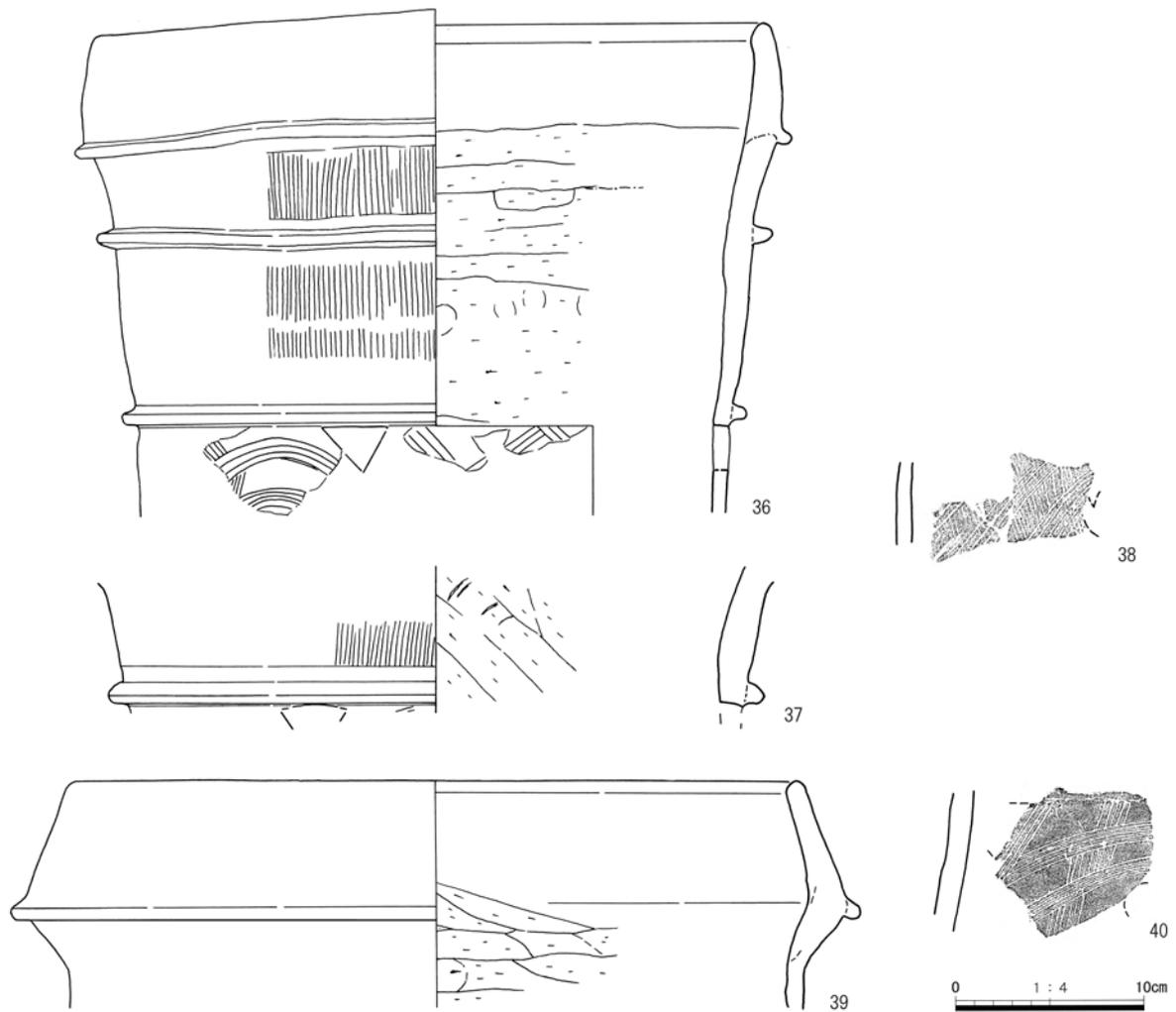


図26 後円部裾・前方部北側

#### 後円部北裾 (図26)

特殊器台36～38は後円部北裾に生じた溝（流路）に流れ込んだ状態で検出された。後円部東側から弧状にのびる円礫の堆積範囲の北端である。特殊器台口縁部36はまとまった量の破片があり、かなり復元できる（特殊器台5）。口縁部から第3文様帯上部にかけての破片で、第4間帯を設けている。受け部の開きはほとんどない。口縁端は水平にならずやや波打つ。口縁拡張部下側の突帯も同様に湾曲するため、受け部幅は均等にならない。外面は口縁部上端まで丹塗りがなされる。破面では受け部上端に丹塗り接合線が見られ、内面の別部位ではそれよりも少し低い位置で認められる。第4間帯上側突帯下は丹がない。

文様帯38はタテハケが残る面に施文する。37は36とは別の頸部片である。突帯の下側には文様帯の上端と逆三角形透かし孔が残り、破片上端で屈曲をはじめており、特殊器台1と同じく第3文様帯の上に間帯を形成しないで受け部に移行する。斜めヘラケズリの内面には爪形のヘラ圧痕が見られる。後円部東裾出土5に似るが突帯上側のナデがタテハケを消しており、別の個体と判断する（特殊器台10）。

#### 前方部北側 (図26)

ここからの出土は少なく、39と40以外は若干の小片があるにすぎない。40は北くびれ部出土17や

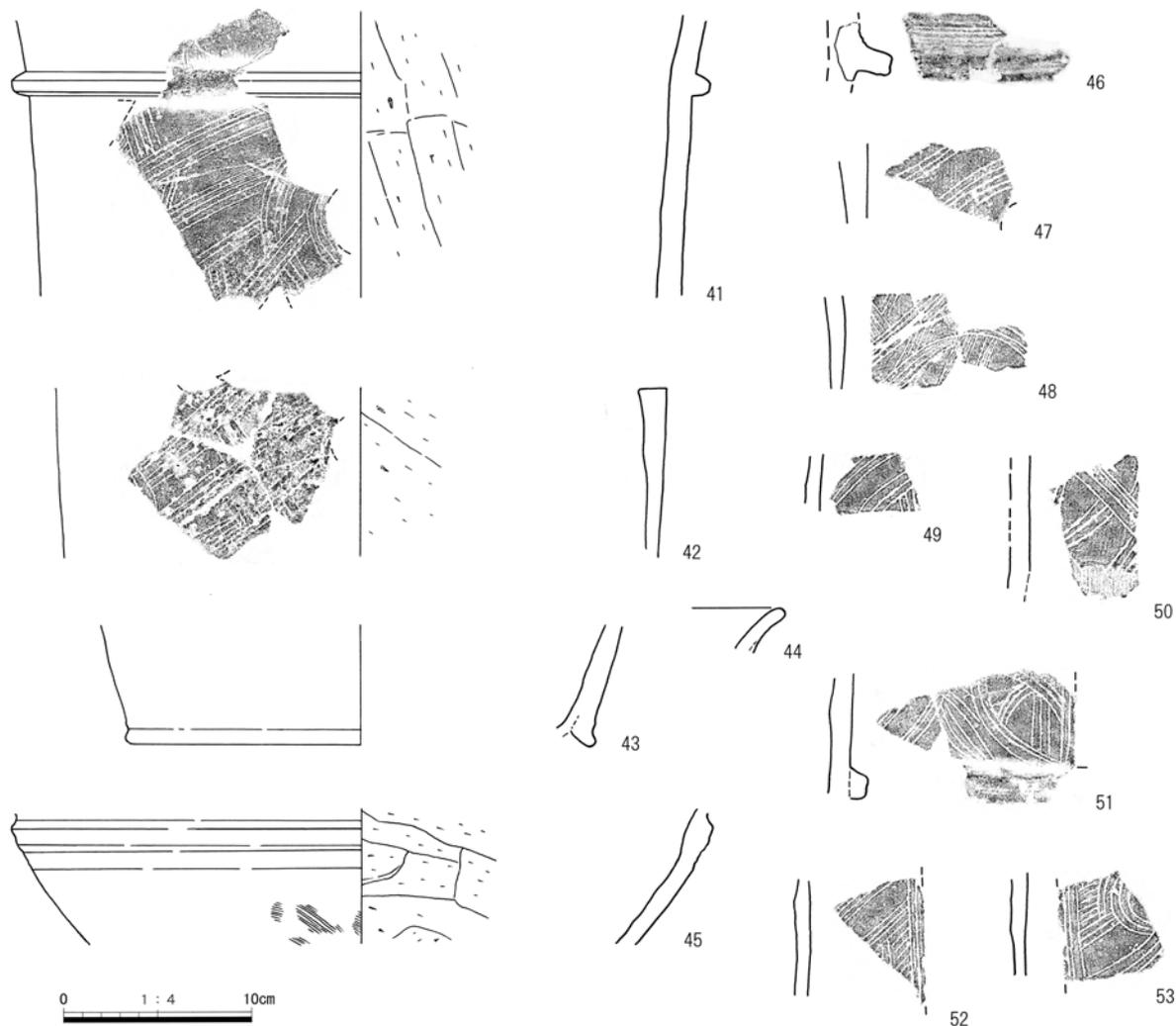


図27 前方部南側

18などに類似しており、それらと一連の可能性が強い。39は上半部での遺存状態はよくないものの上端まで丹の塗布が認められることや、ヘラケズリが裾部のものと異なって狭いことなどで脚部ではなく口縁部と判断できる。口縁拡張部外面は丁寧なナデで仕上げる。内面のヘラケズリは部分的に口縁拡張部に達する。復元直径が大きい、破片がそれほど大きくないことによる誤差とみられる。焼成は良く堅緻である（特殊器台8）。

#### 前方部南側（図27）

前方部北側よりは多いものの、破片の出土量は少ない。46は口縁拡張部下端と判断した。断面方形の大きな突帯を配しており古い段階の特殊器台を思わせるが、受け部を形成せず突帯が筒部と口縁部の境になるとみられる。外面の平行沈線はやや太い。破片上端は丹塗り接合線で折損している。これ以外の特殊器台片のうち、剥離のため不明の50を除けば、49と52が左横方向のヘラケズリであるほかは左上へのヘラケズリである。内面調整でまとまりを見せるが、文様の点では2群に分かれる。41・42・47は宮山型文様である。42は破片右端に巴形透かし孔の一部があり、2つの巴形透かし孔の間部分の破片である。この場合、上側には逆三角形透かし孔がくることになるが、破片の上端に遺存する透かし孔は丸みがあり、巴形あるいは紡錘形になるようである。

48～53のうち、51～53は長方形透かし孔をもつ。特殊器台3と同様に透かし孔の縁に細い直線帯

を配し、その間に3条の沈線で構成される細い帯を交差させた文様を刻む。48～50も帯は細く、同じ文様帯の破片とみてよい。宮山型文様に比較的似る48もあるが、複数の帯が向きを違えて配される51やわらび手形の帯が見られる53などからなり、文様の全体は推定しにくい。宮山型文様を大きく改変した文様である。これらは器壁が薄く第1文様帯、41が上側になると考えられる（特殊器台6）。

特殊壺口縁部2点のうち43は口縁拡張部が急角度で上に長く立ち上がる。下端は接合部分で受け部とはずれているが、外面と剥離面が一連の面をなし両者の境を認定しがたいため断面線の区分を行っていない。胴部下半45では下段突帯は低いものの突帯の形状をもつ。他に肩部や胴部の破片が若干あるが、図示がむずかしい<sup>(11)</sup>。

#### 南くびれ部（図28・29）

破片の出土量は比較的多い。大部分を特殊器台4（54～56）が占め、器台ないし壺60・61、そしてそれ以外の破片若干で構成される。特殊器台4は墳丘に伴って出土した個体では最も破片が残存する。脚端から第2文様帯下端までの部分56と第3文様帯上端から頸部にかけての部分54であり、やや軟質の焼成や色調で両者は同一個体と判断できる。脚部径42.0cm、第1文様帯下端径29.3cm、頸部下端径33.4cm。各部の幅は第1間帯9.4cm、第2間帯10.9cm、第4間帯10.8cm、第1文様帯12.8cm、脚部高さ10.0cmである。第1文様帯は横方向に半周に近い範囲が遺存する。図示中央では2つの巴形透かし孔をつなぐS字状の帯のみで、通常それらの上に配される短い帯が見られない。その右側は拓本を示したが、S字状の帯が少なく、それに直交する帯が多くて長い。変形が大きい宮山型文様である。第2文様帯と第3文様帯はごく一部しか遺存しないが、いずれにも三角形透かし孔の一部があり、宮山型文様と判断できる。3段の文様帯すべてが宮山型文様で構成される。

54上端の頸部は6.9cm以上の幅があり、上がかなり長い器形になるようである。頸部の透かし孔は巴形になると思われる。

丸みのある裾部と、同様に丸みをもつ脚直立部は段をなしており特殊器台1の形状に似る。間帯はどれも十分にナデをかける。裾部には薄くヨコハケが見られる。突帯の多くは台形の断面であるが、幅はそれぞれ異なる。第1間帯の上側突帯は基部が狭く鏢状に突出する。また、第2間帯下側は細く突出させた突帯の半ばを上を曲げて端面を形成している。第1間帯下段突帯下は丹がない。55は第2間帯上段突帯部分とみられる破片で、突帯剥離面は下半のタテハケが消されており、ナデを強く加えてその上端を突帯設定の目印としている。また、54の第3間帯下側突帯の接合面の断面は中央が窪んでおり、突帯設定沈線があるようである。

内面調整は裾部が右へのヘラケズリ、その上側に部分的に左へのヘラケズリが加えられ、それよりも上は第2文様帯まで左上へのヘラケズリで、斜め上へのヘラケズリ範囲は特殊器台1～3よりも広い。第1文様帯上部ではヘラケズリ面上に形成された丹塗り面がさらに削られ、残った丹塗り面が点在する。第3間帯から頸部にかけては幅の狭い横ヘラケズリである。丹塗り接合線が頸部と第2間帯に見られる。

57は焼成が良好な破片で、やや斜めになる突帯の端面に2条の沈線を入れる。58は突帯設定沈線がある破片である。59は特殊器台裾部で、膨らみのない裾部となる。外面の線はキズである。

特殊壺頸部62は、復元径が大きくなっているかもしれない。

60・61は鼓形器台として報告がなされたもので、脚としてここに図示したのと同じ形状の別破

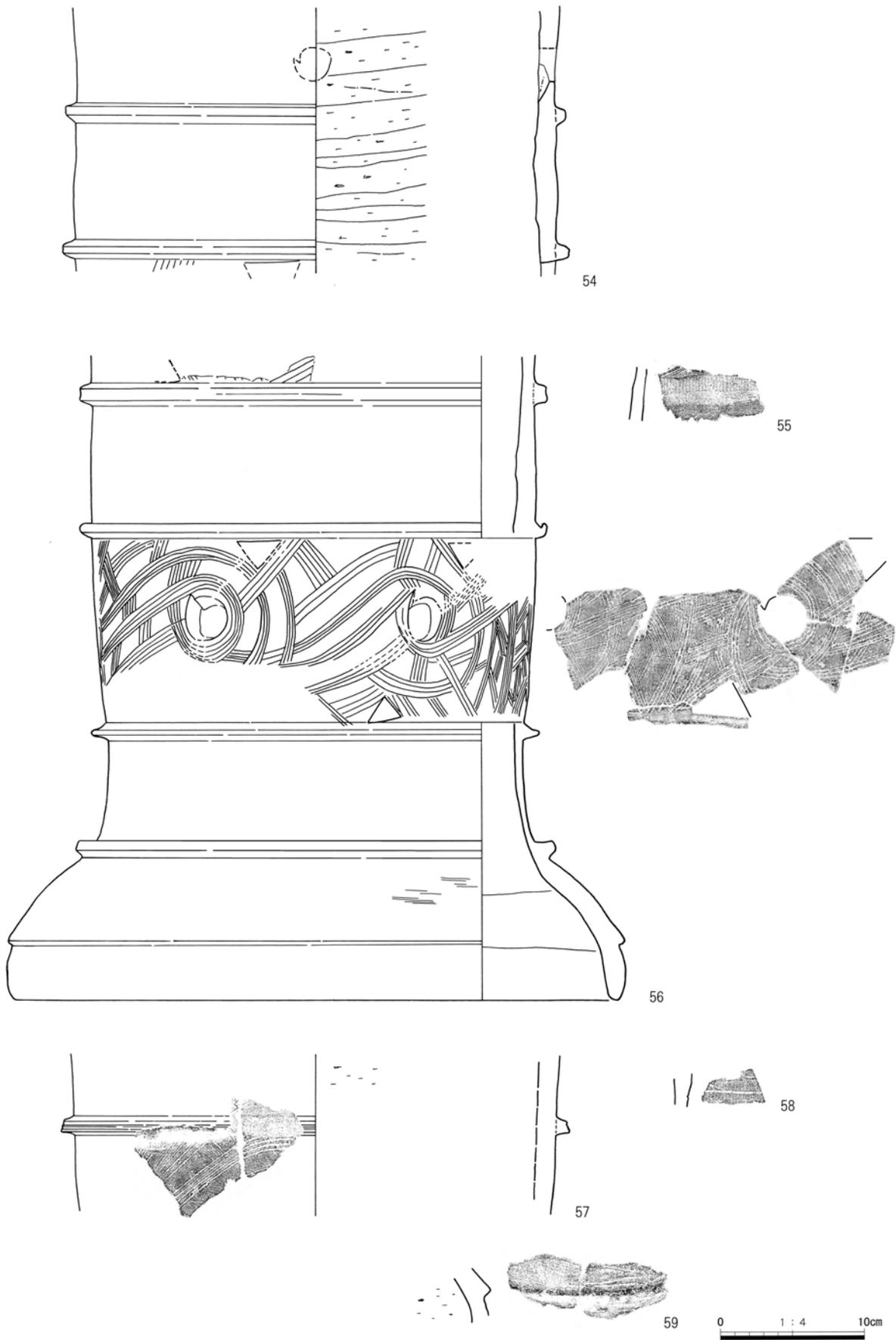


図28 南くびれ部

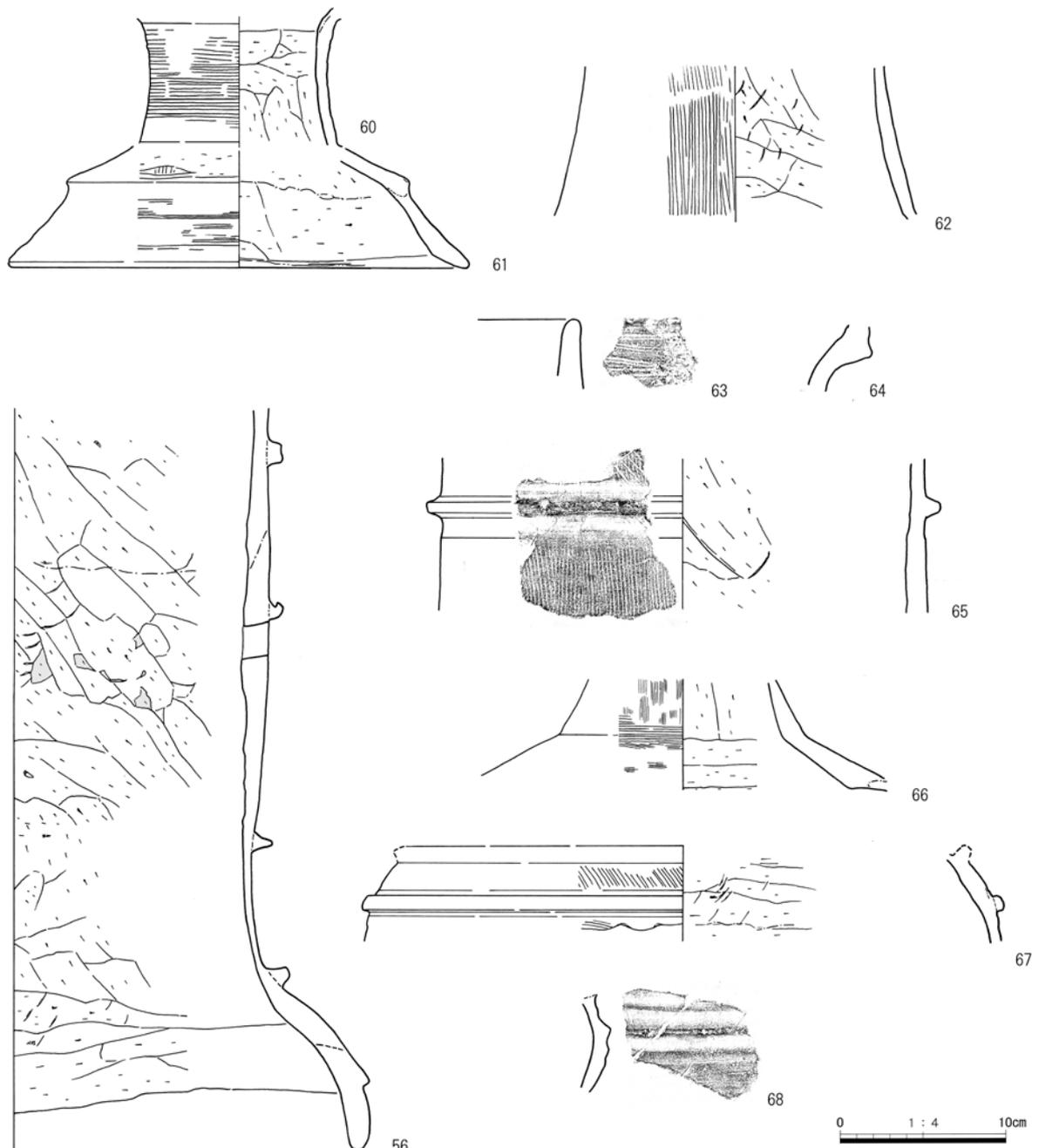


図29 南くびれ部ほか

片を口縁部とした図が示されている。そうした形状となる可能性は否定できないが、これまで示したように宮山墳丘墓資料は個体の同じ部位でも変化が大きいため、別破片が確実に口縁部になると判断することは困難であり、図示した形状にとどめておく。また、図の上下が逆で小形の壺になる可能性もある。筒部（頸部）は細く短い。頸部外面に櫛状工具による平行沈線を配する。脚部内面のヘラケズリは脚端の手前で終わり、脚端に面が形成されるが、その半ば（2点鎖線）から外面全体に丹塗りがなされる。

**墳丘墓以外（図29）**

墳丘墓南側に所在する積石遺構から特殊器台65、特殊壺頸部下端66、特殊壺胴部67・68が出土している。65は間帯のタテハケが明瞭で、特殊器台2と同様とすれば筒部下端の可能性が考えられる。

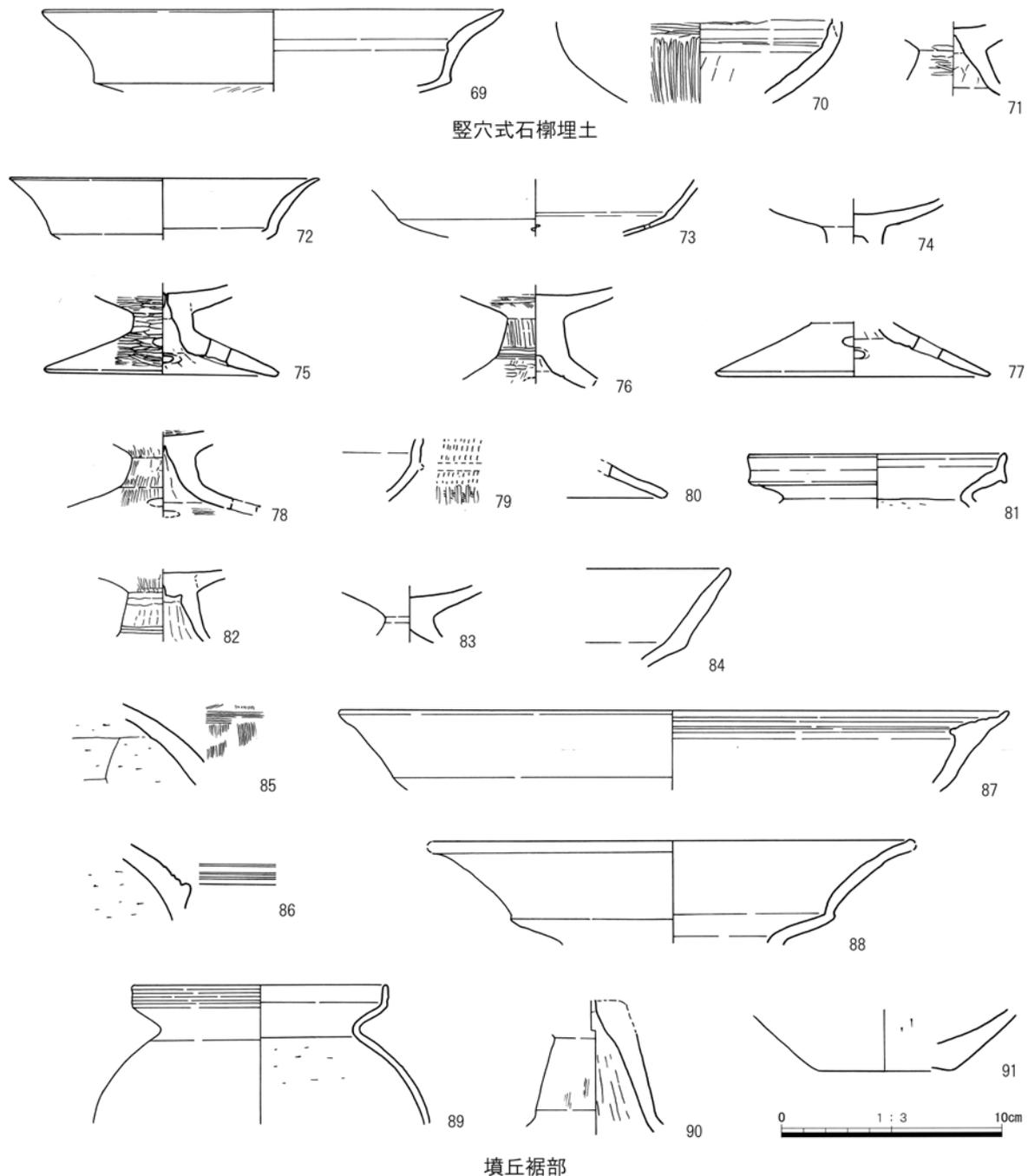


図30 墳丘墓出土土器

突帯下に丹はない。67は2つの突帯がかなり上に位置している。突帯間には斜めのハケがあり、下段突帯の下方外面に粘土接合線が残る。内面の下段突帯にあたる位置には丹塗り接合線が見られる。68の下段突帯は痕跡的である。上段突帯下側に丹塗り接合線があり、この部分で剥離している。特殊器台口縁部63は丘陵西端のB15特殊器台棺に近い位置に所在するB10からの出土である。小片であり、この埋葬に伴うのではなく流入と考えられる。特殊器台棺に関係するとみられるが、特殊器台1の口縁部は完周するので特殊器台2あるいは3の口縁部と考えられる。特殊器台棺の設置位置近くで特殊器台の分割が行われ、破片が他の埋葬上に流れ込んだと考えられる。特殊器台口縁部64は遺跡北東の山道で採集されたもので、墳丘墓の土器が広範囲に拡散したことを示している。

## 6 弥生土器・土師器

### (1) 墳丘墓竪穴式石槨埋土(図30)

以下では基本1/3、大形器種1/4で示す。石槨埋土から出土した土器は少なく69～71の3点である。高杯69は比較的大きいが脚付直口壺70は通常は実測を見送る小片で、高杯71も小片である。69は後期中葉<sup>(12)</sup>。70は後葉、71は末葉である。71は丹塗りである。石槨上部の土は攪乱を受けていたことを考慮する必要があるが、小片が少量で年代も幅があり、これらが石槨に直接関係するとは考えにくい。

### (2) 墳丘裾(図30)

特殊器台等の破片に混じって弥生土器・土師器が出土している。72～81が北くびれ部、82・87が前方部北側のB22付近、83・84は後円部北裾、そして85・86・88～91が南くびれ部からの出土である。南北のくびれ部からが主体を占め、短脚の高杯・脚付直口壺は北くびれ部付近にまとまる。

これらのうち87は後期前葉の高杯で、墓群形成初期の遺物と考えられ、遺物の移動がないとすればその時期の埋葬が付近にあったことが予想される。91は上げ底の底部で87に近い時期か。88～90は古墳時代前期(X d・e期)の資料で、南くびれ部で墳丘墓築造後に設けられたB25に近い位置から出土しており、この埋葬に伴うと考えられる。

短脚の高杯等のうち、75は杯部内面の仕上げから脚付直口壺と判断でき、上部内面の色調から76もその可能性が考えられる。75は丹塗りで外面が横へラミガキ、杯部中央には細い焼成後穿孔がなされる。残存・保存状態は良い。72も丹塗りである。73は杯部に細い焼成後穿孔を入れる。77脚裾部は横方向の残存範囲が比較的広い。74・77は同一個体であるかもしれない。79は小片で突帯は剥離しているが、細い突帯をもつ脚付直口壺で、細かい列点文を突帯の上下に入れる。甕81は末葉である。特殊壺胴部86は細い突帯と平行沈線をもつ。墳丘墓に伴う特殊器台等とは異なり褐色で1mm以下の角閃石・金雲母粒などを含み、小形ながら立坂型の特殊壺で78等と同時期である。以上のように比較的大きな破片を含んでおり、これらが特殊器台に、すなわち墳丘墓に伴う可能性を考えることもできる。その一方で、へラミガキが縦方向の78・82と横方向の75・76があり、前者が後期後葉(VIII d期)、後者が末葉(IX a期)に編年され、若干の時期差が認められる。

墳丘墓の下部が削り出しで形成されたとすれば、地山にあたる部分に先行する後期後葉から末葉にかけての埋葬が所在し、それに伴う土器が盛土に混入したり、裾部から洗い出されるなどによって墳丘墓の葺石や特殊器台とともに堆積した可能性を考える。短脚の高杯は墳丘墓の年代を示すものではないと判断する。

### (3) 墓群出土土器(図31～34)

1章で述べたように、丘陵の各所に埋葬が設けられており、土器を伴うものが多い。該期の事例から、埋葬施設上に配された土器が木棺の腐朽に伴って埋没したものが多いと思われるが、墓壇埋土出土を含む可能性がある。以下では丘陵西先端側から割り振られた遺構番号の順に示す。また、古墳時代後期など、年代が離れるものは後にまとめる。

B2 甕92は遺構から遊離した状態で出土しており、土器の年代後期中葉が遺構の年代とは直結

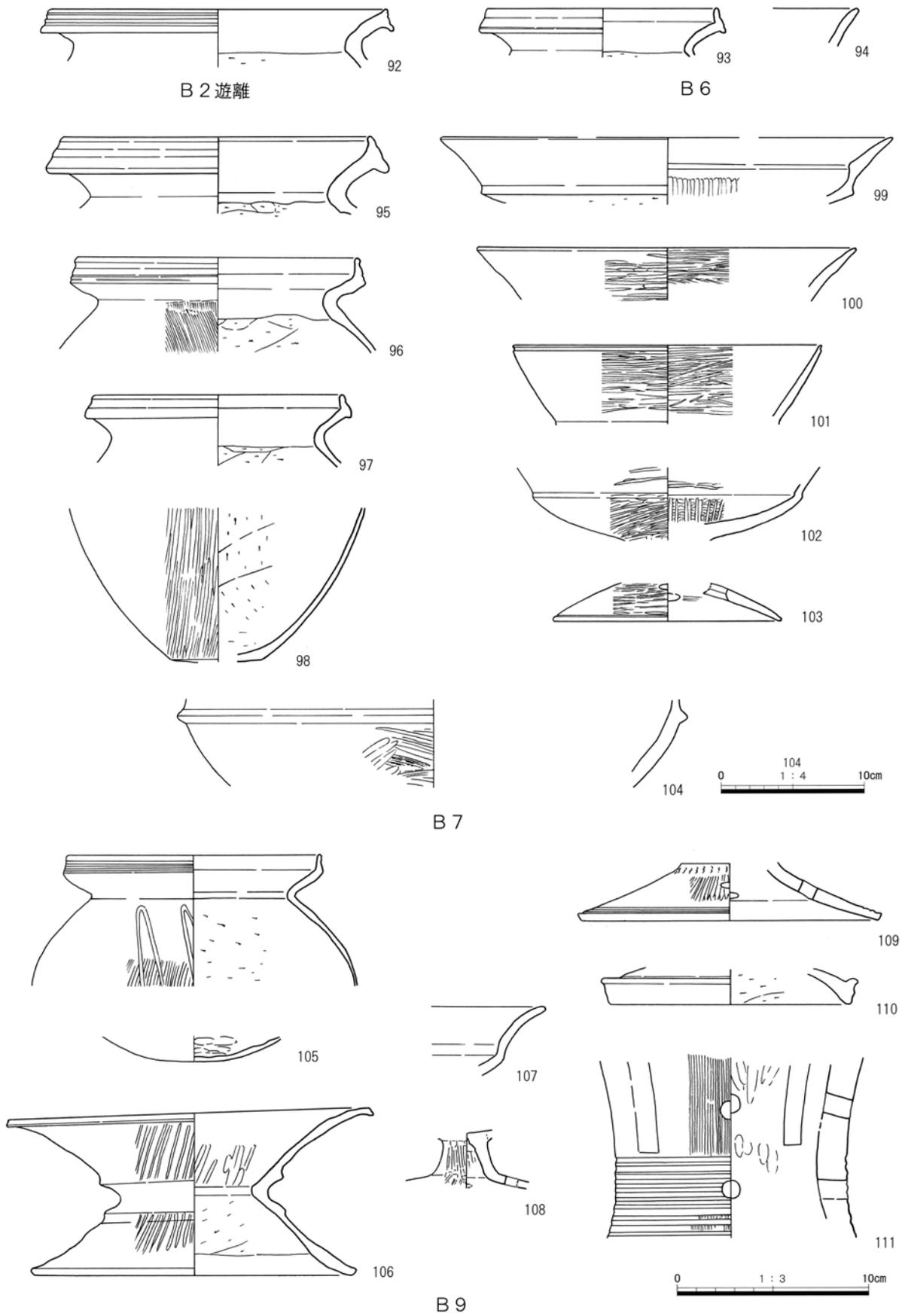


图31 墓群出土土器(1)

しない可能性がある。

**B 6** 後期後葉の甕93と丹塗りの高杯小片94が出土している。

**B 7** 後期中葉の甕95・高杯99は混入で、96～98、100～104が遺構の年代を示すと判断できる。甕と高杯からなり、後期末葉（IX a 期）である。97・98は同一個体である。101と102も同一個体の可能性があるが、復元径に差があり類似した2個体とも考えられる。104は特殊壺である。突帯が細く後期末葉よりも前の形態を思わせるが、内面調整がナデ、外面に横ヘラミガキがあるなど通常の特特殊壺とは内外面の調整が異なり胎土も異なる。在地で製作された規範にのらない製品と考える。

高杯99は内外面に朱の塗布が見られる。後期中葉から後葉にかけてごく稀に見られる朱塗り土器の一例である。

**B 9**<sup>(13)</sup> 甕105・鼓形器台106のほか高杯や器台がある。甕105は接合できないものの胴部の破片もあり、1個体が配されたとみてよい。鼓形器台も個体のほぼ全体が遺存する。外面および内面上半には疎らにヘラミガキを行う。また、外面と上面に丹塗りがよく残る。この2点に対し、他は小片である。遺構の年代は105・106が示す古墳時代前期（X d・e 期）である。また、先行する時期の小片から、近い位置に後期後葉（108）、中葉（109～111）の埋葬が所在したことがうかがわれる。器台111は内面に丹が点在しており、元は丹塗りとみられる。

**B 10** 前述の特特殊器台口縁部63のほか高杯の小片112、壺胴部片が出土している。

**B 13** 図4の原図では通常の埋葬は長方形で示すが、この埋葬は壺の形で示されており、図1に掲載された図も同じ表示で、土器棺である。胴部破片は若干があるが土器棺の量ではなく、口縁部付近のみの取り上げがなされている。113はく字形に内傾する口縁部で、讃岐から西部瀬戸内にかけての地域からの搬入品である。破面を含めた色調はチョコレート色に近い褐色で、胎土は砂粒が少なく0.5mm以下の石英、角閃石かと思われる黒色粒が見られる。胴部破片は図示できないが、外面は斜めのハケメ、内面上部は斜めのハケメ、内面肩部以下が横ヘラケズリである。古墳時代前期に位置づけられ、北東上方に位置するB 9等に近い年代である。製作地の究明は今後の課題である。なお、搬入土器であることと被葬者の出自は分けて考えるべきである。県内の類例は管見の範囲で赤磐市便木山遺跡土器棺K 6、同斎富古墳群土器棺墓2、総社市一丁坊古墳出土破片がある。

後期中葉の高杯114はB 13の西側から、115～117は東側からの出土である。小形丸底壺117はB 9と同様の年代（X d・e 期）である。高杯114の脚部の透かし孔は2個1対3方向である。

**B 20** 墳丘墓の前方部前側に所在する狭長な「箱式石棺」である。末葉の甕118が出土しているが混入であろう。

**B 22** 墳丘墓前方部北側に所在する「箱式石棺」。埋土から特特殊器台突帯片が出土しており、墳丘墓よりも後に設けられたものである。

**B 25** 墳丘墓の南くびれ部下方に墳丘墓の葺石を転用して構築された「箱式石棺」である。前述のようにこの埋葬に近接した位置から図30に示した88～90が出土しているが、それ以外に鉢119が「箱式石棺」上面から出土している。破片の量は多く1個体分があるが、胴部下半が小片となっているためここでは上半のみ示した。X d・e 期。

**B 27** 古墳時代前期（X d・e 期）の壺120が遺構の年代を示す。他に後期中葉の壺122・高杯123がある。

**B 28** 出土土器は多く、器台124、125のほか高杯126・127、壺底部128がある。器台124は中ほど

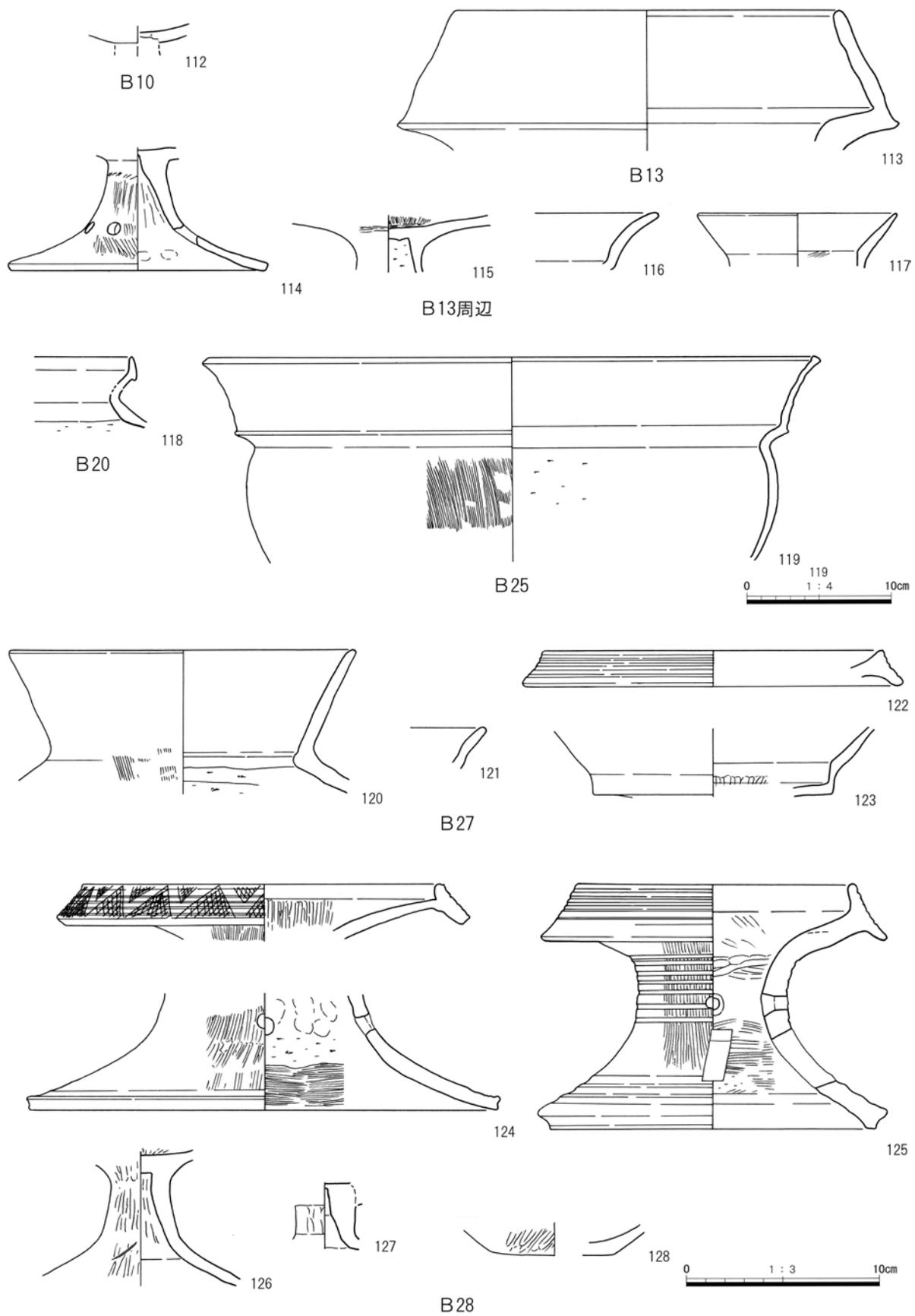


图32 墓群出土土器(2)

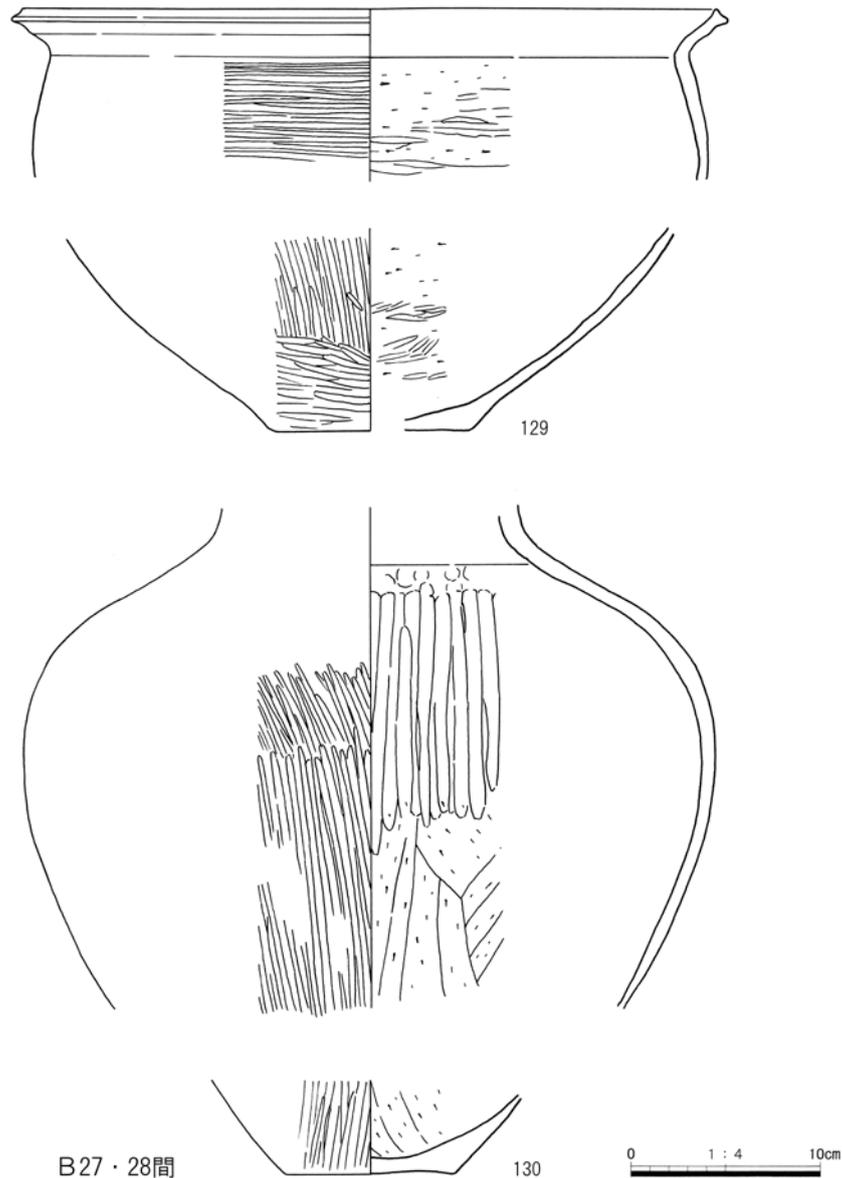


図33 墓群出土土器(3)

の部位を欠くが破片は多い。器台125は中ほど部分の器面の剥離が顕著で、残存部は多面体のような形状になっている。含水加熱破碎(宇垣2023b)がなされたと判断する。短脚の高杯127が異なるが、他はまとまっており後期中葉が遺構の年代である。

**B27・28間** (図33) 2つの埋葬の間にあたる位置から後期後葉の鉢129と壺130の大形破片がまとまって出土している。攪乱状の掘り込みから破片が重なった状態で出土しており、破片には土が付いておらず黒色の有機物が全体に付着する状態であった。破片の大きさと器種の組み合わせから土器棺と判断でき、開壘で出土し投棄されたと考えられる。小片を含めて破片が遺存することから、本来の遺構もこの位置であったと思われる。壺の内面上半は縦方向のユビナデである。

**B30** 墳丘墓前方部前側に位置する長大な埋葬で、棺の横断面はU字形である。鉢131、小形の鉢132、高杯133が出土している。131は細かいタテハケの胴部破片があるが接合しない。鉢131の古墳時代前期(X b～c期)が遺構の年代を示す。

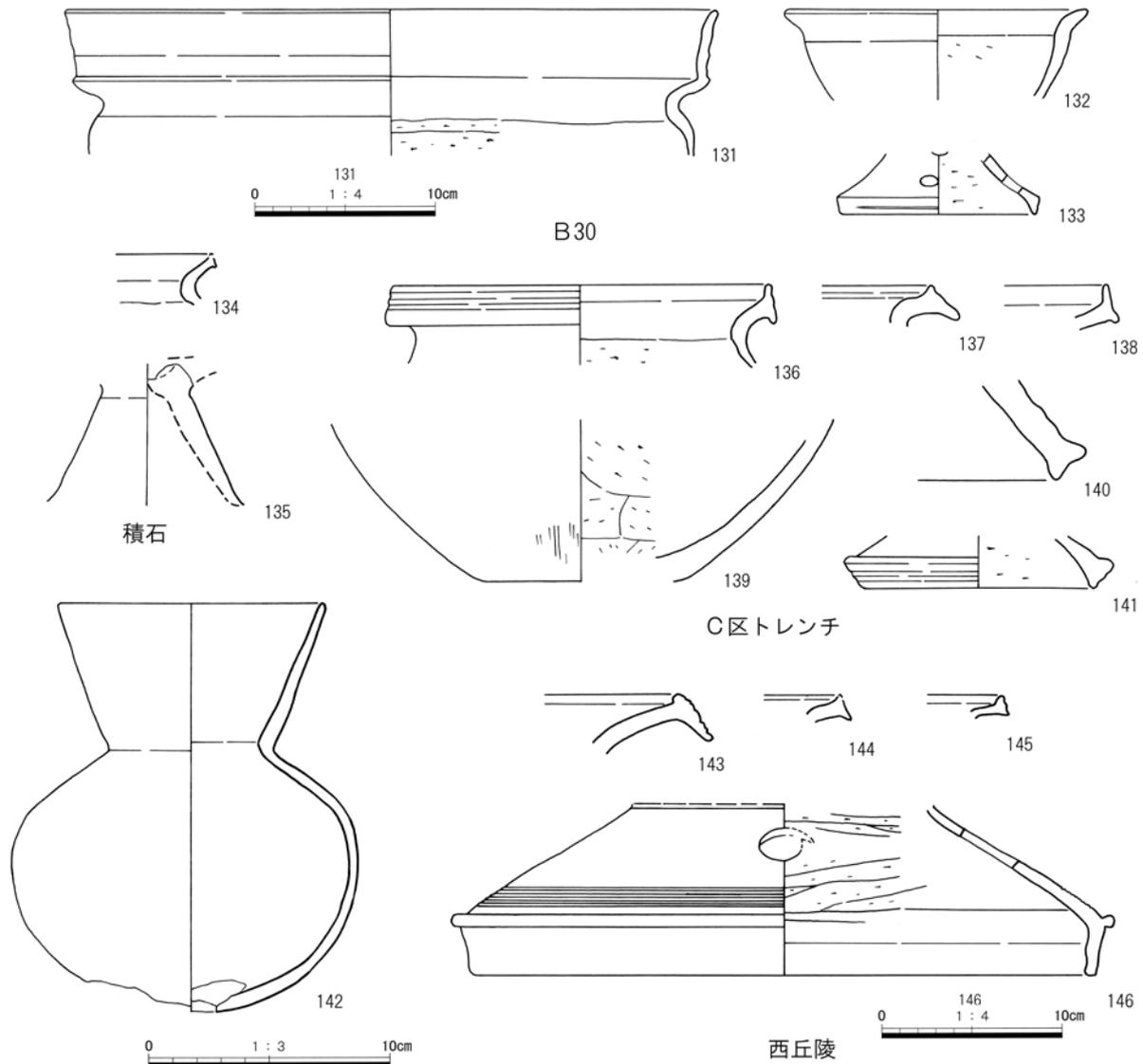


図34 墓群出土土器(4)

遺構に伴わない遺物(図34) 134、135は墳丘墓南側の積石遺構からの出土である。135は小形器台の脚部で、内面全体が剥離している。136～141は遺跡の西側部分、C区北側に設けられたトレンチからの出土である。後期各時期の破片が出土している。140は比較的大きな器台の破片である。

142は帰属遺構が不明の直口壺である。底部に焼成後穿孔がなされる。外面の下半を中心にユビナデ調整が痕跡的に残る。

西側の丘陵(図34) 143～146は切り通しの西側、西の丘陵の東端部で現在は切り下げられた箇所からの出土である。壺147、甕144・145が出土している。146は向木見型の小形特殊器台の脚部で、遺存状態が良い。裾部は丹塗りで巴形の透かし孔を配する。遺物量は少ないが東の丘陵と同様の年代幅であり、墓群は鞍部をこえて西に広がる事がわかる。

### (3) 古墳時代後期・弥生時代中期の土器

埴輪・須恵器(図35) 147～149は墳丘墓の北裾および東裾からの出土である。円筒埴輪147・148は粗いタテハケ調整で、須恵器杯蓋149が同時期になるかと思われる。調査範囲よりも東の尾根に

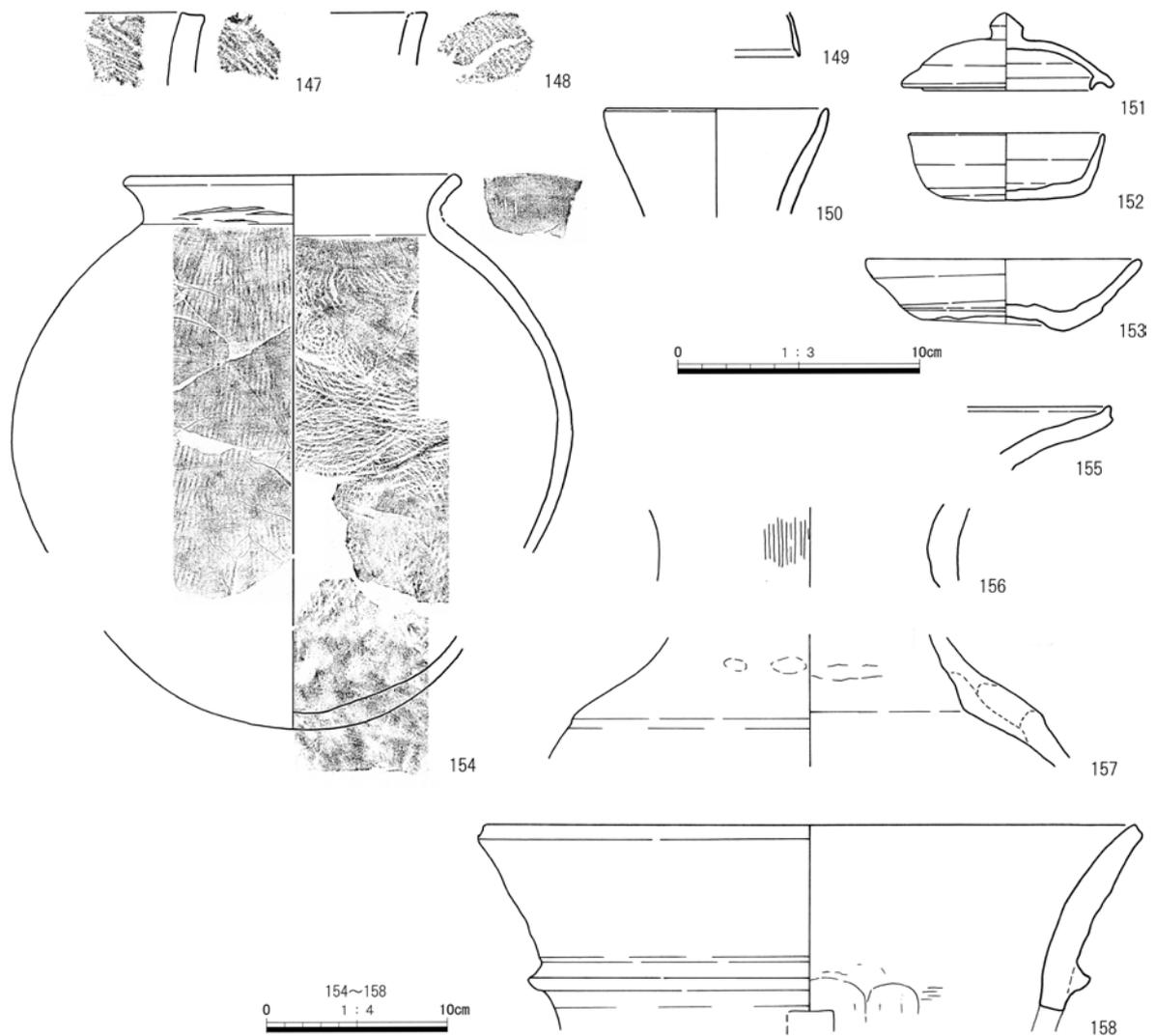


図35 埴輪・須恵器

後期前半の古墳が所在するのであろう。

須恵器甕154も墳丘墓東裾からの出土で、個体の半分以上の破片がある。内面の汚れからすると石室等の中に置かれていたようで、乱掘で掘り出されて投棄された可能性が強いように思われる。墳丘墓東側の尾根に後期古墳も所在すると思われる。頸部外面には縦3本線のヘラ記号がある。外面下部はナデ仕上げ、内面も下部はタタキ目をユビオサエとナデでつぶしている。6世紀代。

須恵器壺口縁150はB 1からの出土であるが、弥生後期の土器片も出土しており、混入の可能性もある。6世紀末頃か。151・152は丘陵西端斜面に所在するB 4からの出土である。箱式石棺を思わせる狭い石室内に副葬されていた。B 4は終末期の古墳である。153はB 2付近から出土の古代末～中世の杯である。ここからはその時期の土器小片や須恵器片も少量出土している。

155～157は宮山遺跡の東側山頂に所在する天望台古墳で採集された資料である。軟質の焼成で、保存状態もよくない。157は上下逆で受け部付近の可能性もあるが、内外面の色調から肩部と考えた。この古墳からは壺形埴輪と円筒埴輪、不明形象埴輪が採集されており、これらは壺形埴輪の上部と思われる。この調査によるものではないが、三笠山古墳採集の埴輪158をあわせて掲載しておく。

弥生時代中期の遺物(図36) 宮山遺跡では特殊器台や弥生時代後期の資料に混じって弥生時代中

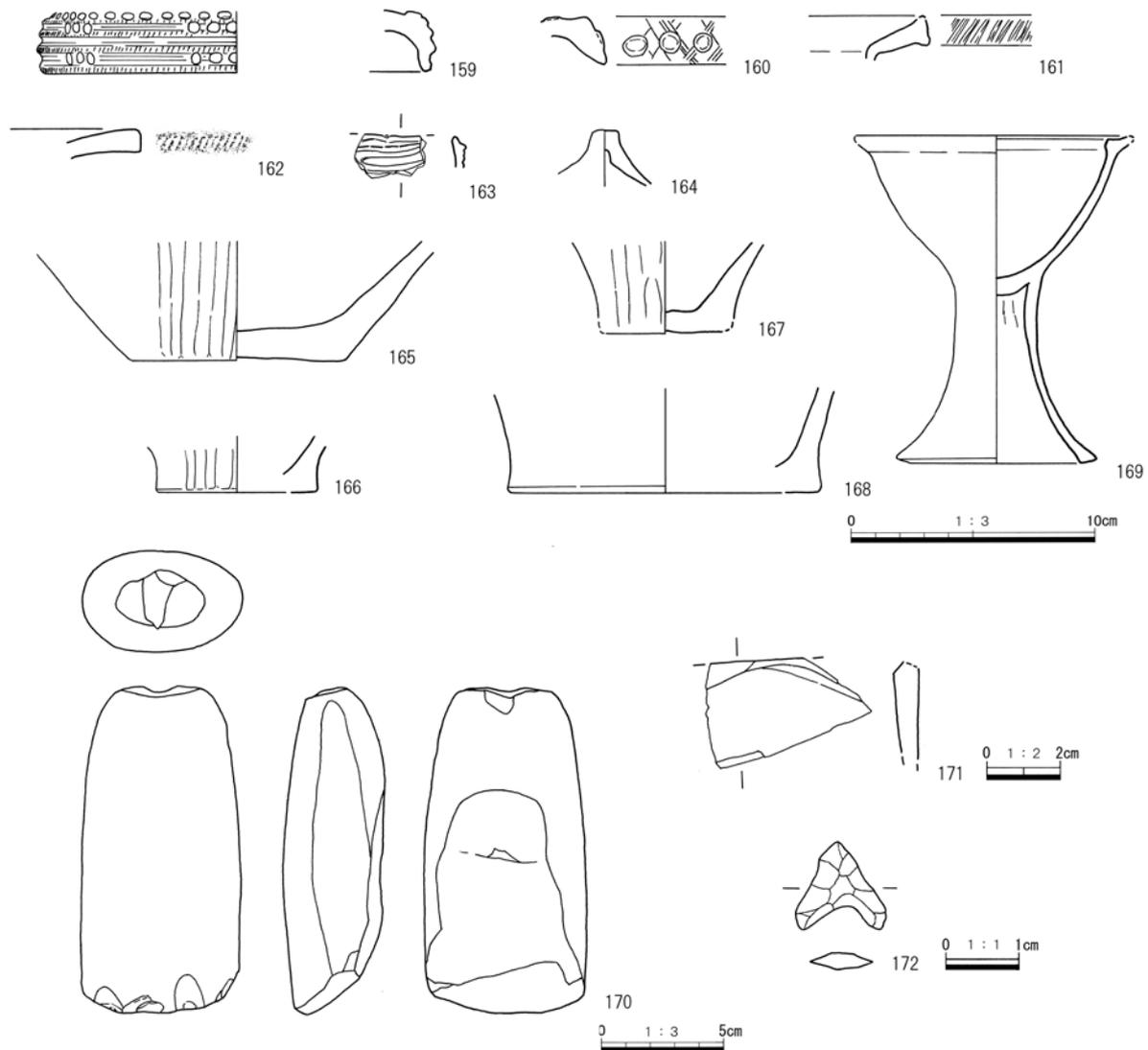


図36 弥生中期の遺物

期の土器が出土している（159～162・165～169）。出土は尾根全体にわたるが遺物の総量は少ない。土器は壺・甕・高杯からなり基本的に中期中葉で、その時期の集落が尾根上に形成されたとみてよい。高杯169は墳丘墓盛土からの出土で、個体の半ば以上が残る。これは他よりも古く中期前葉にさかのぼる可能性がある。

164は小形の手づくね土器で、蓋のようである。時期は不明。163は不明口縁部で、小さな突帯の下に細い弧線を入れる。これも時期は明らかでない。

170は太型蛤刃石斧である。先端部が折損した後も横斧として用いており、折損部に刃こぼれが生じている。風化が進んでいて石材は判断しがたい。171は粘板岩製の磨製石包丁の破片である。このほかにサヌカイトの小剥片が数点出土している。

172はサヌカイト製の石鏃で、縄文時代である。

## 7 出土土器の総括

### (1) 墳墓群の様相

墓群の形成は、87や143など断片的に見られる資料から後期前葉の末頃にはじまり、古墳時代前期まで継続することがわかる。これと同じ存続時期幅をもつ墓群として岡山市みそのお墳墓群、同甫崎天神山遺跡があり、他に、後期末で墓群形成を終える総社市前山遺跡、赤磐市前内池遺跡がある。宮山遺跡は吉備南部の墓群と共通の形成状況を示すが、最終段階にそれまでの墳墓とは各段に大きい墳丘墓が設けられることに大きな特色がある。

後期前葉から後葉にかけて墓群がどのように形成されていったかは明らかにしがたいが、その間の土器は尾根全体にわたって出土し後の遺構から混入の状態での出土が多いことから、重複気味に造墓がなされた可能性が考えられる。みそのお墳墓群や甫崎天神山遺跡では墓域を順次拡張あるいは移動させていくのに対し、前内池遺跡の中央部では継続して埋葬がなされており、宮山遺跡はそれに近いようである。なお、調査で検出された埋葬は配石木棺や「箱式石棺」など検出の手がかりが多いものが主体となっており、未検出の木棺がさらに所在すると考えられる。

後期末葉～古墳時代前期には尾根先端部に小方墳ないし墳丘墓と周辺埋葬、尾根東側に前方後円形の墳丘墓が設けられ、後者では墳丘をとりまくように無墳丘の埋葬が後続して設けられる。なお、前方部前面のB30は規模の大きな木棺であり、小墳の可能性もある。吉備の前期古墳で墳丘周辺を広く調査した例が少ないが、主墳の墳丘裾に随伴する形で埋葬が設けられた例は赤磐市用木4号墳が知られる程度である。宮山墳丘墓は弥生時代の墓群の様相を維持すると言えるようである。

### (2) 墳丘墓の年代

宮山墳丘墓からは、特殊器台以外に短脚の高杯等が出土した。焼成後穿孔がなされた個体を含んでおり葬送に用いられたものと判断できるが、年代が後期後葉から末葉にわたることから直接墳丘墓に伴うものではなく、墳丘墓に先行して設けられた埋葬からの流出等と考えた。したがって、それらの年代のうち後期末葉(IX a期)が墳丘墓の年代の上限となるが、先行する埋葬を考慮することなく墳丘を築いたとすれば、築造時期はそれよりもある程度下降することになるだろう。下限となるのは墳丘南くびれに葺石材を用いて設けられたB25で、古墳時代前期(X d・e期)の鉢24が伴い、付近から出土した壺88・甕89・高杯90もその年代である。墳丘墓の築造はこの2つの年代の間となる。これら以外に、前方部前側に位置するB30は底断面がU字形の長大な木棺を用いており、墳丘墓の竪穴式石槨よりも後出すると考えられ、これに伴う鉢131のX b～c期をもう一つの下限として扱うことができる。

墳丘墓に伴うのは特殊器台と特殊壺のみであるため、年代を絞り込むことはむずかしいが、以前述べられた後期後葉(VIII d期)よりも年代は下り、墳丘墓の築造はX期の早い段階と考えられる。奈良県箸墓古墳の年代、布留0式を吉備のX期の細別型式のいずれにあてるとかは研究者によって若干の差があるが、この年代見積りは布留0式と併行ないしやや先行に位置づけられる。

尾根先端に築かれた墓群については、B9の土器で古墳時代前期に造墓活動の一時点があったことがわかる。特殊器台棺はB9と同じ軸線のものであり、墳丘墓の築造から若干時期を経て特殊器台棺が設けられたとみられる。

### (3) 特殊器台・特殊壺の個体数と配置

**出土個体数** 棺に使用された特殊器台のうち特殊器台2は墳丘墓から破片が出土しており、土器は部分的に損壊していたとみられるが、口縁部63の出土位置から、特殊器台棺に近い位置に特殊器台2・3を運んで分割し、長さ約30cmの長方形などにしたと考えられる<sup>(14)</sup>。したがって、特殊器台棺に用いられた特殊器台1～3と、墳丘墓出土個体を合わせたものが配された特殊器台の数となる。個体数の算出には口縁部や脚部の数を用いることが多いが、それらは破片の数が少ないため、墳丘墓出土資料の記載では、頸部をおもな手がかりとして4～10の個体番号を割り振った。特殊壺は下段突帯で集計すると16・30・33・34・45・67・68の7個体である。

特殊器台片は基本的に崩落・堆積した葺石材の円礫とともに出土しているが、墳丘裾のすべてにわたってそうした堆積が形成されているわけではない。また、特殊器台等は図示した破片よりも小さいものはかなりあるとはいえ、土器の大きさに対して破片の総量はかなり少なく、最も破片がまとまる特殊器台4にしても破片の量は全体の1/4にも及ばない。墳丘墓下方の丘陵斜面に転落した葺石の円礫が点在する状況を見ることができ、それと同様に多くの破片が流出しているとみてよい。北くびれ部出土の破片は器面の状態や色調がまとまるが、頸部を含まないため個体番号を付しておらず、頸部破片64も情報が少ないため加えていないことを考慮すれば、出土個体数は上記の10個体よりも多い可能性は強い。この墳丘墓に用いられた特殊器台の数は確実なところで10、流出を考慮すれば、少なくとも15程度の数はあったとみてよいと思われる。

**配置** 特殊器台や特殊壺の破片はすべて墳丘の裾からの出土である。本来斜面に設けられた葺石材に混じる形で出土していること、流出の影響が最も少ないとみられる後円部後端の東裾部、あるいは破片が比較的まとまる北くびれ部などでも脚部や裾部の破片が特に多くはないことからすれば、特殊器台等は基本的に後円部墳頂に配され、一部が前方部上に配置された可能性が強い。

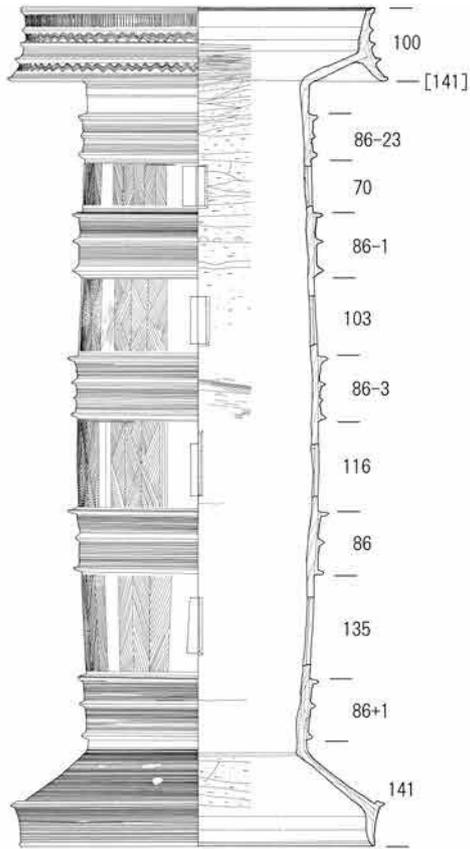
棺に転用された個体のうち特殊器台1は、棺に用いた段階では突帯の剥離は生じているが土器としては完形であったと考えてよい。また、上記のように特殊器台2や3は丘陵西端の特殊器台棺設置位置の近くで破片にしたと考えたが、ほぼ完形あるいはそれに近い状態であって運ぶことができたと考えられる。葬送儀礼終了後、破碎してその役割を終了させるという手法がとられなかったことは確実である<sup>(15)</sup>。測量図や現状から、後円部頂の平坦面は、かなり狭いものであったと判断できる。ここに配された特殊器台の実数を推定することはむずかしいとはいえ、かなりの数であり、それまでになかった景観を形成したと考えられる。

### (4) 宮山遺跡特殊器台の諸特徴

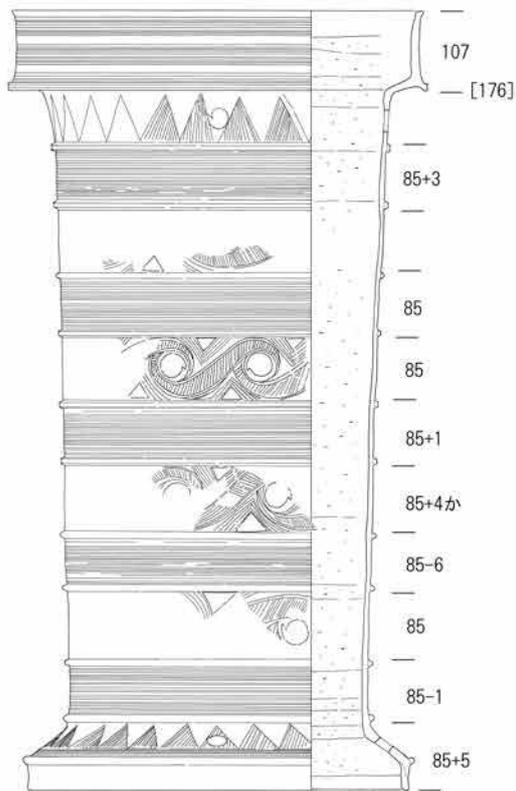
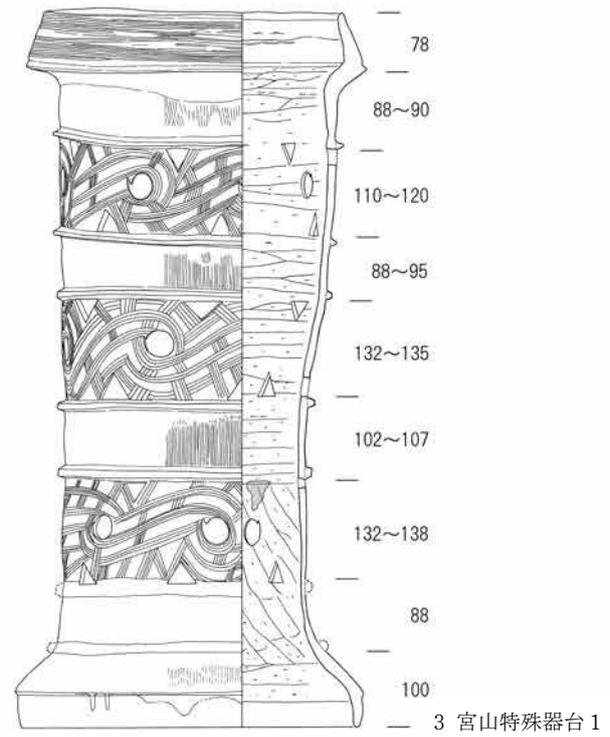
宮山遺跡特殊器台は、筒部の上方を広くするという器形は前型式の向木見型から継承するものの、以下に述べるように、それまで受け継いできた要素の多くが消失する。このことがこの特殊器台の大きな特徴である。

**小形化** 特殊器台は向木見型まで一貫して大形化、とりわけ筒部を太くする方向に変化してきたが、この型式で縮小し、かつての立坂型の大きさに近いものとなる。

**間帯の無文化** 間帯は施文が消失し無文となる。特殊器台の古い段階ではヘラ状の工具、後には櫛状工具、さらにハケメ原体を用いた平行沈線がこの部分に配されてきた。特殊器台を特徴づける必須の施文であり、これによって横方向の帯を表現したと考えるが、それを取りやめて特殊器台に



1 割付けA：楯築墳丘墓



2 割付けD：西江遺跡

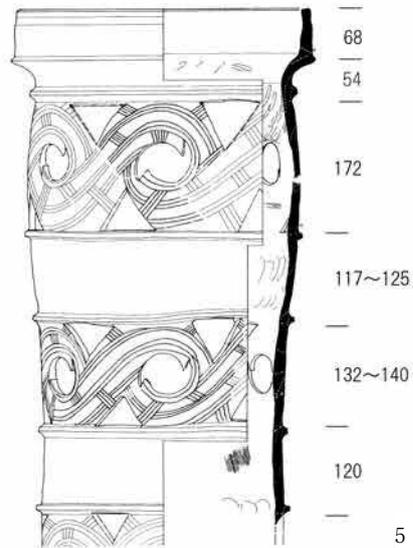
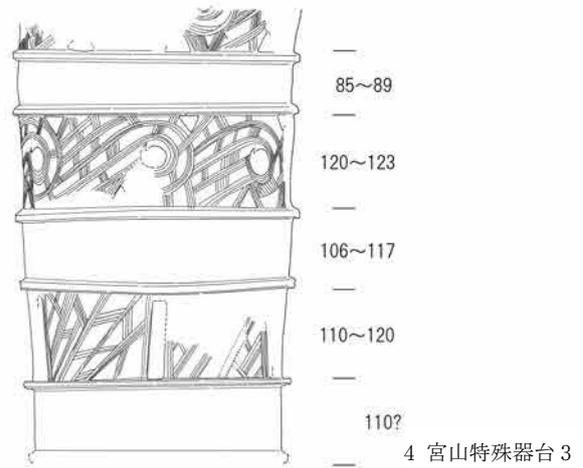


図37 特殊器台の割付け

表示するのは文様帯のみとなる。

**文様帯の段数と施文沈線** 文様帯はそれまでの4段から3段に減少する。これは文様帯の幅を大きくしたことに起因する。それまでの特殊器台では文様帯に帯を隙間なく充填するかのように文様を刻むが、拡大された文様帯に刻まれる宮山型文様は帯と帯の間隔を広くとった文様であり、それを描く沈線も太く深いものを含むようになる。離れて見ても帯の渦巻きがわかりやすい文様が刻まれる。

**割付けの消失** 上下に連なる文様帯と間帯、脚部の幅を決めて特殊器台全体をどのようにデザインするかは時期的に変化する(宇垣2023a)。図37には宮山型とそれに先立つ型式の割付けを示した。数値はmmである。1の榑築墳丘墓は文様帯幅を上にもむかって狭くする割付けA、2の新見市西江遺跡は文様帯幅を等しくする割付けのうちDである。後者では脚部の高さも間帯幅にそろえる。1の第5間帯や2の第2文様帯・間帯はデザインとして幅を変化させたと考えている。ある程度の誤差は当然生じることになるが、それは±で付した数値、2、3mmに収めてある。これに対して宮山遺跡特殊器台1では第1・第2文様帯の幅を同じにしようとしたようであるが、突帯が水平にならないため厳密なものとなっていない。また、間帯の幅が同一であることが文様帯割付けの前提となるが、間帯幅は最大11mmの誤差を生じている。前型式までの緻密な割付けはなされていないが、これは後述する葛本弁天塚古墳も同様である(図37-5)。なお、別の機会に述べたいが、割付けは特殊器台形埴輪に継承される。

**形態のばらつき** 個体それぞれの形態的な差が顕著である。筒部上端の形状差が最も顕著で、文様帯から直接受け部になる特殊器台7(掲載番号4)、文様帯上端に突帯を配しその上に短い頸部を設ける同1(1)・9(5)・10(37)、文様帯の上に第4間帯を設ける特殊器台4(54)・5(36)と、3種類の形態がある。口縁部形状も個体ごとに異なる。脚部の形状も特殊器台1と4は共通するが、7あるいは9(13)は異なる。これは特殊壺でも同様で、頸部形状、口縁拡張部の立ち上がりや胴部の突帯形状などは個体ごとに異なる。

**製作技術の拙劣化** 突帯と同様に口縁端部も水平にならない。また、特殊壺16が典型であるが、同一部位でも形状が異なる。内面調整も前型式との差が顕著で、向木見型の西江遺跡特殊器台1では器壁の最大厚さ10mmで、内面のヘラケズリはきわめて丁寧になされ、ケズリの稜が一見してわからないほどの面をしている。それに対し、宮山墳丘墓では特殊器台3が典型となるが、ヘラケズリは器壁を大きく削り取っており、仕上がりは考慮していないように見える。器壁は最も厚いもので19mmになる。また、筒部上方を厚くしているため土器のバランスにも難がある。

これらは、ことさらに雑な製品として仕上げることを意図したのではなく、技術的な落差が極端に大きいことによるとみられる。特殊壺16の断面を見る限り製作者はヘラケズリが不得手と考えざるをえないし、突帯の剥離が多いのも接合のタイミングに問題があるとみられる。製作体制の変化、土器製作に習熟した人から、そうでない人への交代が考えられる。上記の割付けや形態の変化も、このことが要因の1つと考える。

製作中になされる丹塗りのうち、今後の検討課題については註<sup>(16)</sup>に記したが、そのこととは別に、実施頻度の問題がある。特殊器台の場合、製作中の丹塗りは珍しいことではなく、以前の型式でもなされる工程である。細かく記してきたが、宮山遺跡資料ではこの作業はきわめて頻繁になされている。特殊器台3では20cmの間隔、特殊器台1ではさらに狭い間隔でなされ、特殊壺では10cm程度

の高さごとに丹塗りをを行っている。先行する向木見型の場合、特殊器台の丹塗り間隔はわからないが、特殊壺（西江遺跡特殊壺3）では丹塗り接合は胴部下段突帯と口縁受け部中ほどの2箇所にすぎない。丹塗り頻度の高さは、手順の形式化、あるいは製作時間が長くなった<sup>(17)</sup>ために行ったなど、入念さとは別の要件による可能性が強い。

**文様の斉一化** 前述の形態のばらつきとは反するが、文様の選択では斉一化が見られる。宮山型に先立つ諸型式、貝ヶ原型から向木見型まで、特殊器台は複数で用いられることも少なくなかった。そうした場合、個体それぞれに若干異なる文様を用いて土器それぞれの個性を表出させた。たとえば新見市西江遺跡では墓群の一角で4セットの特殊器台・特殊壺が用いられたが、それらではいずれもS字形の帯の巻き込みを基本図形とするものの、S字形の帯を平行線で描くか斜線の充填とするか、その帯に平行する帯を直線的にするかカーブをもたせるかなど、細部を変化させた4種類の文様をそれぞれに用いている。特殊器台ごとに刻む文様を変え、同じ特殊器台が複数あるということ Avoiding (宇垣2023a)。

宮山墳丘墓資料では特殊器台2・3・6の3個体では第1文様帯に長方形透かし孔を配し、それぞれに異なる文様を入れており、上記の差別化の手法をとる。その一方で、上記の3個体では第2あるいは第3文様帯には同じ宮山型文様を用いる。また、それ以外の7個体に遺存する文様はすべて宮山型文様であり、未掲載小片にもそれと異なる文様は認められず、特殊器台1と同様、全文様帯に宮山型文様を用いたと判断できる。前述の形態のばらつきを積極的に捉えれば逆の理解もありうるが、宮山墳丘墓資料では、個体の差別化は部分的に維持するが一部に限られ形骸化すると評価できる。なお、一部の個体に他と異なる文様を配する手法は下記の葛本弁天塚古墳（図38-6）にも見られる。

#### （5）他の資料との先後関係

宮山型に分類できるのは、宮山墳丘墓のほか、岡山市津島遺跡、矢藤治山古墳、奈良県中山大塚古墳、箸墓古墳、西殿塚古墳、葛本弁天塚古墳の資料である。吉備の資料のうち、津島遺跡出土資料（以下、出土資料は省略）（図38-1）は器壁の厚さや突帯形状の類似から宮山墳丘墓と同時期とみてよい。一方、矢藤治山古墳（図38-2）はまとまった資料であるが、別系統となるため先後関係の対比は困難である。あえて判断すれば、空白域をかなり広くとる文様であり宮山墳丘墓よりも後出の可能性が強い。

前方後円墳成立の指標となる箸墓古墳との比較が重要な課題となるが、小片が主体であるため踏み込んだ検討はむずかしい。しかしながら、資料が比較的豊富な葛本弁天塚古墳は箸墓古墳と同じ特徴をもっており、この資料と対比することによって箸墓古墳との関係も把握できる。

宮山墳丘墓特殊壺は、ハ字形の頸部にクシ条工具による平行沈線を配して向木見型特殊壺の形態を引き継ぐ29以外に、無文で筒状の15、両者の中間的な形態の62・66の3者がある。葛本弁天塚古墳の特殊壺頸部（図38-7・8）は15の形態であるが長くなる。特殊壺の突帯は貼り付け突帯（図38-9）と痕跡化した突帯（図38-7・10）の2者からなるが、これは宮山墳丘墓（30・67、16・68）と同様である。葛本弁天塚古墳の特殊器台には2つの特徴がある。1つは脚裾部の角度が急になり、脚直立部を含めて緩やかに開く形態となることである。もう1点は文様の諸特徴であり、上下両端に配置される三角形透かし孔が宮山墳丘墓よりも大きくなること、帯を構成する沈線の数が宮山墳丘

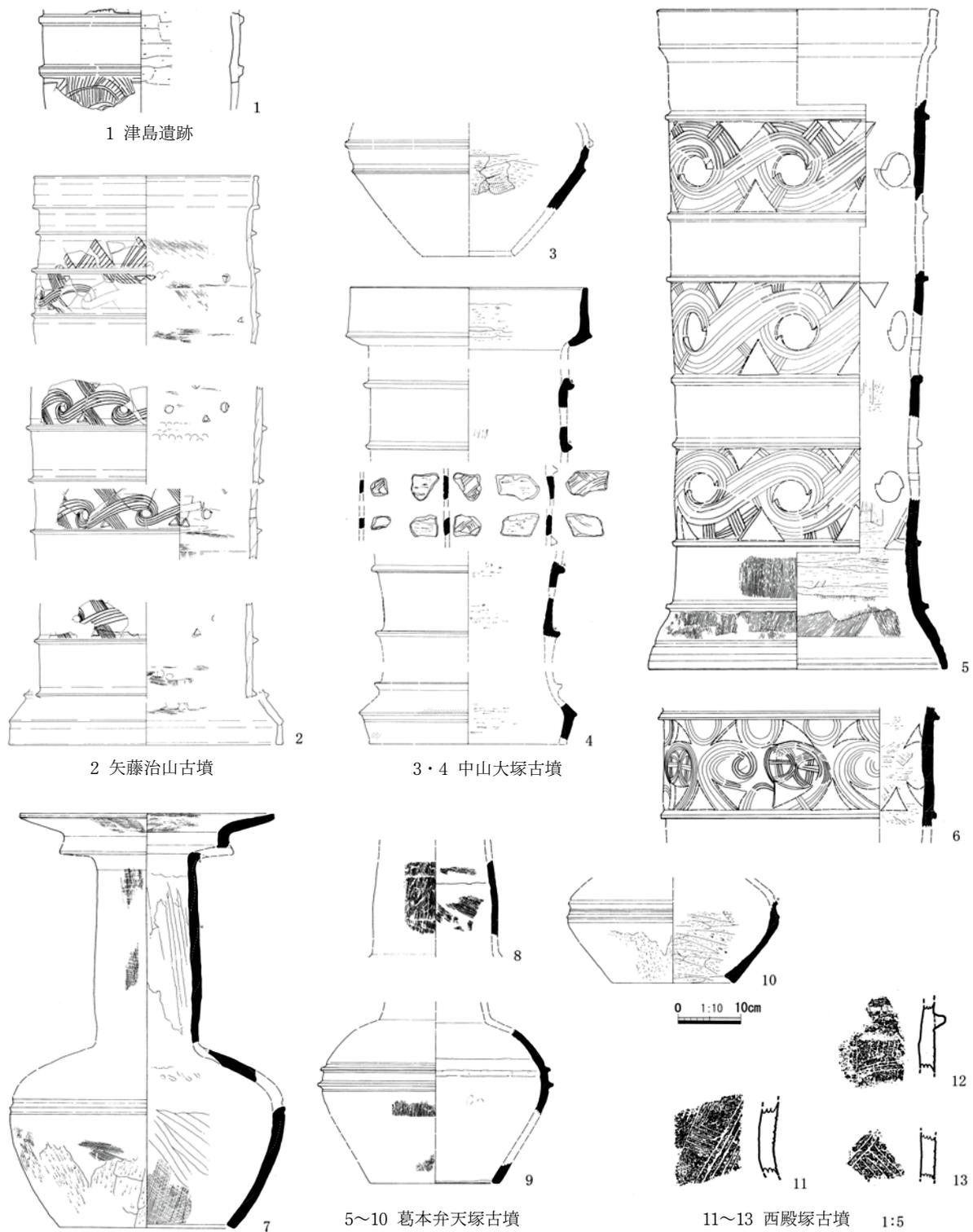


図38 関連資料

墓の4ないしそれ以上から3に減少すること、S字状帯の間にそれと斜交して配される帯が減少することである。

これらの点から葛本弁天塚古墳・箸墓古墳は宮山墳丘墓よりも後出すると判断できる。形態、そして文様の変化は特殊器台の大形化<sup>(18)</sup>、筒部径の増大に対応したものと考えられる。宮山墳丘墓と箸墓古墳では墳丘の大きさが全く異なるが、それに合わせて特殊器台の大形化が図られ宮山型が改

変されたと考える。

中山大塚古墳(図38-3・4)は吉備からの搬入品である。特殊器台の文様は宮山墳丘墓と同様で、特殊壺は胴部下段突帯が痕跡化している。西殿塚古墳(図38-11~13)は小片がわずかに出土しているにすぎないが、文様は細かく、大形化した製品とは考えられない。この2古墳の資料は葛本弁天塚古墳・箸墓古墳に先行し、宮山墳丘墓に前後する時期と判断する。なお、この2古墳の資料は製作時期と最終的な使用の時期に差をもつと考えている。

#### (6) 画期としての宮山型特殊器台

先に示したように、宮山遺跡特殊器台はそれまでの特殊器台が継承してきた特徴の多くを消失した形で成立するが、土器の最終的な取り扱いもそれまでとは異なる。

宮山墳丘墓の特殊器台は3個体が後に特殊器台棺として用いられることから破砕されない状態で墳丘上にあつたと考えた。また、葛本弁天山古墳では破片の出土状態から祭祀後は形状を保っていたと考えられている。したがって、これらでは葬送儀礼後も墳丘上に多数が林立した状態であつたとすることができるが、中山大塚古墳では特殊器台は竪穴式石槨の被覆石材上に破砕した破片が散布されたと判断された。宮山型よりも前の特殊器台諸型式で土器が葬送儀礼の後も立てたままであつたことを示す例はない。西江遺跡では脚直立部が並んで埋め込まれた状態で検出され、配置された状態を示すとみなしてきたが、火を用いて裾部よりも上を破砕させた状態であつたことが明らかになった(宇垣2023b)。広島県矢谷MD1号墓では破砕されたものが墓に置かれた可能性が指摘されており、楯築墳丘墓中心主体上出土の特殊器台も破砕されたと判断できる。宮山遺跡資料に先行する特殊器台は祭祀の後に割って片付けるのが基本であつたとみてよく、上記の中山大塚古墳が最後の例となる。

宮山型文様が緻密であることよりも離れて見てもわかりやすい文様であることを指摘したが、この傾向は葛本弁天塚・箸墓でさらに強調され、三角形の透かし孔も大きくする。一貫して文様の視認性を高めているわけであるが、それは墳丘上に立て置くという使い方を反映したものであり、土器の多少の粗雑化は許容されることになったとみられる。

後の円筒埴輪でなされる埋葬施設の圍繞、同器種の大量配列は宮山墳丘墓を起点とすると評価できる。宮山墳丘墓資料の諸特徴は特殊器台祭祀の質的な転換を示すものであるが、これはそれまでの特殊器台にあつた様々な約束事を断ち切る形で生じており、吉備で維持されてきた祭祀の発展によって生み出されたとは考えにくい。箸墓古墳をはじめとする出現期の前方後円墳に特殊器台が用いられたことは古墳の祭式に吉備の祭祀が導入されたことを示すが、単純にそれが取り入れられたのではなく、古墳祭式創出の主体が要素の取捨選択を行い、特殊器台の使い方や配置などについて新たな性格を付与したと理解できる。それを受けて製作されたのが宮山墳丘墓の特殊器台であり、吉備と大和の間に十分な意思の疎通があつたことを示すと考える。

#### おわりに

宮山墳丘墓は古墳時代のはじまりとなる箸墓古墳よりも若干先行して築かれたと判断した。弥生時代末から古墳時代初頭という以上に年代を絞り込むことがむずかしい墳墓も少なくないが、確実に弥生時代最終末、古墳出現前夜という年代を与えることができる資料である。

副葬品の量は豊富とはいいがたいが、鏡と複数の武器、玉からなり、この地域の先行する墳丘墓では見られない構成である。副葬された飛禽鏡は2世紀末から3世紀前葉に華北東部で製作され、三角縁神獣鏡に先行して近畿中央部から分配されたものと判断した。また、武器では、近畿中央部からの入手とみられるのが有稜系柳葉式鉄鏃であり、剣形武器と鉄刀もその可能性が強いと考えられる一方、平根系定角式鉄鏃と銅鏃はそうした広域性は示さない。以降に盛んになされる威信財の配布、それがはじまろうとする状況を副葬品に見ることができる。特殊器台については、上記のように近畿中央部が新たな性格を与えることにより大きく変化したと考えた。いずれの分析においても、近畿中央部とのかかわりが指し示される。

宮山墳丘墓には長さがある前方部や葺石といった後の前期古墳に見られる要素が出現するが、竪穴式石槨は短く東頭位で、礫床は平坦であるなど弥生時代後期後葉以来の要素をもつ。受け手の理解や伝統の保持などの問題がかかわる可能性もあるが、近畿中央部が主体となって進めた前方後円墳創出の過程、前方後円墳の諸要素が定まってく状況を示すと考えてよい。宮山墳丘墓は、何をもって古墳とするか、古墳とは何かを改めて問いかける資料ということができる。

ここでは論及に至らなかったが、宮山墳丘墓が所在する備中南部地域では古墳時代前期の前方後円墳の築造は低調であるし、宮山型特殊器台は継続しない。これらが意味するところを綿密に考えていくことが今後の課題の一つである。

宮山遺跡の発掘調査は、特殊器台、そして古墳以前の墳墓についての研究の起点となった調査である。調査で得られた成果を十分にまとめられたかという恐れはあるが、ここに提示した資料と評価が前方後円墳成立についての議論に寄与するところがあれば幸いである。

この報告で示した宮山遺跡出土遺物は、岡山県立博物館に収蔵している。

図17 SfM-MVS画像作成にあたり、山口雄治氏にご協力いただいた。表3に示した吉備の資料の時期比定や6章の記述にあたり河合忍氏から多くのご教示をいただいた。また、平井典子氏から出土土器や関連資料についてご教示いただいた。記して感謝を申し上げる。

《註》

- (11) 胴部下半のやや大きな破片(春成2017図4-12・14)があり2点は接合できる。下端は穿孔面ではなく破面と見たほうが良く、復元径を出すことも困難なため図示していない。
- (12) 後期後葉(VIII d期)とする調査者高橋護氏の判断(高橋1984)を尊重しなければならないが、それよりも古い位置付けを考えた。
- (13) B8・B11の遺物を含む。
- (14) 未注記であるため確実な資料とはしがたいが、特殊器台2と判断できるが図示の大形破片には接合しない破片を含む小破片のまとまりがある。これらは特殊器台棺墓壙内出土と推定している。
- (15) 特殊器台棺は宮山遺跡以外にいくつかの例がある。それらに用いられた特殊器台は集落で保有されていたものと考えている(宇垣2013)。
- (16) 特殊器台1と2などで突帯貼り付け面が濃い丹塗り以外に、ごく薄い赤色を帯びる箇所があることを述べた。薄い丹が塗られたのか突帯の接合が不十分で丹が浸透したのかなど、いくつかの可能性が考えられるが、成因を理解するに至っておらず、さらに観察や分析が必要である。また、ここでは指摘にとどまったが、いずれの個体でも第1文様帯上部内面に丹が残る箇所がある。特殊器台の製作工程理解の手がかりとなるものであり、他の資料とあわせて検討する必要がある。
- (17) 丹塗りは土器が半乾きの状態でなされたと考えている。

(18) なお、春成2017には箸墓古墳特殊器台の図が示される。図からの判断であるが、脚端が水平にならない、脚端まで丹塗りがなされる、裾部と間帯の間に隙間があるといった特徴を指摘できる。特殊器台脚下端の直立部は地中に埋め込まれることを前提に製作されており、丹塗りは常に裾部から上になされる。これらのことから、図の天地は逆と判断できる。葛本弁天塚古墳よりもさらに大形化させた箸墓古墳の特殊器台は、口縁部が矮小化すると考えられる。

《参考・引用文献》

宇垣匡雅2013「特殊器台・特殊器台形埴輪に関する一考察」『日本考古学』第36号  
宇垣匡雅2023a「特殊器台の変化と画期」『古代出雲と吉備の交流』島根県古代文化センター研究論集第30集  
宇垣匡雅2023b「西江遺跡特殊器台の再検討」『岡山県立博物館研究報告』第43号  
高橋護1984「組帯文の展開と特殊器台」『岡山県立博物館研究報告』第5号  
高橋護1986「上東式土器の細分編年基準」『岡山県立博物館研究報告』第7号  
高橋護1988「弥生時代末期の土器編年」『岡山県立博物館研究報告』第9号  
春成秀爾2017「宮山系特殊器台の研究」『岡山県立博物館研究報告』第37号

《遺跡文献》

一丁坵1号墳：総社市教育委員会2014『一丁坵古墳群－市指定史跡古墳確認調査－』総社市埋蔵文化財調査報告23  
葛本弁天塚古墳：奈良県立橿原考古学研究所1996「葛本弁天塚古墳」『中山大塚古墳』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第82冊  
斎富遺跡：岡山県古代吉備文化財センター1995『松尾古墳、斎富古墳群、馬屋遺跡ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査99  
楯築墳丘墓：宇垣匡雅2021『楯築墳丘墓』岡山大学文明動態学研究所・岡山大学考古学研究室  
中山大塚古墳：奈良県立橿原考古学研究所1996『中山大塚古墳』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第82冊  
西江遺跡：岡山県教育委員会1977『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査10』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告20 宇垣2023b  
西殿塚古墳：宮内庁陵墓調査室1991「衾田陵の調査」『書陵部紀要』第42号  
箸墓古墳：宮内庁陵墓調査室1999「倭迹迹日百襲姫命大市墓被害木処理事業（復旧）箇所調査」平成10年度陵墓関係調査報告『書陵部紀要第』51号  
甫崎天神山遺跡：岡山県古代吉備文化財センター編1994『郷境墳墓群 前池内遺跡 黒住雲山遺跡 甫崎天神山遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89  
前内池遺跡：岡山県古代吉備文化財センター編2003b『前内池遺跡 前内池古墳群 砂古遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告174  
前山遺跡：岡山県古代吉備文化財センター編1997『前山遺跡 鎌戸原遺跡』国道429号線改良に伴う発掘調査Ⅰ 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告115  
みそのお遺跡（墳墓群）：岡山県古代吉備文化財センター1993『みそのお遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告87  
矢谷MD1号墓：広島県教育委員会・（財）広島県埋蔵文化財調査センター 1981『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告書－三次工業団地建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査－』  
矢藤治山古墳：近藤義郎ほか1995『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団  
用木古墳群：山陽町教育委員会1975『用木古墳群』岡山県山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報1

《図出典》

図37 1 宇垣2021、2 宇垣2023b、5 奈良県立橿原考古学研究所1996  
図38 上記遺跡文献から引用

